

攻玉史論

攻玉社学園歴史研究部機関誌 第一号



歌川国芳『太平記英勇伝 大多上総介平春永公』

目次

部長挨拶	p002
主研究 『織田信長』	p004
第一章 黎明期の信長	p005
第二章 信長包囲網の信長	p017
第三章 絶頂期の信長	p034
第四章 織田家の政策	p039
第五章 織田家と織田家臣団	p049
個人研究	p068
古代史	p069
中世史	p087
近代史	p096
活動報告	p120
発刊に際して	p121
編集後記	p122

部長挨拶

この部誌を手にとって頂きありがとうございます。本来ならば、本日は歴史研究部にお越し下さいましてありがとうございます。って書く予定だったのですが、新型コロナウイルス感染症の影響で、輝玉祭がオンライン開催となってしまいました。このような形で部誌を発行させて頂くことになりました。そのような中でも、この攻玉社歴史研究部の部誌を手にとって読んで頂けることは、誠に感謝の念に堪えません。

さて、私は先ほど「部誌」という言葉を使いましたが、ここ最近（と言っても10年ぐらいの話ですが）は、輝玉祭で配布する、「パンフレット」のみを発行していました。今年度より、過去にはあった「部誌」を復活させるという形で、創刊・発行することとなりました。違いは、厚みと中身です。まず、かなり分厚くなりました。というのも、輝玉祭のパンフレットは来場者の方全員に配るので、あまりお金をかけられず、学校で製本の出来る、B4紙10枚、B5版40ページに収めなければならないので、年度のテーマの記事を載せてしまうと、かなり字数が制限され、特に自由記事のページ数はかなり薄いものにならざるを得ませんでした。そこで、輝玉祭でも少数部・希望者のみの配布とする代わりに、より分厚く、より中身を充実させていこうという結論に至りました。~~正直お金さえあれば、来場者全員配布したいんですよ？~~

かくして、10年ぶりぐらいに復活することとなった部誌ですが、今回の内容を紹介していきましょう！大きく分けて、テーマ記事と自由記事に分かれます。

今年度のテーマ記事は、織田信長についてです。誰もが知る織田信長ですが、詳しく知れば知るほど、より面白いです。やはり、天下を取ろうと考える人は、考えが違ってくるのか、腕っぶしが強いだけでも、ただ賢いだけなのではなく、複合的に賢く、強い、そして何より胆力がある。そんな気がします。いくつかの分野に分けて考察していますので、是非部員たちの研究成果をご覧ください！~~ちなみに私は足利義昭拳兵のところを書いているので、是非ご覧ください。~~

自由記事は、その名の通り、部員が自由に選んだテーマで記事を書いています。歴史研究部の部員それぞれが気になっていることが分かります。特定の時代に固まることなく、個性豊かなのが特徴です。~~ちなみに私は「大陸打通作戦」の記事を書い~~(ry

この部誌はまさに一年間の集大成となります、是非部誌を最後までお楽しみください！

さて、お世辞はここまでです。「部誌をちゃんと書いてくれるなんて、ありがたい！」でも、「なぜ参考文献がWikipediaしかないんだ！」とか、「短すぎ！ナメてんのか！」と思うときもあり、期限を1カ月ぐらい過ぎたり~~(なんと驚き、部長はこの挨拶と自由記事を発行前日に書いています)~~、音信不通になったりと、実に歴史研究部らしい出来事ばかりです。

さて、部長の愚痴はともかく、今年度の活動は、コロナながらも、かなり賑やかなものになりました。歴研有史以来、最多となる部員を擁し、過去最大の規模の活動が出来たかなと自負しております。輝玉祭がオンラインとなり、動画投稿も行っています。こちらも是非、ご覧ください。

輝玉祭歴史研究部再生リスト

<https://youtube.com/playlist?list=PL9h9CcVlr1t5b1b9HDESMgXanT6yy1B0J>

また、完全に私の趣味を持ち込んだようなものですが、部でやるウォーゲームは楽しかったです。あとは、Twitter始めたり、新しいことをいろいろしようとしたりしましたが、どうでしたかね。合宿中止や、輝玉祭がオンラインになってしまったのは心残りです。

すが、それでもこれだけ活動出来たことは、ひとえに部員のみんなや顧問の先生方、そして先輩方の支えあってのことです。本当にありがとうございました。

今年度の活動や部誌を作り上げるのに協力してくれた部員のみんな、本当にありがとう。そして、部誌の創刊に尽力してくれた編集長はじめ編集課のみんなも本当にありがとう。おかげさまで、こんなに良い部誌を作りあげることが出来て部長やってきて良かったと思っています。

そして、後輩諸君！来年度以降、歴研を頼んだぞ！

最後になりますが、この度は、部誌を手にとって頂き、本当にありがとうございました。来年度以降も、部誌の発行と公開は行う予定ですので、来年度も是非、お願いいたします。そして、来年度こそ、輝玉祭の歴史研究部のブースにてお会いしましょう！

令和三年十一月五日 攻玉社歴史研究部 部長 永安世範

主研究

「織田信長」



豊宣『新撰太閤記 織田信長 柴田勝家』

織田信長という日本史上唯一無二の英雄を単純な戦争のみでなく、その血統・政策・家族・家臣にいたるまで、様々な視点から学術的に考察をした。風雲児・信長には、戦国の世が如何に見えていたのだろうか。

第一章 黎明期の信長

編集担当 平原昊

この章は、信長が徐々に頭角を現しだした黎明期についての論文を集約したものである。一般的に、桶狭間の戦いはよく知られているが、信長の血統や信長の上洛などを知ることによって、信長の強さのルーツについてわかることがあるのではないだろうか。

目次

信長の血統	p06	22R	藤原健太
信長の家督相続	p07	42R	大堀弘誠
桶狭間の戦い	p11	25R	富川和馬
美濃攻略戦	p12	26R	西脇叶多
信長の上洛	p14	32R	古川周平
コラム 清州同盟	p15	16R	武悠也



刀剣ワールド財団（東建コーポレーション）所蔵
月岡芳年作 『桶狭間合戦 稲川義元朝臣陳没之図』

この浮世絵は桶狭間の戦いで信長に敗れた戦国大名今川義元を題材にして描かれたものだ。作者の月岡芳年は幕末から明治にかけて活動しており、「最後の浮世絵師」とも呼ばれている。

はじめに

今年のテーマは織田信長である。織田信長は歴史の中でとても有名な戦国大名である。そこで今回は織田信長の血統について書いていこうと思う。

1 織田氏の由縁

織田家ははっきりとはしないが藤原氏の子孫だと言われている。後の家系図でも示すが藤原信昌・将広という者の一族は劔神社の神官だった時、将広が当時越前守護の斯波義将の家臣になる。

斯波氏が尾張守護職になった時、将広は故郷の地名をとって織田と名乗る。その為織田家は藤原氏の子孫だと考えられている。

2 信長の父（信秀）の事績

信秀は 1511 年勝幡城主織田信定の長男として生まれる。信秀の生まれたあたりの織田家は尾張全体を率いる程の大勢力ではなかった。しかし信秀はこれから飛躍的に勢力を伸ばすこととなる。

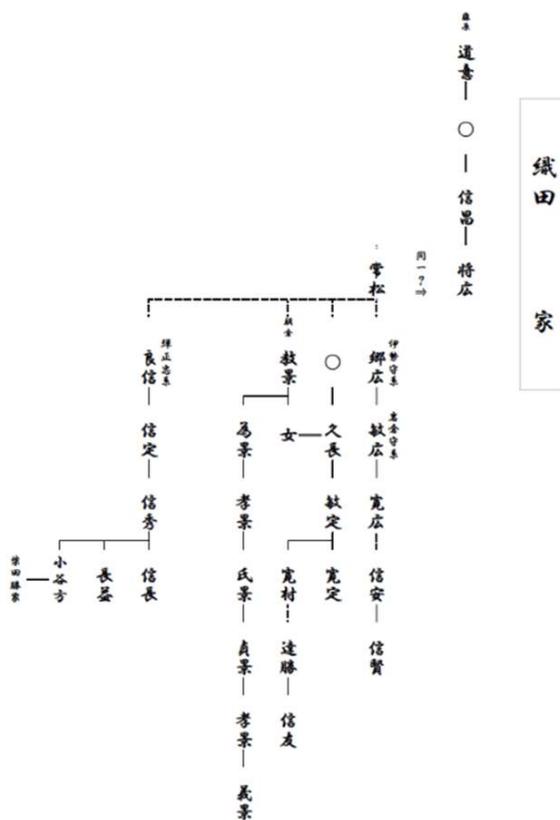
信秀のいる勝幡城は尾張国の海東郡の西端にある城であるが、西にある海西郡では服部左京助らによる一向一揆の勢力が強くとて手を出すことが出来なかったため、信秀は東方を侵略することにした。そこで最初の標的にされたのが那古野城である。

那古野を本拠とする那古野今川氏に今川義元の弟の今川氏豊が継嗣として入った後も勝幡城を訪問し鞠会に参加するなど、仲の良い間柄であったことが伺える。

ある日、信秀が川に連歌で使う道具を誤って流してしまい氏豊はわざわざ取りに戻るより那古野城に滞在したほうがいいと提案する。1532 年那古野城に滞在していた信秀は突然病気になるって苦しむ。そのため大勢の親族が押しかけた。その夜、那古野の町で火事が起こり城まで迫ってくると共に勝幡城の兵士が攻め込み、準備をしていない那古野の武士は大敗し氏豊は京都に逃走した。

1542 年 8 月 10 日には小豆坂の戦いが起こる。これは織田軍と今川軍との間で起こった。同じ年の 3 月 19 日にも同じ戦いがあったとされるが無かったという説もある。

信秀は美濃の稲葉山城を攻めるにあたり朝倉家を誘うことにした。1544 年信秀は美濃を攻め始めた。信秀は村に放火したり城下町を襲ったりしたが、斎藤道三は城に籠ったままだった。午後 4 時になり日が暮れてきた頃、信秀は兵を一旦引き上げることにした。しかし、その時稲葉山城から斎藤軍が出撃し、不意を突かれた信秀軍は南に逃げるばかりであった。逃げた先には木曾川があり溺れ死んだ兵がたぐさう



うであったのか？だとしたらドラマにあるようなタイムワープ説も信憑性が出てくるが、いやそんなことは無いだろう。と彼の家督争いから考察してみることにする。レキシの「KATOKU」のように世襲制～家督を譲りたい～♪なんて平和的相続などあるわけもなく、そこには兄弟間の激しい戦いがあったのである。

1 信長の誕生



織田信長は天文三年（1534年）5月尾張の戦国大名織田信秀の嫡男として勝幡城に生まれる。信長が生まれた「弾正忠家（だんじょうのちゅう）」は尾張国下四郡の守護代、清須織田家の家臣であり分家で清須三奉行という家柄だった。母は土田御前（どたごぜん、つちだごぜん）で生まれ年は不明。母方の祖父は土田政久。土田氏は六角氏から別れた一族で、美濃可児郡土田（どた）か尾張清洲の土田（つちだ）の豪族だといわれている。

兄弟は信行（のぶかつ）、秀孝、信包、市、犬。ただ、当時、尾張国の守護である斯波氏の力は衰え、さらに守護代の織田氏も南北二つに分裂していた。

← 宣教師が描いたといわれる織田信長の肖像画（三宝寺蔵）

その力の空白を突いて勢力を伸ばしたのが信秀であり、清須織田家の守護代、織田達勝の支援を受けて今川氏豊から那古野城を奪い勢力の拡大を続けている状態だった。信長は早くに信秀から那古野城を譲られ城主となり、天文十五年に古渡城で元服、三郎信長と称し、翌年には今川との小競り合いで初陣を果たし、天文十八年から尾張国の政務に関わる。天文十八年から十九年にかけて、信秀が敵対していた美濃国の戦国大名、斎藤道三と和睦が成立。嫡男信長と道三の娘である帰蝶と縁組が結ばれる。

美濃斎藤家との縁組により信長が家督を継ぐ事は間違いないと考えられたが、父信秀は信長の地盤固めをする前に天文二十一年（1552年）3月頃に病死。それにより信長は家督を継ぎ、上総介信長と名乗るが、うつけとバカにされていた信長を不安に思う者も多く、ここから十三年にわたる尾張統一戦争が始まっていくのである！

2 萱津の戦い

信長の最初の相手は守護代の清須織田家だった。それまで信秀と協調していた清須織田家の守護又代の坂井大膳だが、うつけの信長なら倒せると同僚と計略を練り、信長支配下の松葉城と深田城を襲撃、松葉城主織田伊賀守と深田城主織田信次を人質にした。

しかし、舐められてたまるかと怒った信長はこれに迅速に対応、守山城から駆け付けた叔父の織田信光と合流し兵を三手に分けて戦い萱津で激戦を繰り広げ、敵の重要部将坂井甚介を戦死させる手柄を立てる。勢いに乗った信長は松葉城と深田城を奪還し、さらに清須城下の田畑を薙払った。この辺りから、清須織田家と信長の戦いが本格化していくのである。

3 村木城の戦い

清須織田家との戦いの最中、天文二十二年、4月頃、信長は正徳寺で「美濃のママシ」斎藤道三と初会見。ここで道三はうつけとされた信長の器量を見抜いたといわれる。しかし、翌年の天文二十三年、今度は知多半島の領有を争っていた今川義元が、知多の水

野氏攻略のために、本拠地の緒川城に近い村木に砦を築く。

信長は水野氏救援に向かうが、留守中に那古野城を清須城の織田信友が襲う恐れがあったため、信長は義父の道三に援軍を要請。道三は安藤守就以下 1000 名の兵士を派遣する。途中、織田方だった寺本城が今川方に寝返り、弟の信勝派だった林秀貞、通具兄弟が不服を言い、帰るなどのアクシデントがあったものの、信長はものともせず船で緒川城の近辺に到着し激戦の末に一日で村木砦を陥落させる。ここで信長は鉄砲を連続使用して村木砦にひっきりなしに弾丸を浴びせ戦況を有利にしたと伝わる。

4 安食の戦い

ここで信長相手に苦戦していた清須織田家は痛恨のミスを犯す。名目だけとはいえ尾張国の守護大名だった斯波義統が清須織田家の部将坂井大膳に殺害されたのである。原因は斯波氏が信長に付こうとしたからのようだが、大膳は、義統の息子の義銀を取り逃がしてしまい、義銀は信長を頼って落ち延びる。信長はこれで主君殺しの清須織田家を討伐する大義名分を得る。数日後には柴田勝家率いる長槍部隊が安食で清須方に圧勝。急激に衰弱した清須織田家は、信長と信光の策略により清須城を奪われ、守護代織田彦五郎が自害。ここに尾張守護代清須織田家は滅亡する。

5 大良河原の戦い（長良川の戦い）

しかし、信長の平穩は長く続かなかった。清須織田家を滅ぼして二年後の弘治二年（1556年）4月、義父道三が、息子の斎藤義龍に叛かれて敗死したのである。信長は道三救援の為に木曾川を越え、美濃の大浦まで出陣するが、義龍の軍勢相手に苦戦、その途中で道三敗死の報が届くと信長自らが殿を務めて退却する。

5 稲生の戦い

こうして、美濃の有力な後ろ盾を失った信長に対し、信長の弟の信行を推す林秀貞、林通具、柴田勝家が挙兵した。信勝は信秀の死後に有力な家臣や末盛城を与えられ、愛知郡内に一定の支配権があり信長に叛く力を持っていたのである。今度は弟と戦う羽目になった信長は弘治二年8月に稲生で激突した。信長公記によるとこの時信長の兵力が700名であったのに対し、信行方は柴田勝家が1000人、林秀貞が700名で倍以上の兵力で信長が不利だった。それに加えて戦上手の柴田勝家の奮戦もあり、信長は主だった家臣が続々と討たれ、一時は次々に押し寄せてくる柴田軍に対し、本陣の兵力が40人しかいないピンチになる。ところが信長を討たせるものかと、織田信房、森可成の両名が前線で粘り、



←織田信勝像（成徳寺蔵）

清須衆の土田大原という武将を返り討ちにするなど奮戦。さらにここで信長が清須兵に対して大声で怒鳴りつけると、身内同士の戦いだったこともあり逃げていったという。

勢いを取り戻した信長は、林秀貞の軍勢に襲い掛かり、相手方の主だった武将を次々に血祭りにあげ、全体で450名ばかりを討ち取り逆転勝利した。敗れた信行勢は末盛城に籠城し信長は城を包囲するが、生母である土田御前の仲介で、信勝と勝家を赦す。しかし、信勝は永禄元年(1558年)に再び謀反を企てる。懲りないヤツである。それを見て信勝を見限った柴田勝家の密告により信長は病気と称して信勝を清須城に誘い出して殺害した。



こうして、信長は骨肉の争いを完全勝利で制したのである！

← 稲生原古戦場跡

6 浮野の戦い、岩村城攻略戦

永禄元年七月、信長は同族の犬山城主、織田信清に姉の犬山殿を嫁がせて縁組した。目的は尾張の上四郡を支配する守護代岩倉織田家の当主、織田信賢を攻める為である。当時、岩倉織田家は当主の織田信安が斎藤義龍に通じて信長を攻撃するなど敵対していたが、信安は嫡男の信賢を疎んじて次子の信家を後継ぎにしようとして逆に信賢に追放され、岩倉織田家の実権は織田信賢が握っていた。この内紛を見逃さず、信長は2000名の軍勢で浮野の地で3000名を率いる信賢軍と交戦(浮野の戦い)、しばらく激戦が続く。そこへ織田信清の援軍1000名が到着すると形勢は逆転、岩倉織田軍は壊滅して1200名の死者を出し信賢は敗走して岩倉城に逃げるが(岩倉城攻略戦)、翌年には信長が岩倉城を包囲し数か月後に信賢は降伏。尾張守護代岩倉織田家も滅亡したのである。姉を信清に嫁がせて同盟を結んだ信長の作戦勝ちだった。

おわりに

私は今まで信長に対し、「桶狭間の戦いから連戦連勝を重ね、あっさり天下人の一歩手前まで近づいた戦国大名」といったイメージしか抱いていなかった。だが今回信長の生い立ちにまで遡って調べてみると、兄弟との家督争いなど昼ドラばりにドロドロした親族間での戦いに打ち勝った苦労人のように見えてきた。信長がここまで大成したのは信長の後見役として知られる平手政秀の存在が大きかったように思われる。うつけ者と揶揄されていた信長は、尾張一国を治める戦国大名として天下に名を轟かすのである。

参考文献

「織田信長怒涛の尾張統一までを10分で解説」 はじめての三国志
<https://hajimetesangokushi.com/2020/01/05/%E7%B9%94%E7%94%B0%E4%BF%A1%E9%95%B7%E5%B0%BE%E5%BC%B5/> (最終閲覧日 2021年9月14日)

「織田信長の有名な戦いを紹介！信長は戦に弱かった？」 レキシル
<https://rekishiru.site/archives/12317> (最終閲覧日 2021年9月14日)

「稲生の戦い」 Wikipedia
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A8%B2%E7%94%9F%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84>
(最終閲覧日 2021年9月14日)

「安食の戦い」 Wikipedia
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%89%E9%A3%9F%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84>

(最終閲覧日 2021 年 9 月 14 日)

「織田信長の家系図 (前篇) 信長のルーツ」 鎌倉家系図作成所

<https://kamakura-kamome.com/15907250185511> (最終閲覧日 2021 年 9 月 14 日)

「天童市」山形

<http://yamagata6.blog118.fc2.com/category30-1.html> (最終閲覧日 2021 年 9 月 14 日)

「織田信勝」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B9%94%E7%94%B0%E4%BF%A1%E5%8B%9D>

(最終閲覧日 2021 年 9 月 14 日)

参考資料

織田家家系図 「織田信長の家系図 (前篇) 信長のルーツ」 鎌倉家系図作成所

<https://kamakura-kamome.com/15907250185511> (最終閲覧日 2021 年 9 月 14 日)

稲生原古戦場 「稲生の戦い」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A8%B2%E7%94%9F%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84>

(最終閲覧日 2021 年 9 月 14 日)

桶狭間の戦い

25R 富川和馬

1 桶狭間の戦いの基礎情報

桶狭間の戦いとは、1560 年 5 月 19 日尾張国知多郡桶狭間での、織田信長軍と今川義元軍の合戦であり、2 万 5000 人の大軍を率い尾張に侵攻した今川義元に対し、尾張の織田信長が本陣を奇襲、または正面から攻撃し、今川義元を討ち取った戦いである。

2 合戦以前の情勢

信長の父・信秀が 1538 年までに尾張那古野城にいた今川氏豊を追い出し、両家の対立が深まった。また、信秀は三河の松平氏とも対立し、三河進出を狙ったが失敗に終わった。信秀の死後、跡継ぎ争いに勝利した信長は今川氏の進出阻止や逆襲に動くこととなる。

3 合戦までの経過

1560 年 5 月 12 日今川方は沓掛城に入り、翌 5 月 18 日夜、松平元康が指揮をとる三河勢を先行させ、大高城に兵糧を届けさせた。翌 5 月 19 日 3 時頃、松平元康と朝比奈泰朝は信長軍の丸根砦、鷲津砦に攻撃を開始する。

一方、織田信長はこの知らせを聞き飛び起き、幸若舞『敦盛』を舞って明け方の 4 時頃に清洲城を出発し、8 時頃、熱田神宮にて戦勝祈願をした後に 10 時頃善照寺砦に入って 2000 から 3000 の兵を整えた。一方、今川軍の猛攻を受けた丸根砦の織田軍 500 人余りは城外に出て、白兵戦を行ったが、大将の佐久間盛重は討死した。鷲津砦では、籠城戦を仕掛けたが、多くの家臣を失う結果となり、大高城周辺の制圧に成功した今川軍は、今川義元率いる本隊が沓掛城を出発し、大高城の方向に向かって西に進み、その後進路を南に取った。

4 桶狭間の合戦

正午頃、信長の出陣によって士気を高めた中嶋砦の織田軍は単独で今川軍の前衛に攻め込むが、あっさり負けてしまい、優勢であった義元は気をよくしたと見られている。13 時頃、視界を妨げる程の豪雨が降る。信長軍はこの雨に乗じて兵を進め、義元の本隊に奇襲をかけた。(奇襲ではなく雨がやんでからの正面から進軍しての戦闘だったとも見られている)今川軍の総勢は 20000 人とされているが、今川方からすれば当地は支配

地ではないため、その中に兵站維持のための荷駄兵などが多く含まれ、加えて今川軍は兵を分散させていたため、義元を守る兵は5、6000程だったと言われており、双方の戦力は拮抗していたと見られている。

5 義元の最期

義元は輿を捨て、300騎の親衛隊に周りを囲まれながら騎馬で退却しようとしたが、度重なる攻撃で周囲の兵を失い、ついには信長の馬廻に追いつかれる。義元は服部一忠を返り討ちにしたが、毛利良勝によって組み伏せられ、討ち取られた。また、義元は首を討たれる際、毛利の左指を噛み切ったという。

総大将である義元の戦死により今川軍は戦意を喪失し、合戦は織田軍の勝利に終わった。江戸時代に書かれたとみられる、『桶狭間合戦討死者書上』によると、今川方の戦死者は2753人、織田方の戦死者は990人余りだった。また、書上によると、近江国佐々木方（六角氏）が織田方に参戦しており、援軍の死者は織田方のうち272人を占めたという。

参考文献

「桶狭間の戦い」 wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/> （最終閲覧日9月22日）

「桶狭間の戦い」 コトバンク <https://kotobank.jp/word/> （最終閲覧日9月22日）

美濃攻略戦

26R 西脇 叶多

はじめに

ここでは、織田信長の美濃攻略について斎藤家を中心に述べていく。

1 織田家と斎藤家のつながり

美濃国の斎藤道三と、尾張国の織田信秀(織田信長の父)は長年対立関係にあり、実際に何度も戦っていた。

また斎藤道三は、越前国の朝倉氏とも抗争状態にあった。

斎藤道三は美濃国の国主であるのに対して、織田信秀は尾張国守護の下で守護代、さらに守護代の下で働く奉行の一人にすぎなかった。

しかし織田信秀は尾張国内部で勢力を伸ばし、美濃国の斎藤氏だけでなく、三河国の松平氏、さらには駿河国の今川氏とも抗争状態にあった。

斎藤道三にしても織田信秀にしても四方は敵ばかりである。

そこで斎藤道三と織田信秀は和睦をし、その証として斎藤道三の娘の濃姫(帰蝶)が、織田信秀の嫡男である織田信長に嫁ぐことになる。織田信長と濃姫が婚姻したのは、1548年あるいは1549年と言われている。

濃姫が織田信長に嫁いだことにより、斎藤道三と織田信長の関係が生まれた。道三は信長と正徳寺で会見した際、信長の器量を評価し信長の良き支援者となる。

2 斎藤家の家督相続争い

1554年、斎藤道三は息子の斎藤義龍に家督相続し、自らは隠居をした。

ただ、斎藤道三と斎藤義龍は不仲で知られていた。斎藤道三が自分から家督を斎藤義龍に譲るとは考えにくい。

1555年、斎藤義龍は弟達を殺害し、道三に対して挙兵する。

斎藤家の家臣の多くが、斎藤道三ではなく斎藤義龍を支持した。そのため斎藤道三は家督を斎藤義龍に譲るしかなくなったのである。家督相続の経緯については諸説あるが、

斎藤道三は家臣に信望がなかったともいわれている。

そして1556年、斎藤道三と斎藤義龍は長良川の戦いで直接対決を果たす。斎藤義龍側18,000人、斎藤道三側3,000人。信長は援軍に出たが、間に合わなかった。この戦いで道三は討たれる。

3 斎藤家の外交方針

斎藤道三亡き後、美濃侵略を企てる隣国の大名たちは、土岐家（美濃国守護大名）の一族を保護し、それを美濃侵略の口実にしてきた。そこで義龍は種々の工作によって幕府に働きかけて、1558年に治部大輔という官職を手に入れ、翌年には、将軍の相伴衆に列している。この相伴衆というのは読んで字のごとく、将軍の宴席や、将軍が他家へ訪問する際に随従、相伴する役職のことだが、簡単にいってしまうと「将軍に信頼された側近」という肩書きを手に入れた、ということだ。

つまり義龍は、これまで「土岐家の国を横領した篡奪者」だった斎藤家の家格の底上げをはかって、最終的には相伴衆に列したことで「幕府に認められた正統な美濃の支配者」という地位を獲得したのだ。これによって、他国は美濃侵略の大きな口実を失うこととなった。

4 美濃攻略戦

道三を討ち果たした義龍は、浅井氏や六角氏と戦ったが、桶狭間の戦いを機に信長の脅威が高まったため、勢力拡大を果たせないまま1561年に急死し、家督は嫡男の斎藤義興が相続した。龍興は祖父ほどの野心も父ほどの才能もなく、家臣たちからの信望を得ることが難しかった。

1564年2月には竹中重虎が龍興を稲葉山城から追い出す事件も起きていた。1565年信長は加治田城の城主・佐藤忠能と加治田衆を味方にした。同年、犬山城、鶯沼城、猿啄城を攻略する。1566年7月信長は上洛し、足利義昭を将軍にするために龍興と和睦する。しかし、1566年8月龍興が和議を破棄し、河野島の戦いが起こる。信長は敗北した。信長は上洛のため龍興を叩かなければならなくなった。

信長は美濃三人衆を味方につけ、1567年稲葉山城の戦いが勃発した。この戦いで信長は龍興の居城・稲葉山城を攻め落とし、龍興は北伊勢の長島へと敗走した。

5 「岐阜」命名

信長は稲葉山城へと拠点を移すと井ノ口を「岐阜」と改称した。「岐阜」の由来については諸説あるが、有力なのは尾張「政秀寺」を開山した沢彦宗恩（たくげんそうん）が「岐山・岐陽・岐阜」という3つの地名を提案し、信長自身が選んだとされる説である。これは中国の故事にならったもので、周の時代に「岐山（きざん）」という所に都を置き、そこを拠点にして殷（いん）の国を滅亡に追い込んだ縁起のいい地名とされている。「岐山」という山は西安近くに実在する山で、この山にちなんだということだ。

おわりに

信長と道三は良好な関係であったが、斎藤家の家督争いによって敵対し、龍興の求心力の無さによって美濃は織田信長のものとなる。ここから織田信長は勢いを増していく。

参考文献

「岐阜県」Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B2%90%E9%98%9C%E7%9C%8C>
(最終閲覧日2021年9月1日)

「西美濃三人衆」

Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E7%BE%8E%E6%BF%83%E4%B8%89%E4%BA%BA%E8%A1%86>
(最終閲覧日 2021年9月1日)

「斎藤道三」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E7%BE%8E%E6%BF%83%E4%B8%89%E4%BA%BA%E8%A1%86>
(最終閲覧日 2021年9月1日)

「中濃攻略戦」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%AD%E6%BF%83%E6%94%BB%E7%95%A5%E6%88%A6>
(最終閲覧日 2021年9月1日)

「斎藤義龍」 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%8E%E8%97%A4%E7%BE%A9%E9%BE%8D>

(最終閲覧日 2021年9月1日)

「【斎藤道三】織田信長との関係とは？道三が信長に託した3つの遺産」 レキシル

<https://rekishiru.site/archives/11379> (最終閲覧日 2021年9月1日)

「斎藤義龍（高政）の全て！生涯年表に家紋、明智光秀との関係までを解説」 レキシル <https://rekishiru.site/archives/12296> (最終閲覧日 2021年9月1日)

信長の上洛

32R 古川周平

はじめに

故郷尾張国を統一した信長は、天下統一へと歩みだしついに上洛を決意する。しかし、信長の上洛は簡単なものではなかった。なぜ信長は上洛を決意し、どのような経緯で上洛を成功させたのだろうか。

1. 当時の背景

尾張国を統一した信長は美濃一色（斎藤）氏への対処と織田領国の平和維持に努めていた。当時の背景を少し説明する。当時室町幕府の将軍家であった足利氏は明応二(1493)年に細川氏らによって実権を握られて以降、多少の影響力を持っていたが国を統治するほどの権力はすでに失っていた。しかし、この動きに対抗する勢力が失脚させられた元将軍を擁立するなど当時の行政は大変複雑な状態だった。永禄八(1565)年5月19日13代将軍足利義輝が三好義継・松永久通らによって暗殺された。これが永禄の政変である。この永禄の政変が、自国の平和維持に努める信長を大きく飛躍させる契機となる。もう少し京都の情勢の話が続ける。当時の人々にとっては単なる下剋上ではなく非常事態であり、非常事態を引き起こした三好氏も当然事後処理に追われることとなる。三好氏は足利義輝の系統を排除しようとするが、三好勢力の松井久秀がこれに反対。三好長逸・三好宗渭・石成友通ら三好三人衆と松井秀久・久通親子は対立し、ついに抗争へと発展してしまう。そんな中三好方の暗殺を逃れ大和の国を脱出していた足利義昭が近江の国、矢島にて再起を図る。その義昭の「天下再興」の呼びかけに応じ、信長は上洛を決意することになる。

2. 上洛の外交的経緯

永禄十(1567)年、ついに信長は足利義昭の上洛に向けて行動を開始する。しかし当時の信長を取り巻く情勢はおおよそ平和とはいえなかった。美濃一色(斎藤)氏との戦争は未だ継続中であり、美濃国へ侵攻し領土を拡大したことにより甲斐武田氏とも緊張が生まれていた。そんな信長の意向を受けた義昭は尾張織田と美濃一色の和睦に奔走、結果美濃一色氏との和睦が成立する。緊張が続いていた甲斐武田氏には、織田側から和睦案が持ち出された。甲斐武田氏の中には反対派もいたが、信玄は対立の続く上杉氏との関

係を考慮し反対派を抑え込み和睦を承諾。信長の養女龍勝寺殿が信玄の四男勝頼に嫁ぐことで甲尾同盟が成立した。また信長は道中の安全を確保するべく、北近江の浅井長政のもとに妹お市を嫁がせ盟約を締結した(盟約の締結が何年に行われたかについては諸説ある)。さらには松永久秀・久通父子をも味方に取り込むことに成功。永禄十一(1568)年には北伊勢神戸氏・長野氏を降し、三男信孝を神戸氏、弟信包を長野氏の養子に送り込むことで、北伊勢を掌握。信長とその周辺の諸勢力が集まり上洛の準備が整った。永禄十一(1568)年、朝倉義景の庇護下にいた義昭を岐阜に呼び寄せる。

3. 対六角・三好戦

こうして上洛の準備を整えた信長は岐阜城を出立。近江佐和山城に入り、交通路を確保するべく六角義治とその父六角承禎に協力を求める。しかし六角親子はこれを拒否。信長の要請の数日後に三好三人衆と「天下の儀」について談合、今後の関係維持について確認し合った。要は信長とは手を結ばねえぞという態度をあらわにしたのである。これに対し信長は尾張、美濃、北伊勢各国の軍勢と同盟関係にあった三河徳川氏を率い、永禄十一年9月7日に岐阜を発った。同月12日には六角親子の箕作城を攻め落とし、翌日には六角親子を観音寺城から伊賀国(三重県西部)に敗走させた。これにより南近江の領主のほとんどが降伏、織田勢によって平定された。観音寺城制圧の報を受けた義昭は9月22日、滞在していた美濃立政寺から近江桑実寺に移動、信長と合流した。

同月26日、義昭と信長の軍勢は京とに入り、義昭は清水寺に入った。信長は東福寺に入ったが、同日中に三好の抵抗勢力を掃討するため東寺に着陣する。その後三好三人衆の一人、石成友通が籠もる山城勝龍寺など西岡地域を攻略。27日には義昭も兵を進めた。勝龍寺などを攻め落とし、山城国を平定。三好三人衆の居城である摂津芥川城に侵攻。芥川城にいた三好長逸は追い払われ、9月30日、芥川城に義昭が入城。10月14日には義昭が征夷大將軍に任命された。信長は10月28日、若干の兵を残し岐阜に帰った。

～あとがき～

今回の論文は短時間・低テンションで仕上げたため自分が書いたもう一本のものとは少し劣っていると感じる読者の方もいるかもしれません。しかし、自分はこれでよかったと考えています。こんな文章にも味があると感じています。もっとも迷ったのは文章の執筆者の部分でした。自分の名前を書き、高校の先輩がすっぽかした事実を正直に書くべきか？先輩の名前を使い先輩のメンツを立てるべきか？結果、このテンションで書いた文章を他人の名前で乗せるのは……。と思い自分の名前を入れました。この文章を書いていて何より自分が恐怖したことは、自分が誰の代理で何を書いているのか全く知らなかったことです。顔どころか名前すら知らないのです。このような経緯で書かれた文章ですが、これを読んで少しでも歴史に興味を持ってくれたらと思います。

参考文献

柴裕之『織田信長 戦国時代の「正義」を貫く』(2020年/平凡社)
小和田哲男『戦況図解 信長戦記』(2019年/サンエイ新書)

清須同盟

16R 武 悠也

清須（きよす）同盟とは、永禄四年（1561年）春に織田信長と徳川家康が結んだ軍事同盟である。この同盟は、織田信長の居城である清須城で結ばれた、という伝承があるため「清須同盟」と呼ばれている。

この清須同盟は、織田信長が桶狭間の戦いに勝利後、尾張（現在の愛知県西部）から今川氏の勢力を駆逐して美濃（現在の岐阜県）方面への進出を計画していたこと、一方、徳川家康は桶狭間の戦いの後、今川氏から

独立して三河（現在の愛知県東部）制圧を目指していたことから、両者の利害が一致していたため同盟締結に至った。当時、織田信長（尾張：太閤検地時の石高で57万石）・徳川家康（三河：同29万石）の領土の東には、甲相駿三国同盟を締結していた、武田信玄（甲斐・信濃：同64万石）、北条氏康（武蔵・相模・伊豆：同93万石）、今川氏真（駿河・遠江：同40万石）、や上杉謙信（越後・上野：同89万石）、北には南近江（現在の滋賀県南部）の六角義治と同盟中の斎藤義龍（美濃：同54万石）などの強敵がいたため、なりゆき上二人はスムーズに結びついてゆくのである。

また、この清須同盟は、数年で同盟が破棄される戦国時代では珍しく、1561年に同盟を結んでから、1582年に織田信長が本能寺の変で明智光秀に倒されるまで、約20年間も続いている。いわば、戦国時代の奇跡の同盟なのである。

なお、この同盟を締結した「清須」（現在の愛知県清須市）は、現在の愛知県西部、尾張平野のほぼ中央に位置し、北部は一宮市、東部と南部は名古屋市に接する場所にある。清須は鎌倉街道と伊勢街道が合流する「交通の要」であり、また当時尾張守護所があったことから、清須は尾張の首府として、政治・経済・交通・文化の中心城下町であった。そのため、この「清須同盟」、ならびに後述の「清須会議」は、この「清須」が舞台となっている。

参考文献

谷口克広 『信長と家康』（2012年/学研新書）

「清須市のプロフィール」清須市 HP <https://www.city.kiyosu.aichi.jp/>（最終閲覧日 2021年8月13日）

参考資料

「武将ランキング」シンプルよんこま

<https://iirou.com/wordpress11/wp-content/uploads/2020/07/taikoukenti-kokudaka.jpg>（最終閲覧日 2021年8月13日）



第二章 信長包囲網

編集担当 生嶋文敬 大内和音

第一章では徐々に頭角を現していく織田信長について書いた。第二章ではじわじわと勢力を拡大していく織田信長をよく思わない武将たちが信長打倒を掲げ、挙兵することに対し信長はどのように対応し逆境へと立ち向かっていくのかを書いた論文をまとめた。

目次

金ヶ崎の退き口	p18	45R	原田彬義
信玄挙兵	p19	44R	常田莉仁
義昭挙兵	p21	54R	永安世範
姉川の戦い	p25	26R	矢澤壮太
長篠の戦い	p27	22R	中田紘己
对本願寺戦争	p29	54R	長谷川慧
コラム 織田家と地方大名とのかかわり	p32	14R	吉川智也



徳川美術館蔵『長篠合戦図屏風』

信長は当時の鉄砲の弱点である弾を込めている間の隙を鉄砲 3000 丁も用意することで無くし、三段撃ちという新しい戦法を編み出し当時最強と謳われた武田の騎馬隊を迎え撃った。

金ヶ崎の退き口

45R 原田彬義

はじめに

織田信長は戦国時代の武将であり、乱世を代表する武将の一人である。数々の強力なライバルたちを次々と撃破していき、天下統一あと一步まで迫ったが、家臣の明智光秀の裏切りにより命を落としたのは、とても有名である。そんな信長にも絶体絶命のピンチは幾度となくあった。この論文では、そんな信長のピンチの一つである「金ヶ崎の退き口」について解説していこうと思う。

経緯

まず「金ヶ崎の退き口」について簡単に概要を説明すると、織田信長が敵対していた武将の朝倉義景と当時信長と同盟関係であったが突如として彼を裏切った浅井長政により挟み撃ちにされた事件である。ではその具体的な経緯について解説していこうと思う。

①浅井長政について

浅井長政は近江の国（現在の滋賀県に当たる）の武将である。浅井家は下剋上によって北近江に勢力を広げていたが、南近江の守護である六角氏との合戦に敗れ、六角氏との間に主従関係を結んでいた。（長政も一時期は人質になっていたとされる。）長政は六角氏に服従する政策をとっていた父を追放し、家督を相続した。その後は六角氏と争った後、停戦協定を結んでいる。

その後、織田信長との間に同盟を結び、彼の妹の市を妻とした（このときから信長の一字を拝領し長政と名乗るようになる、それまでの名は賢政）。その後は、足利義昭を織田信長とともに守護しながら上洛を手助けした。

②金ヶ崎の退き口の経緯

永禄13年4月20日（1570年5月24日）織田信長と徳川家康による連合軍が3万の軍を率いて越前出征へ向かったことが発端となっている（なお、この遠征の口実は若狭攻めである。また、この時、織田家の武将だけでなく、池田勝正や松永康秀らも従軍している。）

4月25日（5月29日）越前の朝倉義景領に侵攻した織田・徳川連合軍は翌日には金ヶ崎城の朝倉景恒を下し、朝倉軍は防衛態勢を整えることとなった（これには本家である朝倉義景と敦賀郡の一門衆筆頭であった景恒との序列争いが背景にあり、景恒への援軍を故意に遅らせたとする説もある）。

このように当初は織田・徳川連合軍が優勢であったが、突然北近江の浅井長政が裏切り朝倉軍とともに挟撃を仕掛けてきた（当初信長は裏切りを信じていなかったが、次々と入ってくる報告に信じざるをえなかったという。なお何故長政が裏切ったかについては現状不明となっている）。

撤退時には金ヶ崎城に木下秀吉が残ったとされる。（通説では秀吉が殿に名乗りをあげたと言われているが、殿軍には秀吉より立場の偉い摂津守護の池田勝正や明智光秀がいたため、彼が殿軍を務めたかについては疑問が残る。）撤退時の織田諸将の行動は非常に統率がとれたものであり、被害を最小限に食い止めた。（なお被害については諸説ある）。

おわりに 金ヶ崎のその後

その後、信長は軍勢を立て直し長政討伐へと動き始めていく。しかし足利義昭との対立により、長政をふくめた信長包圍網（他の主なメンバーは甲斐の武田信玄や、摂津の石山本願寺など）が形成され激しい戦いへと発展し信長を幾度も追い詰めることとなる。信玄の急死により包圍網が一部破綻、信長は近江や越前へ大軍勢を送ることが可能となった。そして一乗谷城の戦いで朝倉氏が滅んだのち、天正元年（1573年）小谷城の戦いで浅井氏は滅びることとなった。（なお、このとき信長は使者を送り降伏を勧めたが、長政は最後まで拒否し続けている。仮にも自身の妹の夫を滅ぼすのは、信長にとっても気が引けたのかもしれない。）

参考文献

- 「浅井長政」 Wikipedia
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B5%85%E4%BA%95%E9%95%B7%E6%94%BF>（最終閲覧日 10月30日）
- 「金ヶ崎の戦い」 Wikipedia
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%87%91%E3%83%B6%E5%B4%8E%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84>
（最終閲覧日 10月30日）
- 「浅井長政とは」 コトバンク
<https://kotobank.jp/word/%E6%B5%85%E4%BA%95%E9%95%B7%E6%94%BF-24965>
（最終閲覧日 10月30日）

信玄拳兵

44R 常田莉仁

はじめに

ここでは、今年の歴史研究部のテーマである「織田信長」と最強の騎馬隊を率いた甲斐の虎「武田信玄」との関わりについて触れていきたいと思う。

1 拳兵以前の織田家と武田家の外交関係の遷移

武田信玄は織田信長の同盟相手である「徳川家康」との「三方ヶ原の戦い」や、「長篠の戦い」などで有名だが両者は元々どのような関係にあったのか。

まず両者の初めての接触は「桶狭間の戦い」(1560年)がきっかけであるとされている。当時、信玄は1554年に結んだ甲相駿三国同盟によって駿河・遠江を治めていた「今川義元」、相模を治めていた「北条氏康」と同盟関係にあった。しかし桶狭間の戦いで今川義元が討ち取られてしまったため、同盟にひずみが生じ始める。義元の後を継いだ「今川氏真」は、信玄の宿敵と言える「上杉謙信」との同盟を模索しはじめる。さらに義元を桶狭間の戦いで討ち取った信長は、美濃(現在の岐阜県南部)も平らげる勢いで、武田領と接しそうになっていく。

そのため信玄は、勢いのある信長との衝突を防ぐ手立てを組む必要性に迫られる。信長もまた難敵との無駄な戦いをして時間を無駄にしたくなかったため、武田家に伝手のあった織田掃部助を使い武田家に擦りよる。

こうして信長と信玄はお互いに安堵しあうという意味で1565年の9月に、婚姻による「甲尾同盟」を結ぶ。信長の養女(後の龍勝院)と、信玄の四男「諏訪勝頼」(後の武田勝頼)の縁組の形式をとり、甲斐と尾張の同盟なので甲尾同盟と呼ばれている。しかし2年後に龍勝院が死んでしまったため、信長の嫡男「織田信忠」と信玄の六女「松姫」の婚約が甲尾同盟を担保するために執り行われようとしたが、実際には松姫は織田家に輿入れしなかったようだ。

このように信長と信玄は、敵対関係になることを避けるというスタンスが一致してい

たため、婚姻同盟を結んでいた。ちなみに信長は信玄を、家康のように畏怖しながらも憧れの存在として捉えておらず、単に「東の脅威の一つ」と考えていた。

そして、信玄の挙兵以前の信長の動きについて見ていく。信長は1568年9月28日に室町幕府第15代将軍「足利義昭」を奉じて、上洛を果たす。その約7か月前に武田家と織田家・徳川家との交渉があり、今川氏真を共同で叩くことで合意した。信長は岐阜から足利義昭を奉じて上洛する際、氏真に三河・尾張を侵略されるおそれがあった。そこで信長は1567年に今川寄りであった信玄の嫡男「武田義信」を自害させ、長く続いていた「甲駿同盟」を破棄させ、駿河国に勢力を伸ばしかけていた信玄を利用し氏真の動きを封印しようとした。結果として今川家は壊滅、信玄は今川家と盟を結んでいた北条家の反発に苦勞をしたものの駿河国の大半、家康は遠江の西側を得て、信長は上洛に成功した。最近の研究ではここまでの信長の上洛行動を信玄は容認しており、信玄の駿河進行と信長の上洛行動は、共同作戦だったということが明らかとされている。

また、前述の通り、信玄は今川家を裏切ったため北条家から敵対視され、さらにその北条家が上杉家と「越相同盟」を結んだので、窮地に立たされた。そんな時、信長は足利義昭を通して和睦を行い上杉家の参戦は免れた。信玄は信長によって窮地を脱したのだ。

この時点では、信長と信玄は義昭の政権を支える有力大名同士だったのだ。

2 武田信玄の上洛・信長の動揺

先に言ったように信長と信玄は互いに敵となることに恐れ同盟を結んでいた。しかし信玄は1572年10月3日に徳川領遠江・三河に向け進軍を開始した。なぜ信玄は信長の同盟相手である家康を攻めたのか、そこについて触れていこうと思う。

まず信玄は信長のような「自身が制する『天下』』というものは、意識しておらず自分はいくまで群雄割拠の戦国時代の大大名の一人と考えていたようだ。これが信玄の本質だ。前述した信玄と家康の今川攻めの際、家康との申し出を守らず徳川領となるはずの遠江へのはっきりとした出兵を行い、さらには徳川軍に攻撃を仕掛けるなどしており、家康に不信感を与えた。簡単にいうと相手にスキがあるとすぐ懐に突っ込んでしまう性格なのだ。

信玄は石山本願寺、越前(現在の福井県東部)の朝倉義景との同盟を成立させた上で、1572年の10月3日に徳川領に進行した。通説ではこれは「武田信玄の上洛又は西上」と呼ばれる。当時、信長は信玄からの依頼を受け、上杉家と武田家の和睦交渉をしており、上杉家との折り合いが付き10月5日着の書状で喜びを述べている所だった。この信玄から持ち掛けた上杉家との和平交渉は、上杉謙信や信長を欺くための信玄の策略だった。この信玄の軍事行動は信玄から信長に通告されることはなく、信長は完全に騙し討ちにあったのだ。さらに当時信長包囲網が形成されており信長が救援に回ることが難しいことを見越したうえでの軍事行動だったようだ。

この軍事行動には、前述した信玄、家康の共同作戦の際生じたトラブルの結果、信玄に不信感を抱いた家康が信玄を牽制するために謙信と同盟を結び、信長と謙信の同盟を斡旋(間に入って双方をうまく取り持つ事)した事に対する信玄の憎悪が根底にあるようだ。信玄は自分から家康との申しつけを破った事を棚に上げ、家康が行った信長と謙信を結びつけること、織田家・武田家が行おうとしていた婚姻を阻止しようとしたことに激しく不満を抱き、家康へ恨みを募らせていたのだ。謙信と組むことは相手がだれであれ、いかに信玄であっても脅威だったようだ。ちなみにこの信玄の軍事行動に信長は、信玄の諸行は前代未聞の無動さ、侍の義理も知らない、今後信玄とは2度と手を結ばない、などと怒り狂ったようだ。

3 信玄の徳川領進行

信玄の徳川領進行について軽く触れていく。通説では信玄上洛などと言われていると書いたが、この時の信玄の三河・遠江への進行の目的は「徳川家康叩き」であったことは明白のようだ。信玄自身も「三ヶ月のうっ憤」などと述べていることからあくまで目的は家康潰しだったようだ。これが、1572年12月22日に「三方ヶ原の戦い」において、家康をわざわざ浜松城から三方ヶ原に誘い込み、待ち構えて、徹底的に徳川軍を壊滅させた理由なのだ。

「三方ヶ原の戦い」について少し触れようと思う。武田方の兵力はおよそ30,000、対して家康方の兵力は信長の約3000の援軍も含めおよそ15000。武田軍は武田八陣形の一つである「魚鱗の陣」で待ち構え、徳川軍は「鶴翼の陣」で応戦した。戦いは夕刻から始まり日没までのわずか2時間ほどで決した。家康は2000もの兵を失い、「鳥居四郎左衛門」、「成瀬藤蔵」、「本田忠真」、「田中義綱」といった有力な家臣を亡くした。対して武田軍の損失は200程度で武田方の圧倒的勝利に終わったのだ。退却の際家康があまりの恐怖に脱糞してしまったのは有名なエピソードである。この時の様子を絵師に描かせ「しかみ像」として生涯座右に置いていたようだ。

この時の信長は怒りを爆発させたものの、信玄の進行ルートから「上洛行動」ではないことを見抜いていたようだ。信長は信玄の上洛準備がないことを情報分析しており、遠征支援体制が整っていないことに気づいていたようだ。遠征ルートが南進・美濃ルートではなく三河・遠江ルートのため、三河を攻略すれば信玄は撤退すると考えていたようだ。そこで家康が裏切りなどを犯さないよう監視役として佐久間信盛に3000の兵を率いさせ、援軍として家康に送ったのだ。

1573年5月13日、「家康叩き」の目標を達成した信玄は満足に浸るように病に伏せ、甲斐への帰途、南進の駒場で死去した。

参考文献

「霸王織田信長と梟雄武田信玄の同盟は、信玄の裏切りで破たん！」歴史好きのつぶやき <https://rekishizuki.com/archives/1277>（最終閲覧日2021年11月2日）

「織田信長と武田信玄の関係。敵同士ではなく実は協力関係にあった？」Histonary 楽しくわかる歴史の話 <https://histonary.com/nobunaga-shingen/>（最終閲覧日2021年11月2日）

「【三方ヶ原の戦いとは】簡単にわかりやすく解説!!徳川家康の脱糞は本当!?徹底解説!」日本史事典.com <https://nihonsi-jiten.com/mikatagahara-notatakai/>（最終閲覧日2021年11月2日）

義昭挙兵

54R 永安世範

1. はじめに

実は足利義昭は「天下人」だったと言え、驚くだろうか。まず、「戦国の異端児」織田信長は「傀儡」足利義昭を利用した挙句追放し、室町幕府を滅ぼしたと思っている人が多いのではなかろうか。しかし、最新の研究では、現在言われるようなただのお飾りの将軍、というイメージが変わりつつあるのである。さて、そんな義昭だが、信長に対し兵を挙げ、信長最大の危機といえる「信長包囲網」の結成に大きく関わる存在となる。ここでは義昭の人生を交えながら、義昭の挙兵について考えてみようと思う。

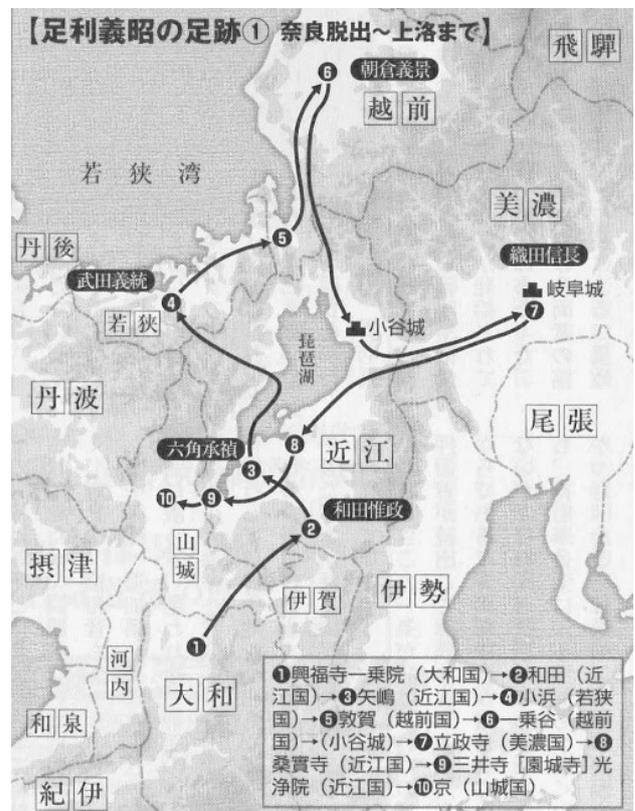
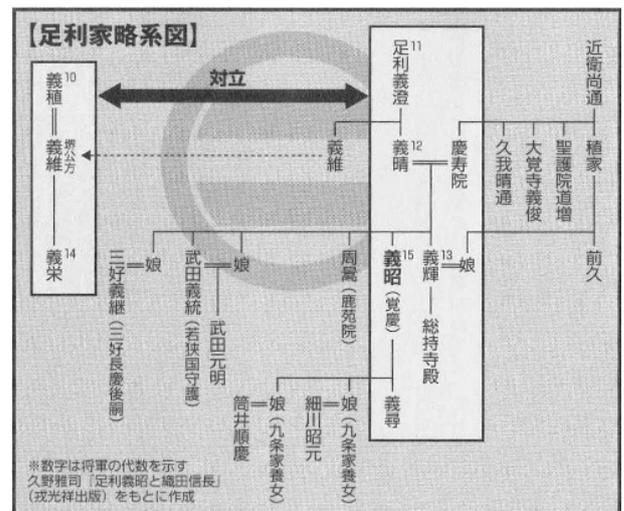
2. 義昭の上洛まで

天文6年(1537)11月3日、足利義昭(義昭は元服後の名前だが、読みやすくするため義昭で統一する)は12代将軍足利義晴の次男として京都で生まれた。兄は13代将軍となる足利義輝である。次男として生まれた義昭は早くも6歳の時に、大和国(現在の奈良県)の興福寺の一乗院に入室し、その後門跡(住職)を継いだ。そして、兄義輝が天文十五(1546)年13代将軍となり、特に何もなく僧として一生を終えるはずだった。しかし、世は戦国。永禄八(1565)年に三好氏が足利義輝の屋敷を包围する。現在では故意の暗殺では無く、武力に訴え要求を呑ませる「御所巻」であったとされているが、意思の齟齬が重なり、武力衝突に至り、結果的に足利義輝を討ち取ってしまった(永禄の変)。その結果、義昭は歴史の表舞台へと引きずり出される事となった。

本題から外れるため、詳細を省略しつつ追っていくが、義輝の死後、有力な後継候補となり得る義昭は幽閉されるも、近江へと脱出する。永禄九(1566)年還俗した義昭は朝廷に馬と太刀を献上し、従五位下・左馬頭に叙任される。これは、歴代の将軍が通過してきた最初の官位であり、自らが将軍になることを意識していたといえるだろう。さらに、3月には上杉謙信に対し北条氏との和睦、同時期に織田信長と美濃の斎藤龍興とに和睦を勧告している。自身の上洛に協力せよというのが目的だが、先代将軍の義輝も和睦の勧告を行ってきたことから、義昭が如何に将軍としての意識があったことを窺わせるものである。

その一方で義輝を暗殺した三好氏は三好家内の内紛がありながらも阿波にいた10代将軍足利義植の家系の足利義栄を擁立し、義昭に先んじて、足利義栄は14代将軍となった。しかし、前述のように内紛があり、上洛は出来ずにいた。ここで義昭は巻き返しを図る。朝倉義景の援助によって朝倉氏の本拠、一乗谷に移り元服する(ここで初めて義昭と名乗る)。この頃、織田信長は永禄十(1567)年美濃を平定し、いよいよ尾張→美濃→近江→京都という上洛への道筋が開きつつあった。信長はまず近江の六角氏を破り、次いで京都周辺の三好氏を撤退に追いこみ、遂に永禄十一(1568)年、義昭は上洛を成し遂げることができた。この頃14代将軍義栄は病没していた。京都を見ることなく死んだ義栄と上洛を成し遂げた義昭という劇的な将軍の交代であった。そして同年義昭は念願の征夷大将軍に就任する。この時、義昭は信長に宛てた書状の中で『御父』織田弾正忠殿(『』は筆者注)と最大限の敬意を示している。

3. 上洛と信長との関係



時は流れ、元龜元(1570)年、信長は義昭の命で若狭へ出陣する。その過程で朝倉氏と戦いになり、さらには浅井氏が裏切り信長は窮地に陥る(金ヶ崎の戦い)。態勢を立て直し、織田・徳川連合軍は浅井・朝倉連合軍を打ち破る(姉川の戦い)。その後も息つく間もなく、摂津に侵攻した三好氏と戦う(野田・福島 of 戦い)。信長と共に義昭自身も烏丸光康率いる公家衆とともに出陣し、まさに義昭傘下の全兵力を動員した戦いとなったが、戦いは劣勢となり、和睦に持ち込もうとした矢先に本願寺が浅井氏との盟約から蜂起し、慌てた義昭は朝廷に本願寺に対し、蜂起をやめるよう働きかけるよう頼みこみ、本願寺は矛を収めた。ところが本願寺の蜂起を知った浅井・朝倉軍は延暦寺を味方につけ近江に攻め込み、信長と対峙する(志賀の陣)。信長の劣勢が続いたが、ここで活躍するのが「将軍」義昭であった。義昭は織田氏と朝倉氏にそれぞれ和睦するよう勧告し、和睦となった。かつて義昭が将軍就任前に和睦を勧告したことを前述したが、このように実効性を持った勧告を行うことが出来た義昭は正に「天下人」だったのである。ただ、当時での「天下」とは五畿内(大和、山城、和泉、河内、摂津)を指す事には注意すべきである。となると、信長の「天下布武」という言葉にも一考の余地がある。武力で全国を統一する野望の現れと習った人も多いのではないだろうか。しかし、信長の天下布武とは天下(=五畿内)に将軍家の支配を復活させるという意味であったという説が近年では主流となっている。

こうした和睦を勧告するように、諸大名の間に入れる将軍の権威は大名たちにとっても、実利があるが故に期待され、また義昭自身も自覚し、入洛後も精力的に行っている。このような義昭の働きは信長の傀儡という現代における虚像を覆すのに足る証拠ではないだろうか。ともかく、信長と義昭は傀儡ではなく、「良好な」関係にあった。(ここにおける「良好」とは関係の良いという意味ではなく、距離感が良いという意味)

4. 義昭挙兵

さて、ずいぶん長々と義昭について書いてきたが、ここからが本題の義昭の挙兵に関してである。その前に、既に事実として確定されている重要な事柄を時系列順に整理しておこう。

元龜三(1572)年 10月 武田信玄、西進を開始、12月 三方ヶ原の戦い、元龜四(1573)年 2月 義昭「挙兵」、4月 武田信玄死去、7月 義昭再挙兵。

結論から言えば、元龜四(1573)年の7月に義昭は挙兵し、息子の義尋を信長に人質として差し出し、京都から追い出される事となる。信長が真の実力者である事は周知の事実ではあったが、なぜ義昭の上洛の最大の功労者であり、「天下布武」を主張した信長が義昭を討つことになったのか。通説的には元龜三年9月に「異見十七箇条」(義昭の失政をこれでもかと厳しく批判したもの)が信長から義昭に提出され義昭が挙兵するに至った。さらには、三方ヶ原の戦いに至る武田信玄の西進も、義昭の指示に依るもので、それに呼応して義昭は挙兵するに至った。……というのが定説



的である。

だが、近年ではこの「異見十七箇条」は元龜四年（特に2月）に出されたとされる説が有力視され、また、元龜四年の正月には徳川家と武田家の和睦を促していたとする史料もあるとされる。少なくとも元龜三年末までは信長と義昭の関係に問題はなかったのではないだろうか。では何が原因か。反信長派の幕臣を抑えられず義昭自身も信長との協調の放棄に至ってしまったことや、武田の三方ヶ原での勝利が義昭と幕臣に大きな動揺を与えたことは想像に難くない。そもそも、信長と義昭に距離感があったことは当然だった。あくまで私見だが、足利將軍家がそもそも織田家に頼り切る構図自体がおかしかったと考える。そこで、各地の大名が反信長同盟を組み始めた今、信長にだけ頼ることこそ危険と映ったことがこの「浮気」に至る原因なのではないだろうか。このあたりの一連の流れはかなり謎に包まれており、さらなる研究が俟たれるところである。

かくして元龜四年2月、義昭は二条城に立てこもり「挙兵」（信長と争ったのは事実だが、本当にその時点において挙兵であったかが確実になければ、あまりに計画性が無かったため、前述のように幕臣の反信長派に引っ張られた結果でしかなかったとする説もある）する。当初信長は人質を送り、和睦を提案した。しかし、その人質を送り返し、明確な敵意を表明する。これに対し、信長は洛外を、次いで上京を焼き、その結果、正親町天皇の調停という形で和睦した。

ところが、いや対立はもはや鮮明であった、7月に再び義昭は挙兵する。京都の二条城も、自らが立てこもる宇治の槇島城も信長の圧倒的兵力の前に屈し、息子の義尋を人質に出し、河内に落ちていった。その様子を人々は「貧報公方」（公方は將軍の意）と嘲笑したという。さんざんである。

5. その後の義昭

その後、義昭は毛利氏を頼り、鞆に拠点を移し、めげずに信長と戦い続ける道を選ぶ。ここで注意したいのは、信長によって京都を追放されたのは事実だが、征夷大將軍の職を失ったわけではないということだ。この事は、室町幕府は滅びてはいないという見方も可能である（「鞆幕府」を主張する学説がある）。とはいえ、「幕府」として機能していたとはいえないので、やはり室町幕府が滅びたのは京都追放と時を同じくするのではないだろうか。話が逸れたが、前述の通り、「將軍」義昭は鞆に逃れ、ここでも和睦の勧告など、その権威は決して衰えず、政治工作を続けていたことは事実である。その後、豊臣秀吉が関白になり、本能寺の変から5年後の天正十五(1587)年には帰京が叶ったらしい。征夷大將軍の位を返上したのはその後のことである。

慶長二(1597)年8月28日、大坂で腫物の為亡くなる。61年の激動の戦国の世を將軍という立場で生き抜いた義昭。將軍（笑）と評されがちだが、最新の研究はそのイメージを覆しつつあるのである。

6. おまけ

最後まで読んでくれたあなたにまずは感謝。読んでいる途中で気づいただろう。ただの足利義昭の人物伝じゃん。大体義昭挙兵なんて秒速で終わっているから書くこと無いんだよ！とはいえ、義昭挙兵は信長と義昭の関係を読み解いてこそと思い、こう書いてみた次第である。そもそも、足利將軍家というものが弱体で、誰かと一緒にいないと生きていけないような寄生虫家だった。でも一人にべったりになると、相手の言いなりになるし、巻き込まれる可能性がある。距離を置くといざという時に助けてもらえないかもしれない。そんなジレンマを抱え、代々それを繰り返しながら、室町時代を創り上げた。室町幕府は地味だが今の日本みたいで案外面白いものである。ともかく、私が信長視点での義昭挙兵ではなく、義昭の人生自体に重きを置いた意図

が伝われば幸甚である。

参考文献

桐野作人「足利義昭伝」(『歴史群像』164号、2020年)

黒嶋敏『天下人と二人の将軍』(平凡社、2020年)

奥野高広『足利義昭』(吉川弘文館、1960年)

神田千里「第十五代 足利義昭」、山田康弘「第十三代 足利義輝」、天野忠幸「第十四代 足利義栄」(榎原雅治・清水克行編『室町幕府将軍列伝』、戒光祥出版、2017年)

参考資料

本文中全図出典：桐野作人「足利義昭伝」(『歴史群像』164号、2020年)

姉川の戦い

26R 矢澤 壮太

はじめに

姉川の戦いとは、元亀元年(1570年)6月28日に近江浅井郡姉川で行われた織田・徳川連合軍対浅井・朝倉連合軍の合戦である。「姉川の戦い」という呼び名は徳川氏の呼び方であり、織田・浅井両氏の間では「野村合戦」、朝倉氏では、「三田村合戦」と呼んだ。

1 上洛への道

尾張出身の織田信長は桶狭間の戦いで駿河の今川義元を討ち取り、美濃も制圧した。京への上洛を目指す信長は尾張から京への線上にある近江の領主、浅井長政と同盟を結ぶ必要があった。そこで、妹のお市の方を長政に嫁がせ、血縁関係を結んで、同盟を固めたのである。その後、信長は足利義昭と共に上洛し、義昭を室町幕府15代将軍とした。将軍を味方につけた信長は強気になって、越前の朝倉義景に2度義昭の命令だとして上洛を命じた。しかし、義景はこれを拒否した。理由は朝倉家が織田家に従う形になることを嫌ったためである。ところが、信長はこれを好機ととらえ、1570年4月20日、「朝倉義景に謀反の疑いあり」として越前へ出兵。織田・徳川連合軍が越前へ攻め込んだ。連合軍は、4月25日には金ヶ崎城を落とし、朝倉氏の本拠地である一乗谷に迫りつつあった。

2 浅井長政の苦渋の決断

勝敗は決定的と思われたが、信長と血縁関係を結んでいたはずの浅井長政が突然信長を裏切り、織田軍の背後に襲い掛かったのである。長政が裏切った理由として、信長と同盟を結んだとき、信長は、「浅井氏と関係の深い朝倉氏を勝手に攻めない。」という約束をしていた。浅井氏と朝倉氏は古くからの付き合いで、友好的な関係だった。しかし、信長は朝倉氏を攻めた。追撃をしてくる朝倉軍を前に、窮地に陥った信長は、木下藤吉郎にしんがりを任せ、「金ヶ崎の退き口」と呼ばれる金ヶ崎城から京への撤退を余儀なくされた。

3 織田信長の反撃と姉川の激戦

態勢を立て直した信長は、6月19日に浅井氏の本拠地の琵琶湖北へと侵攻を開始。数々の城を落とし、浅井長政のいる小谷城に迫った。小谷城は織田軍の進撃に備えていたため、守りが固く、なかなか落とせなかった。そこで、小谷城近くの横山城を包囲して、龍ヶ鼻という場所に砦を築いた。そしてついに、6月28日午前6時頃、姉川の北側

に浅井・朝倉連合軍約 18000 人、南側に織田・徳川連合軍約 29000 人がそろい、姉川の戦いが始まったのだ。始まった当初は、浅井・朝倉連合軍が優勢で激戦となった。長政が陣を置いた場所の南側を流れる川は「血川」、朝倉軍と徳川軍が向かい合った中間地点には、「血原」という地名が残っているほどだ。しかし、浅井・朝倉連合軍の陣形が縦に伸びて散らばっているのを見た家康は、家臣の榊原康政に命じて側面から攻めさせ、朝倉軍が不利な状況になった。一方で浅井軍と織田軍の戦闘でも、浅井軍の一部の部隊が織田軍へ深く進攻した。織田軍の 13 段構えの陣が 11 段まで突破されたが、横山城の監視にあっていた織田側の軍勢が援軍として加わり、浅井軍も不利な状況になった。こうして、結果的に織田・徳川側が 1100 余りを討ち取って勝利したものの、両軍とも多くの犠牲者を出した。信長は小谷城から 50 町ほどの距離まで追撃し、城下町に放火した。姉川の戦いの後すぐに、横山城は降伏し、木下藤吉郎を城主にした。

姉川の戦いにおいて、特に浅井家の被害は甚大だった。長政が信頼していたと言われる重臣、遠藤直経や長政の実の弟の浅井政之をはじめ、家臣の浅井政澄などの浅井家で中心的な役割を果たしていた武将が戦死した。浅井、朝倉軍は、戦場からの撤退戦で多くの戦死者を出した。

この戦いに敗れたものの、まだ浅井・朝倉連合軍に力があり、比叡山の僧兵や、石山本願寺の一向宗と手を結び、琵琶湖西の志賀郡で信長軍と「志賀の陣」と呼ばれる攻防戦が繰り返された。これらの戦いでは織田方の被害も軽いものではなく、信長の実の弟の織田信治をはじめ森可成、坂井政尚などの諸将を失った。

4 織田の謀略と浅井・朝倉の滅亡

軍事力だけの攻略は難しいと考えた信長は、謀略による浅井家の内部分裂を図った。その代表例が、姉川の戦いで武功を挙げた磯野員昌である。姉川の戦いで領国が南北に分裂されていたため、佐和山城を守る磯野らは孤立してしまい物資の補給がままならない状態にあった。そこに目を付けた木下藤吉郎が浅井家に「磯野に織田方との内通の疑いあり」という噂を流し、疑念を持たせることに成功。これにより、長政は何度も来る磯野の物資補給の申し出を全て拒絶し、兵糧が少なくなった磯野はついに織田方に降伏した。次第に弱体化していった浅井・朝倉両氏は、甲斐の武田信玄や本願寺顕如と関係を深めた。1573 年信玄が三方ヶ原の戦いで徳川家康に大勝し、一時信長包囲網は、優位になったかに見えたが、信玄は直後病死。後ろ盾を失った浅井・朝倉氏は、ますます後退し、同年にそれぞれ、小谷城の戦い、一乗谷城の戦いで信長に敗北。長政も義景も、最期は自害して果てた。

おわりに

浅井・朝倉氏が滅亡した直後、信長は足利義昭を見限り、京都から追放した。将軍不在のまま中央集権を維持しなくなっていた信長は、天下人への道を歩み始める。しかし、この約 10 年後、本能寺の変において志なかばで倒れることになるのだが、それはまだ先の話。

参考文献

- ・矢部健太郎「戦国武将大事典」（2016 年/西東社）
- ・「日本史通覧」（2014 年/帝国書院）
- 「【刀剣ワールド】姉川の戦い古戦場」刀剣ワールド <https://www.touken-world.jp/dtl/anegawa/>（最終閲覧日 2021 年 8 月 12 日）
- 「浅井長政-戦国武将-刀剣ワールド」刀剣ワールド <https://www.touken-world.jp/tips/7483/>（最終閲覧日 2021 年 8 月 12 日）
- 「姉川の戦い」ウィキペディア

長篠の戦い

22R 中田紘己

はじめに

この論文をつくるにあたって多少、語彙が不可解な部分があるかもしれないが、許していただきたい。

長篠の戦いは天正3年5月21日(旧暦)に織田・徳川連合軍と武田勝頼が戦った戦である。結果はご存じの通り織田方の勝利であるが、この論文では、武田信玄死後から武田氏の衰退までを書いていく。最後まで読んでいただきたい。

1 信玄死後の武田家内情

信玄が死去したため、武田家は四男の武田勝頼が後を継いだ。信玄の遺言は「自分の死を周囲の大名に3年しられないように」というものだった。が、勝頼の努力むなしく信玄死去の報は瞬く間に広がった。これにより、織田・徳川は窮地を脱した。勝頼はまだ若く、母が諏訪家出身ということ、また父信玄が余りに偉大ということもあり、あまり武田家旧臣をまとめきれなかった。

2 勝頼の外交政策

信長は上方の信長包囲網を一掃した。信玄に三方ヶ原の戦いで破れた家康も反撃に出始めた。これに対して井伊谷まで攻撃を受けた勝頼は山家三方衆と関係が切れなようにした。しかし、天正元年八月末奥平定能・信昌父子が徳川に寝返り、長篠城が陥落し武田の勢力は後退した。

天正2年1月末、勝頼は東美濃に出陣し、明智城を2月5日までに攻略。続き、櫛原城・飯狭間城などを陥落させ、織田軍の動きをみて、速やかに兵をひいた。岩村城の守りを固めるためである。

3 勝頼の遠江・三河侵攻と信長出陣

天正2年2月家康が二俣城攻めを開始した。これに対し勝頼は4月下旬、菊川入江を通じて太平洋につながる高天神城を取り囲んだ。勝頼の攻撃に本丸・二の丸を残すのみとなり、城主小笠原氏助は降伏した。さらに遠江諸城を次々と陥落させた。武田勢先鋒隊は足助城を降伏させ、東三河に進軍。山県昌景らは家康の家臣に攻撃をした。救援に来た家康に猛攻を加え、家康を敗走させた。

そして、勝頼は長篠城攻めを決行した。長篠城城主は奥平信昌である。武田の大軍に囲まれた信昌は援軍を家康・信長に要請した。京にいた信長は4月28日に岐阜に到着。5月13日に岐阜を出発し、設楽原に到着したのが5月18日である。兵力は3万8千だった。

4 三段うち戦法の有無

長篠の戦いの説明をする前に、戦いで信長が用いたとされていた三段うち戦法の有無について説明しよう。少し前まで、信長は火縄銃の三段うちで勝利したといわれていた。しかし、近年その説が覆されている。そもそも、三段うちとは、一列目が鉄砲を撃ち、その次に二列目が鉄砲を放つ。(この間、一列目は次の鉄砲を撃つ準備をしている)。その次に三列目が鉄砲を撃つことを繰り返すものである。しかし、これでは、いくつかのグループごとに一斉に鉄砲を放つため、グループ全員が準備し終わるのを待たなくてはならない。そのため、50mを4～5秒で走る騎馬隊にやられてしまう。このことから、三段うち戦法は行われなかったであろう。そこで考えられているのは、まず最前列が鉄砲を自分のペースで撃つ。最前列は鉄砲を撃ったら、後ろに下がり後ろで待機していた

兵士が最前列のあいている場所に進む、ということの繰り返すというもの(先着順自由連射)である。これなら、鉄砲を撃つ間隔があかない。これでは武田の騎馬隊もなすすべがない。これが有効な撃ち方だろう。

以前まで、武田軍は無駄な突撃を繰り返し多くの戦死者をだしたと言われていた。しかし近年、武田軍も鉄砲を使い戦ったと考えられている。織田・徳川連合軍の鉄砲は約3000丁。兵力からみると武田は1000～1500丁ほどの鉄砲を持っていたと考えられている。これなら一点に鉄砲を撃ち続ければ馬防柵を破り、騎馬・足軽隊が突撃し武田が勝ちそうだが、武田には弱点があった。連合軍が持つ鉄砲玉は約90万発、対する武田は5万発。圧倒的な差である。また普通、鉄砲玉は融点が高い鉛を原料にしてつくられている。加工がしやすいからである。しかし、武田の鉄砲玉の原料は銅銭であった。銅は融点が高く加工しにくい。鉛は日本ではあまりとれず、南蛮貿易で日本にもたらされていた。貿易の中心地は堺・長崎。堺をもっている信長と違い、勝頼は鉛の入手が困難だったのである。また武田は長篠城の戦いで鉄砲玉を消費していたため鉄砲玉の数が少なかったのである。

信長は三重の馬防柵、馬防柵の前に逆茂木、盾などの障害物をおいた。また連吾川を堀として三番目の馬防柵の後ろに山があったため信長はそれらを利用して一つの城のようにして自陣を守っていたのだ。勝頼は重臣たちの意見を退け開戦を決意。設楽原に進軍した。勝頼には焦りがあった。信長・家康の二人が目の前に現れた。その二人を討ち、早く家臣たちに自分を認めさせたかったのである。また勝頼の情報不足からくる判断ミスもあった。信長はわざと兵を窪地に隠し、勝頼の油断を誘ったのである。織田・徳川連合軍別動隊の酒井忠次らは、5月20日午後8時頃、本陣を出発し南側の山中を迂回して長篠城へと進軍した。翌21日の午前8時頃、鳶ノ巣山砦に奇襲を仕掛けた。結果は酒井軍の勝利。砦を守っていた勝頼の叔父の武田信実と三枝守友は戦死。忠次はそのまま周辺のを落としてながら長篠城へ入城。武田はあっけなく敗走した。つまり勝頼は合戦開始時点で退路をたたれてしまったのである。勝頼は連吾川はさみ織田・徳川連合軍と対峙した。

戦いは午前8時頃(所説あり)に始まった。武田軍は足軽隊で兵をおびき寄せて鉄砲で撃ち柵を破ろうとした。徳川軍の一部には通じたものの織田軍には全く通じなかった。信玄のころからの旧臣たちも隙をみて突撃。柵の突破が難しいと考えた山県昌景は柵のない場所からの突撃を試みるが徳川家家臣の大久保忠世に阻まれ退却。土屋昌次は鍵縄で柵を引き倒そうとした。しかし第一の柵の後ろには第二・第三の柵があった。第二の柵も引き倒そうとしたが鉄砲で撃たれ戦死。山県昌景ももう一度柵を突破しようとしたが鉄砲に撃たれ戦死。真田信綱・昌輝兄弟も織田方の柵を突破するが、武田軍も数度の突撃により、兵も少なくなっており退却。午後2時頃、武田軍は退却を開始した。そこへ今まで、柵のなかに籠っていた織田・徳川軍が襲いかかるのである。武田軍の殿は馬場信春、真田兄弟。馬場・真田は勝頼が甲府に逃れる時間を稼いだ。しかし、織田の本



合戦の地図

軍が攻めてくると、多勢に無勢、馬場信春、真田信綱・昌輝は戦死した。長篠の戦いは6時間以上に及ぶ激しい戦いだった。

武田重臣の戦死 武田の衰退

ここで、長篠の戦いの武田重臣の主な戦死者をまとめておく。

勝頼の親戚 信玄の弟、武田信実 武田信繁の弟、武田信豊

武田二十四将 山県昌景・内藤正豊・原昌胤・土屋昌次・真田信綱・馬場信春・横田康景・三枝守友

他家臣 真田昌輝・甘利信康

上にあげた戦死者はごくわずかで、武田軍の戦死者は1万人ほどである。織田軍の戦死者は6000人程度で激しい戦いだったことが分かる。長篠の戦いの敗北により信長包囲網はとても弱まった。

6月2日、勝頼は甲府に帰国。長篠の戦いに敗北したことにより、勝頼は信長・家康の追撃をうけた。11月には、岩村城が陥落した。城を守っていた秋山信友は12月に逆さ磔という極刑で殺された。また同じく城を守っていた信長の叔母、おつやの方も逆さ磔で殺された。

天正6年に上杉謙信が死去したことにより御館の乱が勃発。最初は北条氏の要請により上杉景虎に味方していたが、領地の関係で結局、上杉景勝に味方した。そのため、北条氏も敵に回してしまう。武田は長篠の戦い後、7年間もちこたえ、一時は信玄の時代以上の勢力を誇った。しかし長篠の戦いの敗戦の影響はあまりに大きかった。高遠城、高天神城などの落城。穴山信君(梅雪)、さらには小山田信茂などの裏切りにより武田勝頼、桂林院、嫡男信勝らとともに自害。これにより名門の戦国大名、武田氏は滅亡した。

参考文献

矢野隆著『長篠の戦い』(2021年/講談社文庫)

丸島和洋著『武田勝頼』(2017年/平凡社)

すずき孔『真田三代』(2016年/戎光祥出版)

野澤公次郎『武田二十四将と甲州軍団』(1985年/財団法人武田信玄公宝物保存会)

『長篠の戦い』Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%95%B7%E7%AF%A0%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84> (最終閲覧 2021年8月20日)

コトバンク日本大百科全書 長篠の戦い解説 (最終閲覧日 2021年8月27日)

「【長篠の戦】とは?長篠・設楽原の場所で鉄砲三段撃ちで大勝利!「織田徳川軍 v s 武田騎馬軍団」の攻防!」戦国バトルヒストリー <https://www.sengoku-battle-history.net/nagashinotatakai/> (最終閲覧日 2021年8月26日)

『長篠の戦い勝因わかりやすく!信長勝利の鉄砲3段撃ちは全くのウソだった!!』戦国バトルヒストリー <https://www.sengoku-battle-history.net/nagashinotatakai2/> (最終閲覧日 2021年8月21日)

对本願寺戦争

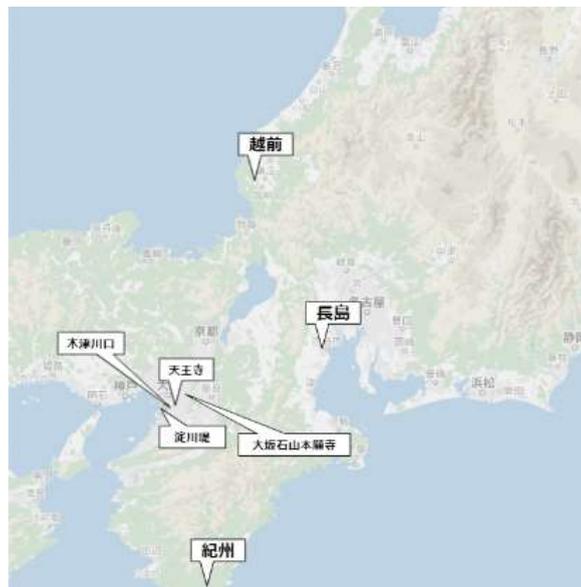
54R 長谷川慧

はじめに

浄土真宗本願寺派とは浄土真宗において最も力を持っていた派閥である。そもそも浄土真宗は鎌倉時代に親鸞が創始した仏教の宗派の一つで、「南無阿弥陀仏」と唱えるだけで現世と来世の幸福を保証するという手軽なもので

あったため、農民階層を中心に信者が多かった。その中で本願寺派は信者の結束が強いなどの理由で度々大名などに対し、反乱（一向一揆という）を起こしていたことより恐れられる存在であった。

大坂石山本願寺（以下、石山本願寺）は、元は蓮如（本願寺第8世法主）が隠居先とした場所であり、大坂御坊と呼ばれた。畿内で本願寺は京都山科を本拠としたが、一向一揆を背景として本願寺の影響力が強くなり、それを恐れた細川晴元が山科本願寺を焼き討ちした。これにより、山科の機能が停止し、新たな場所を探す必要がでてきた。本願寺は加賀に大きな勢力を持っていたが、信者の往来には不便かつ京都からのアクセスも不便であった。また、本願寺一門内の内戦を加賀で起こしており、現地では本願寺への不信感があった。そこで証如（10世法主）は京都に近く、交通の便の良い大坂御坊を本願寺の本拠とし、石山本願寺と改称した。こうして、石山本願寺は本願寺の本拠として発展した。



1 勃発の経緯

桶狭間の戦いで今川義元を倒し、天下統一を目指す信長は、経済の中心地として繁栄していた大阪に、天下を治める拠点の設置を図った。そこで信長は石山本願寺に目を付けた。石山本願寺のあった上町台地は、大阪で貿易都市として繁栄していた堺に位置していた。ここに拠点をおけば、堺の市場から大きな利益が得られる。それに加え、周辺を淀川と大和川が流れ、防衛しやすい地形が故に攻め落とされるリスクも少なく、京の朝廷への牽制もできると信長は考えた。

そこで信長は当時石山本願寺の門主であった顕如に一方的に石山本願寺の明け渡しを命じた。余談だが、これより前にも信長は石山本願寺に対し、軍資金、信徒の動向、顕如の行動に対し信長の許可を必要とするなどの一方的な要求もあったためか、顕如が信長軍に対し攻撃を行い、石山合戦（石山戦争）が勃発した。

2 淀川堤の戦い

1570年9月、顕如は摂津福島にいた信長軍を攻撃した。その後、本願寺勢は淀川堤で信長軍と対決した。信長軍優勢の状態が終わったため、本願寺勢は石山まで後退し、籠城した。信長軍は石山に監視部隊を派遣すると、朝廷に勅書を出すなどして、本願寺勢との直接戦闘を避けた。

3 長島・越前一向一揆

1573年に信長は朝倉義景、浅井長政を倒し、義景領であった越前に朝倉の元家臣であった前波吉継に統治させたが、吉継の統治に対し、反感をもった

勢力に吉継が殺された。その後、次々と信長側の役人を排斥した。これが越前一向一揆である。これにより、信長は越前を一向宗に奪われた。

それを聞いた顕如は七里頼周（本願寺勢の元下級武士）、下間頼照（下間氏は本願寺に代々仕えていた）を越前に派遣し、統治させた。これにより信長と本願寺勢の和議は決裂し、本願寺勢は再度信長軍に対し挙兵した。

本願寺勢は長島、石山、越前の三拠点で信長軍と交戦していた。しかし、三拠点の各部隊はそれぞれ独立していたため、信長は各個の撃退を試みた。同年7月に大動員令を発令し、まず長島を陸海上から包囲し、補給路封鎖により兵糧攻めを行った。その甲斐もあってか、2ヶ月ほどで本願寺勢は降伏したが、信長はこれを許さず、長島から出てくる本願寺側の者を殲滅した。

1575年に信長軍は本願寺勢と結託した高屋城主を降伏させ、長篠の戦いで武田勝頼を破った後、再度動員令を発令し、越前方面へと進攻した。一方、越前では下間など本願寺から越前統治のために派遣された者によって民衆へ課された重税などをめぐり、両者の関係は悪化した。これにより一向一揆（元は友軍として信長側の役人を排斥していたが、課税問題で対立している状態）が起きた。こうした越前での混乱に乗じて、信長軍はすぐに越前を制圧し、加賀南部まで進軍した。

重要拠点の長島と越前が制圧され、長島では本願寺勢に対する根切が信長軍によってなされたことを聞いた顕如は、信長に条書と誓紙を納めることで和議を結んだ。しかしこれに対し信長は「今後の対応を見て赦免するかを決める」とするなど、信長側に有利な和議となった。しかしこの当時信長は上杉、武田、毛利に三方を挟まれていたため、この和議は信長にとって軍事上不利ではなかった。

4 天王寺合戦

1575年に中国地方では毛利が備中、備前、美作を手中に入れ、播磨までの侵攻を可能にした。また瀬戸内海の制海権を確保したことで対信長軍を視野に入れた大坂の石山本願寺勢との連携が検討され始めた。

和議を申し入れた本願寺勢であったが、毛利が味方に付いたことで態度を変える。当然ながら本願寺勢にとっても石山本願寺を信長に明け渡すことは避けたい。そこで和議を無視し、顕如はまた信長軍に対し挙兵する。裏切られた形となった信長は明智光秀を戦場に投入し、石山本願寺を三方から包囲した。しかし、本願寺勢は海上経由で物資を運搬するルートを持っていたため、運搬ルート上の木津を信長軍が攻めると、本願寺勢はこれを撃破し、逆に信長軍の天王寺砦まで進軍する。まさかの事態に明智は天王寺砦に籠城し、信長に援軍を要請する。

これを聞いた信長は急遽招集した少数の兵で天王寺に向かい、明智と合流した。籠城を想定していた本願寺勢は信長の登場により撤退した。その後、信長は石山本願寺を完全に包囲した。

5 第一次木津川口海戦

信長軍と本願寺勢同士の戦いではないが、多少触れる。天王寺合戦の結果、石山本願寺を包囲された本願寺勢は味方の毛利に救援を要請する。要請を受け

た毛利は木津川口方面に船（毛利水軍）を送り、周辺の信長軍を撃退し、物資を本願寺勢に届けた。これにより、信長軍は監視部隊のみを残して撤退した。

6 紀州征伐

これもまた本願寺勢は関係ないので、概略だけ書く。1577年当時紀州には雑賀衆と呼ばれる集団がいた。この集団は先述の第一次木津川口海戦で毛利水軍とともに信長軍を撃退した。この雑賀衆の中で雑賀三緘衆という反本願寺勢力がいた。その勢力の協力もあり、信長軍は紀州へ進軍し、雑賀衆を討つ。これが紀州征伐である。

7 第二次木津川口海戦

こちらの出来事も本願寺勢は直接関係ないので大枠のみを書くこととする。第一次木津川口海戦で敗戦した信長軍は毛利の艦隊を破るため、信長は部下の九鬼嘉隆に命じ、大砲を装備した黒船を建造した。信長は鉄甲船などの兵器を使って、1577年11月に木津川周辺の毛利水軍を撃破した。

おわりに

信長による兵糧攻めを完了し食糧が尽きたことで、顕如は信長に降伏し1580年に石山本願寺を明け渡す。

その2年後の1582年には本能寺の変が起きる。そして信長が11年に及ぶ戦争の末に手に入れた石山本願寺跡地に豊臣秀吉が大坂城を築くのである。

参考文献

石山合戦 Wikipedia（最終閲覧日 2021年8月12日）

織田家と地方大名との関わり

14R 吉川智也

信長包囲網

将軍の座に就いたとはいえ、義昭の立場はまだまだ不安定だった。

1570年、信長は義昭に5か条の条書を渡した。その内容に激怒した義昭は各地の大名に信長討伐の使者を出した。これが第一次織田包囲網の始まりである。

同年4月、信長は義昭の上洛の命令に従わなかった朝倉義景を攻めたが、浅井長政の裏切りによって多くの死者を出した。

同年6月、態勢を立て直した信長は徳川家康とともに姉川の戦いで浅井、朝倉連合軍を破る。

1570年、石山本願寺の顕如は信長に対して挙兵し、全国の一揆勢に反信長を呼び掛け



た。

1571年、信長は中立を保てという命令を破った比叡山延暦寺を焼き討ちした。

延暦寺焼き討ちに激怒した武田は信長を倒すために上洛戦を開始し、徳川家康を三方ヶ原で破った。信玄を恐れた信長は義昭と和睦しようとするも、義昭はこれを拒否、すると、信長は京の町に火を放ち、義昭は仕方なく和睦に応じた。この時、病に臥せていた武田信玄が病死し、武田軍は退却していたため、義昭を助けに来なかった。武田信玄という後ろ盾を失った義昭は、幾度となく信長に反旗を翻すも失敗。

1573年、信長により追放されて、室町幕府は滅亡した。

同年8月、信長は浅井の裏切りにより果たせなかった越前討伐を遂に成し遂げ、逃亡した朝倉義景は逃亡先で家臣の裏切りに会い、自害した。

続いて信長は小谷城の浅井を攻め、ほどなくして小谷城は陥落し浅井久政、長政親子は城内で自害した。浅井長政に嫁いでいたお市の方は、3人の子供と一緒に城から脱出した。

1574年9月、信長は4年も続いた長島一向一揆に総攻撃を仕掛け、城に立てこもった男女2万人を皆殺しにした。

その後、信長は長篠の戦いで勝利し、武田を滅亡させ、一向一揆勢を鎮めて、信長包囲網を打ち破った。

参考文献

山本博文『角川漫画学習シリーズ 漫画人物伝 織田信長』（2017年/角川文庫）

資料

「【麒麟が来る】信長包囲網さんガバガバ……」大河ドラマ2ch

<http://2chtaiga.com/archives/7882040.html>

第三章 絶頂期の信長

編集担当 生嶋文敬 大内和音

第一章、第二章で信長が天下布武を目指して数々の敵を打倒していく様について扱ってきた。この第三章では歯向かってきた多くの敵を倒し終えた信長のその後について説明していこうと思う。

目次

武田攻めp35	57R	野口和礼
本能寺p35	25R	中島司朝
コラム 信長の世界構想p37	13R	福原知弥



兵庫県立歴史博物館蔵 織田信長朱印『天下布武』

天下布武の印は織田信長の武力によって天下に号令するとの意思を示したものである。

武田攻め

57R 野口和礼

甲州征伐開戦前期

長篠の戦いで有力な家臣たちを多く失う大敗を喫した武田信玄の跡継ぎ、武田勝頼は対織田の体勢を立て直すため、周辺国との同盟を試みた。後北条家、上杉景勝両方にそれぞれ妹を嫁がせ同盟関係を築いた（甲相同盟、甲越同盟）。しかし上杉謙信の死後の後継者争い（御館の乱）で後北条家と対立し、その後継者争いで疲弊した上杉家には、もはや国外への影響力は残っていなかった。一方で織田家は近畿、関西、北陸の戦いに追われていたため、しばらく東の武田家に矛先を向けてはいなかったが、三河（愛知県南東）の徳川家康による幾度の攻勢で勝頼はそのたびに出兵せざるを得ず、少しずつ消耗させられていった。そこで勝頼は人質として武田家に住まわせていた信長の五男（四男とする説もある）御坊丸の返還と常陸国の佐竹氏と新しく結んだ同盟を手札に和睦交渉を迫るが決裂。さらに、天正8～9年に徳川家康が攻撃し兵糧攻めをした際に勝頼が援軍を送れずに落城してしまったこと、徳川家への再三にわたる出兵や新府城（山梨県北東部の韮崎市）の築城資金を創出するために多大な量の年貢、賦役を課したことで人心は勝頼から離れていった。

甲州征伐

信濃国の木曾谷（長野県の南西部）の第19代領主である木曾義昌のさらなる賦役の増加を理由とした武田家からの離反に憤慨した勝頼が木曾一族を処刑したことを皮切りに織田軍は武田進攻を開始。まずは信濃国へ、伊那口（長野県南東）から攻める総大将、織田信忠を筆頭に関東口に北条氏政、駿河口（静岡中央部）に徳川家康、飛騨口（詳細不明）には金森長近と、大軍で包囲した形で攻め込んだ織田軍。2月中旬、本隊信忠軍に対峙する武田軍は次々と逃亡、投降し、また徳川家康が駿府城（静岡城）まで進出。織田軍は信濃国南部を戦わずして手中に収めた。2月下旬～3月にかけて北条氏政は駿河東部に攻め入り武田軍の拠点を陥落させた。3月初旬には信忠軍の高遠城（伊那）の包囲に武田家家臣の仁科信盛（盛信）は最後まで抵抗するが落城した。その同時期に高遠城への援軍を計画していた勝頼だったが武田一族の穴山梅雪の寝返りによって本国の甲斐（山梨県）が危険にさらされたため断念。勝頼は諏訪上原城（諏訪は長野県中央東）から新府城に撤退したが途中で7千もの兵が逃亡した。その後も織田軍の勢いは止まらず、3月3日に武田勝頼は新府城を捨て、武田二十四将に数えられた家臣の小山田信茂を頼りに岩殿山城（山梨県西部大月市）へ逃れるが、道中で小山田信茂に裏切られ天目山（甲州市大和町、岩殿山城の西）を目指す。3月11日、勝頼一行は滝川一益と天目山の近く、田野の地にて対峙、奮戦したのちに武田勝頼は嫡男・信勝と刺し違えて自刃する。勝頼の自刃をもって武田氏は滅亡し、織田軍による甲州征伐、武田攻めは幕を閉じたのである。

参考文献

「甲州征伐」 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%B2%E5%B7%9E%E5%BE%81%E4%BC%90>
（最終閲覧日 2021年11月3日）

本能寺の変

25R 中島 司朝

1 初めに

本能寺の変とは、天正10年6月2日（新暦1582年6月21日）に明智光秀が、主君である織田信長を、京都の本能寺にて襲撃した事件である。この変で織田信長は、早

朝寝込みを襲われ、しかも150人から160人（諸説あり）の軍勢しかいなく、対する明智光秀は、約1万3千人と圧倒していた。織田信長は、包囲された事を悟ると寺に火を放ち、切腹した。このことにより、織田政権は終わりを告げた。なお、織田信長の後を継ぐ予定だった実の息子織田信忠も明智勢に襲われた。織田信忠は、宿泊していた妙覚寺から二条御新造に移り、抵抗するも結局、火をつけて自刃した。このことにより、天下は明智光秀のものかと思われたが、織田家親子の首が見つからなかった事により、織田家親子が亡くなったという確証が得られず生存説が広まり、中々他の武将の支持を得られなかったと言われている。（豊臣秀吉は、織田家親子が生きると明智光秀に近い者に虚偽の書簡を送ったとされる）また、豊臣秀吉による有名な中国大返しは、明智軍にとって驚きだった。毛利などを相手に戦っていたはずなのにわずか10日あまりで約230kmを踏破したからだ。そして、同年6月13日に山崎の戦いで明智光秀は破れ、結局11日ないし12日の天下だった。この戦いは豊臣政権を構築する契機となった。

2 背景

本能寺の変を起こす前に、明智光秀は四国の長宗我部元親と信長との取次役になっていた。しかし、信長は方針を転換し、遂に信長三男を総大将に任命し、四国を征伐する事になってしまった。とは言え、天正九年の馬揃えで光秀が責任者になっており、織田軍団の「ナンバーツーのポスト」についてという自負が目覚めていたと、野望説（後述）論者の永井路子氏は考えている。信長による全国平定の戦略が実を結びつつあり、本能寺の変が起きた時期に、織田家の重臣に率いられた軍団は西国・四国・北陸・関東に出払っており、畿内に残っていたのは明智光秀だけだった。という事はどんな理由かは正確に分からないが、畿内にいた織田家親子を襲撃出来たのは明智光秀ただ一人という事だ。

3 経緯

天正10年5月17日、備中高松城包囲中の羽柴秀吉から応援を要請する旨の手紙が来たため、信長は自ら出陣する事を決意し、明智光秀には援軍の先陣を務めるように命じた。ただし『川角太閤記』では、単なる秀吉への援軍ではなく、光秀の出陣の目的は毛利領国である伯耆・出雲に乱入して後方を攪乱する事にあったとしている。その為光秀は坂本城に戻り、出陣の準備を始めた。26日、坂本城から丹波亀山城に移った。29日信長は安土城を出発、同日、京での定宿であった本能寺に入った。6月1日、光秀は約1万3000人の手勢を率いて丹波亀山城を出陣した。6月2日未明、桂川に到達すると、光秀は戦闘準備をするように命じた。『川角太閤記』ではこの時に信長を討つと婉曲的に兵に告げたとされる。ルイス・フロイスの『日本史』には信長の内命により、三河の君主（家康）を掩殺する為ではないかと、疑惑したと書いている。そして光秀が「敵は本能寺にあり」と宣言した事が有名だが、これは『日本外史』で桂川を渡る際に「吾敵在本能寺矣」と述べたとされる事などによるものであり、同時代史料には光秀の言葉とされるものは残っていない。2日午前4時頃、明智勢は本能寺を完全に包囲し終えた。『信長公記』によれば、最初は信長や子姓衆は、この喧噪を喧嘩だと思っていた。明智勢が四方より攻め込んで来たので、御堂に詰めていた御番衆も御殿の小姓衆と合流して戦ったが、24人が討ち死にした。信長も弓や槍を使って応戦したが、右肘に傷を受けて退いた。また、女房衆に逃げるように命じ、自分は殿中の奥深くに籠り、内側から戸を締めて切腹した。

4 逸話

因みに、本能寺の変に関係する逸話は、古典作品などに登場するが、全てにおいて

信憑性に疑問がある。その為、有名な物を取り上げる。『朝日物語』『川角太閤記』に見られる逸話で、甲州征伐を終えた後に諏訪で「我らが苦勞した甲斐があった」と述べた明智光秀に、信長の逆鱗に触れ、光秀の頭を欄干に打ち付けて侮辱した物だが、勿論信憑性は薄い。

5 要因

一番肝心な、そして「永遠のミステリー」と言われている変を起こした要因だが、はっきり言って分かっておらず、この文章でも明言する事は避けるが、個人的に興味深いと思った物と昔からある古い説を取り上げたいと思う。先ず1つ目は野望説だ。「光秀もやはり、他の大名と同じく天下を取りたかった」という感じの説だ。この説は、変が起きた直後から考えられた最も古い物の1つだ。2つ目は、怨恨説だ。これは別名、私憤説とも言い、個人的な恨みの積み重ねが、原因としている。信憑性に関しては完全に肯定も否定も出来ない。そして3つ目が朝廷黒幕説だ。これもあくまで仮説の域を出ないが、個人的に興味深いと思った。内容としては信長が朝廷と緊張状態にあり、朝廷の意志を汲んで光秀が謀反を起こしたというものだった。

6 影響

本能寺の変を起こした明智光秀は、前述の通り、羽柴秀吉との戦いに破れたが、もたらした影響は大きいと考えられる。それは、織田家で力を持つ者の交代である。変以前は、織田家の筆頭家老に位置していた柴田勝家が、考えられるが、変以後は羽柴秀吉である。しかし、これは考えてみれば、何ら不思議ではない。羽柴秀吉は、中国地方にいたにも関わらず、すぐに戻り、主君の仇討ちをした。かたや柴田勝家は、仇討ちが出来なかったのだ。(一応丹羽長秀と連携して、光秀を討とうとしていた。)そして豊臣政権の時代に移る事となった。

参考文献

「本能寺の変」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%AC%E8%83%BD%E5%AF%BA%E3%81%AE%E5%A4%89> (最終閲覧日令和3年8月22日)

「本能寺の変が与えた影響」 ヒストリーウォッチャー <https://kyo-furusato.jp/>
(最終閲覧日令和3年8月22日)

コラム 信長の世界構想

13R 福原知弥

織田信長が本能寺の変で死ななければ、おそらくではあるが日本を統一して海外に出兵したという説がある。理由としては宣教師ルイス・フロイスがポルトガルに提出した「日本史」に信長が『唐入り』という言葉が頻繁に使用したことが記されていることがあげられる。

『唐入り』しようとした理由

① 国内平定後の兵士の存在

日本を平定して「戦争は終わりだと宣言した場合」足輕は解雇され、中級武士はこれ以上の出世を望めなくなる。それで大反乱がおこる可能性があるので海外出兵という形で解雇させないようにしたという理由。

② 反乱の芽を摘む

国内を平定すると国内には多くの大名が残り、反乱を起こしやすい。しかし、中国や朝鮮に大名を追いやると日本に海を渡って来ないといけないので反乱しにくくなるという理由。

③ スペインなどの西欧諸国と対等な立場になること

アジアの中で最強の国となって、西欧諸国の植民地のようになるのではなく、対等な立場で貿易しようとしたという理由。

④ 家来に与える土地

家来に与える土地は天下統一してしまうととても少なくなる。なので、その土地を獲得しようとしたという理由。

結局、織田信長は本能寺の変で死んでしまって「唐入り」はできなかったが、信長の唐入りを家来の豊臣秀吉が聞いていた可能性があり、豊臣秀吉の朝鮮出兵は信長の考えた「唐入り」の考えを受け継いだ可能性が考えられる。

参考文献

「織田信長はポルトガルを意識していた？世界情勢に魅了された第六天魔王」はじめての三国志 www.savag.net/nobunaga-dispatched-overseashajimetesangokushi.com/2020/03/12/nobunaga-spain（最終閲覧日 2021 年 10 月 11 日）

「信長の『唐《から》入り』」菊川 齒科 www.kikukawa-dent.jp/article/15250048.html（最終閲覧日 2021 年 10 月 11 日）

第四章 織田家の政策

編集担当 松島 絆

第一章～第三章までは華々しい信長の合戦を主として見てきたが、この章では合戦と同じく戦国の風雲児・信長を理解するうえで重要な側面である信長の行った政策に着目した。ここでは、信長は天下最弱と呼ばれた尾張兵を率いて何故天下をとれたのか、信長は何故経済を重視したのか、信長は何故仏教を弾圧したのか、といった信長の行動の「なぜ」を解明していき、信長が考えた日本の未来構想に迫ろうと思う。

目次

織田家の軍事政策p40	32R	古川周平
織田家の商業政策p44	26R	紙龍輝
織田家の宗教政策p46	45R	渡辺丈
コラム ルイスニフロイスが見た信長p47	14R	菅野谷聡人



織田信長朱印『天下布武』

この朱印が押された文章は信長の意志によって作成されたことを表す。

はじめに

桶狭間の戦いでの逆転劇や長篠の戦いでの活躍など、織田信長は当時の戦国大名を圧倒する戦略、戦術を見せ激動の時代を勝ち上がった。では織田信長はいかにして戦国時代の頂点に立つことができたのか。信長の戦術や軍事政策の面から考察する。

兵農分離

当時、戦に参加していた人間の大半は駆り出された農民や百姓であった。しかし、農民を駆り出すには大きく2つの問題が存在した。

1. 彼らの本業は当然農民である。彼らを戦で戦わせすぎれば田畑の作業ができず、食料の供給が不安定になる。当時はビニールハウスも海外からの輸入もなかったため年中作物が取れるわけではない。そのため作物の収穫と重なる秋の農繁期には戦をやりづらく、また参加できる兵士の数も必然的に減ってしまうのである。
2. 彼らは農民や百姓である。戦場で農民が戦死すれば、農民や百姓の数は減少する。当時の食糧生産は農業従事者である彼らが担っていた。そのため、農民の減少は国力の減少を引き起こすのである。また、農民を駆り出して戦を行うため、当然兵士も減少する。

この問題を解決するため、信長は農業に専念させ、農民から取り立てるなどして集めた兵には楽市・楽座制度によって得た膨大な資金を用い給料を払い城下町に住ませることで軍事、農業ともに円滑に行うことができるようにした。さらに、兵には戦闘訓練を行うことで民間人を駆り出すより高レベルの戦闘専門の軍隊を作り上げた。当時の農民もかなり戦闘的ではあったが、軍隊として専門教育を受けられた集団のほうが強力であるのは確かだろう。

実力主義登用

しかし、信長がいくら優秀で即座に動ける軍隊を持ち合わせ、天才的な頭脳を持っていたとして、一人でそれを生かすのは不可能だろう。天下統一に家臣は必須である。しかし、戦国大名にとって勢力の拡大に伴って家臣が増えるのも宿命である。信長の家臣団で特筆されるのはその顔ぶれであり、まさに信長の人材登用は実力至上主義を体現したものだ。後に天下統一を成し遂げる羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)は農民の子だと言われており、明智光秀にいたっては出自すらはっきりしない。どちらも名門の家柄の出自でないのは確かだが、才覚を信長に認められ登用されたといわれている。一方信長は無能な人間や敵対する人間には厳しかった。家臣の中でも有能で信頼も厚かった佐久間信盛は、三方ヶ原の戦いなどで信長の怒りを買って、石山本願寺攻めの際4年間何の動きも見せなかったことが決定打となり、息子の信栄とともに高野山に追放されてしまった。ただし、石山本願寺は雑賀衆と呼ばれる鉄砲集団まで抱える大勢力であり攻略難易度も高かったため、単純に信長の戦力配置ミスだ、信長は厳しすぎるなど信盛を擁護する声もある。

・・・その後の佐久間氏・・・

このように信長から不遇な扱いを受けた佐久間氏だが、息子の信栄は赦免され、織田信雄に仕えた後、茶人として秀吉に仕え、秀吉の没後は家康に仕えている。信栄の弟は信栄の後を継いだ後、徳川家の旗本に召し抱えられた。不遇な目にあっていた佐久間信盛だが、息子たちはそれなりに悪くない人生を送ったようだ。

信長の戦略

織田軍が他の武将より勝っていたのは武器である。織田軍は他の武将と比べ武器が強力だった。国友や堺といった都市を直轄地にすることで鉄砲を量産したのは有名だ。また、当時使われていた2間半(約4.5m)の槍に比べ、織田軍が使っていたものは3間から3間半(約5.4~6.3m)と長く、密集陣形での突き合いで優位に立てるように工夫されていた。しかし戦の勝敗を決めるのは単純な強さだけではない。情報もまた結果を左右する要因の一つである。信長が桶狭間の戦いにおいて直前まで出撃しなかったのは今川方に「信長は清洲上に籠城するようだ」と油断させる意図があったとされる。当時の織田家はまだ小大名であり内部情勢も不安定だったため、内通者がいることを見越しての行動だったともいわれている。

織田信長が他の武将と圧倒的に違うのはやはり自身が兵を率いて戦うことであった。信長は前述の兵農分離、実力主義登用によって得た強力な軍隊の中で、特に武芸に秀でているものを集め馬廻と呼ばれる部隊を編成した。信長はこの馬廻を率い前線に出ることが多かった。桶狭間の戦いでの勝因の一つには今川軍の大半が農民だったのに対し織田軍が精鋭集団である馬廻だったことがあるともいわれている。

ここで少し、有名な長篠の戦いについて触れる。今までは馬防柵により武田騎馬隊を防ぎ、三段撃ちによって撃退したとされている。しかし、現在歴史書『信長公記』に記載がないこと、長篠の戦場に柵を置くほどにスペースがないことなどからこの説は後世の脚色だとされている。最近の研究で信長は地形を利用し馬での攻撃が難しい「城攻め」のような状況を作り出し、武田軍を包囲することで正面突破以外の道をなくし、上から鉄砲を撃つという武士道ガン無視の作戦をとることで勝利を収めたという説が浮上している。そもそも信長公記に三段撃ちの記録はなく、「さんざんに撃ちまくった」という記録があるのみである。大軍を率いた今川軍には奇襲攻撃、馬で戦闘を行う武田軍には城攻めのような状況を作り出すなど、信長は相手の弱みを突く戦法を取ることも多かった。

また、信長は敵対勢力を徹底的に叩き潰すことでも有名である。実弟を自害に追い込んだ長島一向一揆の信徒2万人を最終的に火攻めで虐殺、比叡山焼き討ち、和睦後の石山本願寺に対し大粛清を行うなど敵対勢力に対する容赦ない態度は人々に恐怖を与えた。ゲーム上で初心者相手にこういうことをやると確実に嫌われるので気を付けよう。

信長の築城術

信長が革新的だったのは戦法や政策だけではない。信長は今までとは全く違う用途の城を今までにない方法で築城していった。

1. 小牧山城(下写真)



信長が最初に築城したのは小牧山城という城だった。今までの城と小牧山城で大きく異なった点は、小牧山城で取り入れられた石垣だった。しかもこの石垣はただ単に石を積み上げたというものではなかった。石垣の表面に大きな石と石の間の隙間を埋めるための「間詰石」、裏側には崩れを防ぐための「裏込石」がしてあった。また、基盤の「根固め」や排水処理のための「石組み遺構」も発見されている。この石垣の構造に試行錯誤した形跡はなく、思いつきで行われた工事でなく明確な石の城造りという意思があったことがわかる。当時の山城は地形を利用し堀と土塁を巡らせて完成という粗末なものであったため、標高85.9mの小牧山にそびえるこの城

がいかにこだわって作られたかを推し量ることができる。こうして作られた小牧山城は当時の基準でかなり先進性は「小牧山城を見た敵陣の武将たちが次々に信長に下った」と伝えられるほどのものであった。これほどの威圧感を持つ城を美濃国境に近く、平地の中にそびえる小牧山に築城することで織田家の勢いを見せつけ、美濃攻略戦を有利に進めようという意図があったのではないかという説もある。



2. 岐阜城(左写真)

美濃を攻略したのち、信長が小牧山城から稲葉山城に居城を移した。岐阜城はその稲葉山城を大改修したものである。信長は小牧山城で取り入れた石垣にくわえ、城郭に金箔を使用し、金箔瓦を使用した。当時城が瓦葺きであること自体がかなり珍しかった。しかも、金箔瓦を用いた建物には地下通路を通った先に見える、標高 329m からの城下の景色を劇的に見せる仕掛けをもった

構造だったことがわかっている。今まで一時的な軍事拠点という扱いだっただけに公家や他の戦国大名、文化人や商人など訪れた客人をもてなすという役割もたせ、外交の拠点として使用した革命的な城である。標高がかなり高いところにあり、一見難攻不落の城のように見えるが、実は7回落城の目にあっている。高所にあつての籠城戦は、なかなか難しいものであるらしい。

3. 安土城(上 CG モデル、下写真)

信長の築いた城として最も有名な城であろう。岐阜城の時点で金箔瓦の迎賓館や川や滝を備えた豪華な日本庭園など、すでに相当豪華であった。しかし、岐阜城を訪れたポルトガルの宣教師ルイス・フロイスに対し、信長は「自分の屋敷を見せたいが、あなた方が見てきたヨーロッパやインドの建物に比べて見劣りするのではないかと思い、迷っている」と



発言した記録が残っている。このころ海外の文化を積極的に取り入れていた信長に「海外に負けなほど豪華な建物を造る」という意思があったであろうことは想像に難くない。安土城の天主閣は「天主閣」と表記され、この表記に自身を神格化しようという意思があったともいわれている。その「天主閣」の構造は外観が5層、内部は地下一階、地上6階の7階建てであり、外壁は3層目までが黒、4層目は朱、5層目は金箔で彩られ、屋根瓦も



赤、青、金箔瓦などが使われていた。また、夜には天主閣を提灯でライトアップしていたという説まで存在する。階数だけなら似ている地下2階、地上7階屋上付きの都内某男子校の校舎とはもちろん、岐阜城と比べてもかなり派手で豪華な作りである。また、諸大名から町人にまで入場料をとって見学させたという記録まで残っている。小牧山城、

岐阜城を経て築城された安土城は、まさに信長の城造りの集大成だといえよう。

ATOYAKI

ここまでお読みくださりありがとうございます。Wordの難癖付けているとしか思えない校正機能に苦しめられながら深夜に書いていることもあり相当読みづらい文章でしょうが、ここまで辛抱して読んでくれた皆様本当にありがとうございます。信長自体ものすごく濃い人物なので、いろいろな逸話が多く信頼できるソース探しは難航しましたが、それぐらい濃い人物だということを本文から感じ取っていただければ幸いです。また、文中で信長にまつわる新説を1つ2つほど紹介しましたが、この文章で紹介しているのはほんの一部です。自分でも調べていて教科書と違うなど感じることも多く、このような小さなキッカケから歴史に興味を持ってくれたら幸いです。ここまで読んでくれた皆様、本当にありがとうございました。

【参考資料リンク】

「【戦国こぼれ話】織田信長が実力主義から親族優遇策に転換したので、明智光秀は謀反を起こしたのか」 YAHOO!JAPAN ニュース 執筆者：渡邊大門 株式会社歴史と文化の研究所代表取締役 <https://news.yahoo.co.jp/byline/watanabedaimon/20210510-00237021>（最終閲覧日9月27日）

「奇跡の逆転劇から460年！織田信長はなぜ、桶狭間で今川義元を討つことができたのか」 日本文化の入り口マガジン <https://into.japanwaraku.com/culture/101738/>（最終閲覧日9月27日）

「織田信長の『日本の城』革命 信長公の夢街道」信長公居城連携協議会 <https://www.nobunagakou.jp/%E4%BF%A1%E9%95%B7%E5%85%AC%E3%81%AE%E5%9F%8E%E3%81%A5%E3%81%8F%E3%82%8A/>（最終閲覧日2021年9月27日）

「『織田徳川 vs 武田』長篠の戦い、通説の9割は嘘」 東洋経済新聞 <https://toyokeizai.net/articles/-/197322>（最終閲覧日2021年9月27日）

「佐久間信盛（織田家の重臣）はなぜ信長に追放された？退き佐久間その最期」 日本初の歴史戦国ポータルサイト BUSHOO!JAPAN（武将ジャパン） <https://bushoojapan.com/bushoo/oda/2021/02/01/92067>（最終閲覧日2021年9月27日）

【画像出典】

小牧山城写真：小牧山城（1） 砦合戦の巻（歴史）- めぐるさかずき - Yahoo!ブログ
※Yahoo ブログは現在サービスを終了しています。でも画像はネットに残っています。
ネットって怖いね。

岐阜城写真： 「岐阜城」 ニッポン旅マガジンプレスマンユニオン <https://tabi-mag.jp/gi0032/>（最終閲覧日10月12日）

安土城画像

1枚目(大手道視点)： 「VR安土城について」 近江八幡市 <https://www.city.omihachiman.lg.jp/kanko/rekishi/vrazuchijyo/16282.html>

2枚目(天主閣アップ)：

「安土城外観の見学を実施中」 ともいきの国 伊勢忍者キングダム <https://www.isejokamachi.jp/%E5%B9%B4%E6%9C%AB%E5%B9%B4%E5%A7%8B%E3%81%AB%E5%AE%89%E5%9C%9F%E5%9F%8E%E5%A4%96%E8%A6%B3%E3%81%AE%E8%A6%8B%E5%AD%A6%E3%82%92%E5%86%8D%E9%96%8B/>

※現在安土城は焼失しており、豪華絢爛な天主閣はすでに見ることができなくなっています。滋賀まで行ったのに画像の場所が無い等のクレームはお控えください。

はじめに

この論文を作成するにおいて語彙表現がおかしいところもあるかもしれないが甘い目で見れば嬉しく思う。ちなみに、織田家には戦いを勝ち抜いてなりあがったのだが、ただ戦いに勝って天下統一したわけではなく様々な商業の政策を織田家では立てていたことにより知能を使って天下統一したのである。

この論文では織田家とは織田信長(天文3年5月12日～天正10年6月2日)を中心としたものとする。これより織田家の商業政策において章ごとに制作していく。

1 織田家を支えた尾張の商業都市

“はじめに”でも述べた通り織田家は他の武将のように武力のみで成り上がっていくスタンスと違い多くの商業に関する政策を立てて天下統一への道へと進んでいったのである。(明智光秀に謀反を起こされたため正確には天下統一はしていない。)

織田家の商業政策の柱として織田家を支えた都市がある。それが、尾張の諸都市(今の愛知県西部、稲沢市周辺)である。その尾張諸都市の中でも織田信長の祖父、信定が尾張国にある津島湊(今の愛知県津島市)という経済の一大都市を1521年から1528年にかけて勢力を拡大し占領したことで織田家は尾張に商業の拠点置くようになった。津島湊を占領した後に信定と親しい連歌師である宗長が津島湊を見て「はしのもとより。舟十余艘かさりて。若衆法師誘引。此河つらの里々数をしらす。」と著わしており、これを現代語訳すると津島湊が繁栄していることを表していることがわかる。このことからわかるように信定は津島湊を防衛すべきだと考えており、津島に勝幡城を築き防衛の拠点とした。

その後信長の父、信秀が受け継ぎ、信秀は信定が築城した勝幡城を本拠点とした。信長はこの勝幡城で生誕したといわれている(諸説あり)。信秀は1539年には古渡城を築城し、そこを拠点として熱田(今の愛知県熱田市)を占領し尾張国を一流経済都市へとさせた。また尾張国は米の生産量(石高)が57万石と日本有数の穀倉地帯でもあったため、食と金に困ることはなく織田家をささえていた。

2 堺

堺という場所は現在の大阪府堺市という大阪市よりも少し南に位置している。尾張は愛知にあるのに堺は大阪にあるのだ。距離は近いとは言えないが堺が織田家にとって重要な商業都市となっていたのだ。だが、もっと近くにも商業を行うことができる都市は多くあったはずだったのにも関わらず堺を選んだのはなぜだろうか。

その理由は、1559年(永禄二年)、上洛の帰りに堺の街により人、物と金で栄えている堺を見て貿易の重要さを知ったから

である。その後、信長は本願寺に5000貫、法隆寺に1000貫、堺に20000貫の軍資金を要求した。ちなみに1貫現在の10万円から15万円程度なので、信長は堺に約20億円から30億円もの軍資金を要求していたのである。前述したように信長はかなりの軍資金を要求したため、堺では多くの商人が反対したが豪商であり、茶人でもある今井宗久や同じく商人で茶人である、津田宗及な

資料・栄える堺の街↓



どにより堺の商人を説得し堺を信長の支配下とした。その後信長は堺で盛んに生産されていた鉄砲、火薬、そして膨大な財産を要求した。こうして、堺は信長にとって重要な都市だったのである。

3 楽市楽座・関所の撤廃

織田信長は1577年(天正5年)に知っている方も多であろう楽市・楽座令を織田家の城である安土城下に発布した。

では、楽市・楽座とはどのようなものなのだろうか。簡単に説明すると楽市・楽座というものは一部の特権を持った商人が独占して物品を販売することで、経済が滞ることや、格差を生まないようにするためだ。

では、楽市・楽座令とはどのようなものか詳しく説明していく。楽市・楽座令とは楽市令と楽座令の二つに分かれており、楽座令が発布されると自動的に楽市令も発布されている状態となるため楽市・楽座令と呼ばれている。

まず、楽市令とは何か説明する。楽市令とは多くの庶民や商人が集まり売り買いをする、「市」という所に対して発布したものであり、そんな「市」を取り締まっていたのが「座」という同業者の団体だった。「座」というのは貴族や寺に金を納める代わりに取り扱う商品を独占するといった業者だ。そこで、信長はこの忌まわしい風習をなくすために楽市令を発布した。これによって、「市」が取り扱う物を増やし、お金や人の流れが活発になると信長は考えた。また、楽座令も同様に「座」による独占をなくし、前述のように、物流や人、お金の流れを活発にするためだった。

しかし、楽市・楽座令を発布するだけだと遠方からの物品は一定区間に設けられた関所というものによって、多額の通行料がかかるのだ。そんなこともあって、関所が設置されていると、物流や人、お金が滞ってしまうのである。これでは楽市・楽座令を発布した意味がなくなってしまうのだ。そこで、信長は通行料をとる関所を1568年(永禄11年)に分国内で廃止して、通行しやすくなっただけでなく、物資の運搬もしやすくなったのである。

おわりに

織田家では他の武将と異なり、武力のみで天下を取った者ではなく、頭脳を使い、商業に関する政策を打ち出していた。

また、その多くは経済を活性化させ、かなり有能な武将であったことがわかる。ぜひ、この混迷を極める現代社会にも信長のような政治(暴力的な面を除き)をする政治家が出てくるべきだと私は思う。

参考文献

「【織田信長】楽市令とは？」わか歴！ <https://wakareki.com/?p=134> (最終閲覧日 2021年9月30日)

「織田家の財源を支えた愛知県津島市にあった商業都市『津島湊』とは？」日本のお城、御城印と、お寺、神社の歴史ガイド <https://japan-castle-guide.com/column-97/> (最終閲覧日 2021年8月30日)

「【戦国こぼれ話】織田信長が天下人になった秘密は、堺の商人・今井宗久を配下に収めたことにあった」YAHOO! JAPAN ニュース <https://news.yahoo.co.jp/byline/watanabedaimon/20210613-00242638> (最終閲覧日 2020年9月8日)

参考資料

資料 「中世の自治都市『堺』の商人、鉄砲と茶の湯と南蛮人のお話」旅スペイン.コム

信長の宗教政策

45R 渡部 丈

1 信長とキリスト教

信長がキリスト教を保護したことはとても有名だが、それは当時、珍しいものだった。それは戦国末期の大名たちはキリスト教を禁教とし、宣教師を追放し、信者を弾圧していったからである。なぜ信長はキリスト教を保護したのか、これにはいくつもの理由が考えられている。ここでは2つほど紹介させてもらう。

一つ目は、信長は宗教に対して公平に対応していたという説である。いかなる宗教に対しても敵対してこない限り弾圧せずに保護政策をとっていたため、キリスト教も保護されていたというわけだ。二つ目は、キリスト教を保護することでヨーロッパの武器や情報を手に入れようともくろんでいた説だ。信長は宣教師のルイス・フロイトに会ってからはほかの宣教師も含めると40回以上会っていたことが明らかになっている。実はイエズス会の宣教師は軍人関係者が多くいたのである。信長はそれらの人物から情報を得ようとしたのである。これらはあくまで「説」であるがこれらのことが、信長がキリスト教を保護した要因だと有力視されている。

2 信長と仏教

信長は仏教を弾圧したことで有名である。一向一揆を倒したり、延暦寺を焼き討ちしたりしたのが代表例である。信長が京都に入ると同時に足利、浅井、三好、武田、松永、伊勢長島一向宗による一向一揆などに3回に渡る信長包囲網を敷かれたのだが、信長はこれを各個撃破していった。しかし一向一揆には信長も長い間頭を悩ませることになる。一向宗とは浄土真宗のことである。浄土真宗は「南無阿弥陀仏」を唱えるだけで救われるという簡単な教えであることから農民を中心に広まった。ちなみに浄土真宗の信者のことを門徒という。一向一揆は15世紀末～16世紀末にわたって戦国大名を苦しめてきた。信長も例外ではなく、一向宗の門徒と3度に渡る戦いを重ね、最終的には信長が勝利することができたが、何人もの家来を討ち殺して自分の弟さえもなくしている。そのため信長は仏教徒を憎むようになった。自らの政策を邪魔する仏教への対抗馬としてキリスト教を保護したのではないかともいわれている。

また延暦寺を焼き討ちしたことも有名なので触れておく。信長は浅井・朝倉連合軍に裏切られた後、長い敵対関係にあった。1571年信長は浅井長政の居城である小谷城を攻めた。そしてその戦が終わって翌日、いきなり延暦寺に向かったのである。延暦寺では以前から朝倉・浅井の兵をかくまうなど信長の神経を逆なでしてきていた。しかも京都の北の山に戦国大名に匹敵するほどの一大軍事力をもった勢力があるのは信長にとって大変目障りだったのである。そして結局延暦寺は焼き討ちされたが実は信長は焼き討ちする前に延暦寺に「信長の味方になれば許す」といった旨の伝聞を渡していたのである。信長は敵対すればとことん叩きのめすが、味方すれば許すといった場合分けができているところも信長が天下を取る一歩手前までいった要因の1つではないだろうか。

3 信長が保護した仏教勢力

仏教徒を弾圧したイメージの強い信長だが、実は保護した仏教勢力もあったことはご存じだろうか。有名どころでは本能寺があげられる。そう、みなさんご存じ信長が最後にいた場所である。本能寺は日蓮宗の寺院であり、高い堀や深い堀で囲まれていた。信長は京で宿泊する際、安全な作りになっていたことから本能寺を利用していたと考えら

れている。他に保護した仏教勢力として、大徳寺が挙げられる。大徳寺は臨済宗の寺院である。本能寺の変の後、豊臣秀吉が信長の葬式を行ったことで有名だ。

終わりに

信長はキリスト教を手厚く保護し、仏教を弾圧したが、一部味方する仏教は保護した。私は信長という人物は仏教を嫌い、全て弾圧するイメージだったので、味方になる仏教勢力は保護していたことに驚いた。

参考文献

「信長包囲網」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BF%A1%E9%95%B7%E5%8C%85%E5%9B%B2%E7%B6%B2>

(最終閲覧日 10月27日)

「比叡山延暦寺はなぜ焼き討ちされたのか」 PHP オンライン衆知

<https://shuchi.php.co.jp/article/3601>

(最終閲覧日 10月27日)

「織田信長はなぜキリスト教を保護したのか」 歴史年代ゴロ合わせ暗記

<https://rekisi.info/nobunagakirisuto.html>

(最終閲覧日 10月27日)

「これで決まり！織田信長がキリスト教を保護した理由！」 歴史好きのつぶやき

<https://rekishizuki.com/archives/1389>

(最終閲覧日 10月27日)

「織田信長は仏教を保護していた？宗教に対して寛容だった織田信長」はじめての三国志

[https://hajimete-](https://hajimete-sangokushi.com/2019/03/30/%E7%B9%94%E7%94%B0%E4%BF%A1%E9%95%B7%E3%81%AF%E4%BB%8F%E6%95%99/)

[sangokushi.com/2019/03/30/%E7%B9%94%E7%94%B0%E4%BF%A1%E9%95%B7%E3%81%AF%E4%BB%8F%E6%95%99/](https://hajimete-sangokushi.com/2019/03/30/%E7%B9%94%E7%94%B0%E4%BF%A1%E9%95%B7%E3%81%AF%E4%BB%8F%E6%95%99/)

(最終閲覧日 10月27日)

宣教師ルイス・フロイスが見た信長

14R 菅野谷聡人

1532年 ルイス・フロイスは、ポルトガルのリスボンで生まれた。1548年、16歳でイエズス会に入会し、1563年〔永禄3年〕に大村純忠が支配する横瀬浦(現・長崎県西海市北部)に上陸、日本での布教活動を開始する。以上が日本に来るまでのことである。

実は、織田信長について書かれた信頼性の高い史料は二つほどしかない。その中でも、もっとも有名な史料の一つが、信長に仕えていた太田牛一と言われる人が書いた『信長公記』だ。ほかには本人が書いた手紙も残されている。そしてもう一つ資料が残っている。

それが、ポルトガル人宣教師のルイス・フロイスが書いた『日本史』である。フロイスが『日本史』を書き始めたのは天正11年(1583年)のことである。日本におけるキリスト教の布教史を書かせるよう、ポルトガル国王の命令を受けたイエズス会が依頼してきたのだ。そのベースになっているのは、フロイスが母国や友達に送っていた手紙や報告書であるからして、『日本史』はキリスト教布教のための報告をまとめたものと言える。

フロイスによると信長は背丈が中ぐらいで髪は少なく、声は高く健康志向の暮らしをしていたらしい。また好戦的で正義感が強かった。家臣に対してはあまり意見を聞か

いパワハラ上司だと思われているが、実際には意見を聞かなかったものの畏敬の念を抱かれていたともいう。しかしながらフロイスの記した日本史には必ずしも信長を好印象では書いていないそれは信長がキリスト教には貿易目的でしか興味がなくそれに対してフロイスは怒り悪く書いたと考えられる。また明智光秀は、まるで悪魔と友達だと評されている。それは光秀が熱心な仏教徒でキリスト教徒の敵であったからだ。しかし、それにしても偏見があることはたしかなことである。

フロイスはキリスト教に好意的な人物は高く評価し、その逆に低く評価するという癖があることがわかった。また、信長は天下統一の野心があったことは『日本史』を読み進めていくごとにわかった。

参考文献

松田毅一「回想の織田信長 フロイス日本史」 (1973年/中央公論社)

「織田信長」 ゆるりと楽しく戦国時代！ <https://yururito-sengoku.com/> (最終閲覧日 2021年9月29日)



第五章 織田家臣団

編集担当 原田結心

第一章から第三章にかけては、織田信長が登場する戦いや、彼の生涯を、第四章では彼が行った政策について扱ってきた。この章では、織田信長に関係して来る数々の人物について説明していきたいと思う。

目次

織田一門衆p50	54R	西澤寛和
柴田勝家p52	53R	澤西春樹
羽柴秀吉p56	32R	原田結心
明智光秀p59	33R	坪田和正
滝川一益p61	54R	沼田知大
丹羽長秀p63	58R	松田和敏
コラム 信長を裏切った武将p66	12R	山岸幸平



東京大学史料編纂所蔵『伝 明智光秀画像 妙心蘭秀賛』
明智光秀の肖像画。当時信長は光秀を非常に気に入っていたという。

1. 織田一門衆とは???

織田一門衆とは、織田氏一門、つまり信長の弟や息子たちのこと。偉大すぎる信長に隠れてしまう存在だけど、実はめっちゃめっちゃ仕事をしている。晩年の信長の功績のほとんどは、実際に指揮したのは彼らなのだ。それでは、早速彼らの活躍を見ていこう…とりたいところなのだが!!!なんと、初期の織田一門衆はマイナーすぎてほとんど資料がない!特に、歴研御用達のウィ〇ペディアがない!しかも、信〇が多すぎて誰が誰だか分らん!

2. 信長の上洛と息子たちの成長

信長には兄弟が11人いたそうだが、信行(信勝とも呼ばれる)や守山城主の信時、信長の後ろ盾だった叔父の信光は、桶狭間の前に亡くなっている(信行は信長が殺したわけだが)。のちには、1574年の長島一向一揆の制圧で、有力な一門衆だった叔父の信次、庶兄の信広らも討ち死にしている。一方、このころから信長の息子たちが成長し、一門衆の中核を担うようになった。というわけで、京都御馬揃え(信長が1581年に行った軍事パレード)の際の一門衆のメンバーは織田信忠(信長嫡男)、信雄(信長二男)、信包(のぶかね・信長弟)、信孝(信長三男)、信澄(信長甥、信行の子)、長益(信長弟)、長利(別名:有楽斎、有楽町の名前の由来、信長弟)などが『信長公記』に記されている。上にあげた順番は御馬揃えの際に率いた騎数や『信長公記』に記されている順番であり、一門衆の中の地位が推測できる。特に、信忠、信雄、信包、信孝、信澄の5人は特別の地位を認められており、郡単位の一職支配権を持ち、一軍団の統率権をゆだねられていた。今日はその中でも、信忠、信雄、信孝の3人の息子たちについてみていこう。決して資料が見つかりやすいからじゃないよ。

3. 優秀な嫡男・信忠

信長の陰に隠れがちな信忠だが、圧倒的な活躍を見せている。元服の時期は諸説あるが、1574年から信長に従って石山合戦、長島討伐などに参加。武田の押さえとしての役割を担い、1575年の岩村城の戦いで総大将として岩村城を開城させると、翌年には信長から織田家の家督を譲り受けて岐阜城主となっている。その後も松永久秀討伐や播磨救援の総大将を務め、信長の代理・後継ぎとしての立場を確立していく。最後の戦いとなった甲州武田征伐では、なんと信長の本隊が到着する前に武田家を滅ぼしている。信長にも認められていたようで、「天下の儀も御与奪」つまり「政権担当者すなわち天下人の地位も信忠に譲る」と意思を表明している。信憑性は低いが『三河物語』によると、本能寺で異変に気付いた信長の最初の言葉は「城介が別心か(=信忠の謀反か)」であったという。それだけの人物だったということだろう。

そんな信忠だが、残念ながら本能寺の変で討たれてしまう。信忠は京都の妙覚寺に滞在しており、本能寺へ救援に向かう途中に明智軍と遭遇。奮闘するも二条御所にて自刃した。本能寺の変発生時、信長には脱出できる可能性は皆無だったが、信忠は京都から脱出できる可能性もあり、安土に逃げて再起を図るように諫言する者もいた。ただし、光秀が洛中の出入り口に手を回していることも考えられたため、信忠は無様な死を避ける選択をしたという。彼が生きていれば、歴史はかなり変わっていたかもしれない。

4. 無能だけど実はすごい???.信雄

後世の評価では「愚将」として知られる信長の二男、信雄。確かに信長時代の信雄は、ほとんど活躍がない。信雄の“バカ殿伝説”が始まってしまうのは、1579年。毛利氏攻

略の途中で別所長治や荒木村重が謀反を起こし、さらに松平信康の自刃事件などもあり、信長がかなりピリついていた時期だ。そんななか、信雄は「信長に無断」で伊賀に攻め入り、見事返り討ちに遭い、おまけに信長につけてもらった柘植保重(つげ・やすしげ)という重臣を戦死させてしまう。大事なタイミングで必要性の薄い戦を勝手にはじめ、大事な家臣まで失った信雄に、信長は大激怒。「何やってんだ大馬鹿ものおおお！親子の縁切るぞゴルァァァ！！！」(※実話)と書状でしっかり怒られている。

その後も目立った活躍はほとんどなく、本能寺の変の際も、明智光秀を討つために本拠地の伊勢から軍を率いてわざわざやってきたのに、京都を目前にしてなぜか引き返している。光秀と戦っていれば、秀吉の台頭を少しは防げたかもしれないのに。これには光秀も「???」。清須会議では織田家の後継ぎになろうとするものの、結局織田家当主は三法師、信雄は後見役となる。翌年、秀吉に擁立された信雄は賤ヶ岳の戦いで信孝・柴田勝家らを破るが、その後秀吉とも関係悪化。家康や四国の長曾我部元親と結んで秀吉と戦うが(小牧・長久手の戦い)、自分だけ勝手に和睦。これにより秀吉は完全に天下人としての地位を確立するから、信雄はなかなかの無能っぷりである。その後も改易と大名復帰とを繰り返し、ゆらゆら豊臣についたり徳川についたり、、(以下省略)。

しかし！そんな信雄にも、実はすごい一面が！信雄は生前にしっかりと財産分与を行ったうえで亡くなっており、結果的に彼の子孫は明治まで存続している。信長の数多い息子たちのうち、江戸時代に大名として存続したのは信雄の系統だけなのだ！しかもなんと、彼の系統は現代の皇室にまでつながっている！(信雄は今上天皇の曾×12祖父)子孫をしっかりと残した信雄は、実は「勝ち組」なのかもしれない。

5. パツとしない男・信孝

信長の三男・信孝は実は二男の信雄よりも20日先に生まれているが、母の身分が低かったために報告が遅れて三男となっただけ。だから、信孝は信雄にずっと不満を持っていたとか。信孝は1574年に長島一向一揆攻めで初陣。その後は信忠らとともに越前一向一揆の平定や雑賀攻め、荒木村重攻めなどに参加する。1581年に高野山を攻めた際には、信孝は総大将を務めたようだ(定かではないが)。すると翌年、信孝は四国攻めの総司令官に大抜擢される。このとき信長は、「征服後は讃岐一国を信孝にあげる」と約束している。四国攻めを任された信孝は、意気揚々と準備を始める。伊勢や伊賀・甲賀、丹波や丹後などあちこちから兵をかき集め、安土の信長に挨拶。信長は織田氏の宿老・丹羽長秀をつけ、「一夜に大名にお成り候」といわれるほどの馬・兵糧・黄金などを送ったという。しかし、淡路への渡海の決行予定日であった6月2日、本能寺の変が勃発する。

信孝が四国攻略総司令官に任せられるまで、四国方面の窓口を担当していたのは、明智光秀だったため、四国政策の転換は光秀の立場を危うくするものであった。これが本能寺の変の原因では？という説もある。

京都での異変の知らせが届くと、信孝の寄せ集めの軍隊からは兵の逃亡が相次ぐが、秀吉と合流して山崎の戦いで父の仇を討つ。しかしその後、信雄と家督を争ってみすみす秀吉の台頭を許す。結局賤ヶ岳の戦いで秀吉・信雄連合軍に敗れたのちに死に追い込まれた。辞世の句を要約すると、「おい秀吉、ぜってえ許さねえかなあぁぁ！！」であり、切腹の際は自分の腸をつかみ出し、壁に投げつけたそうな。お～～怖っっっっっ。

参考文献

「織田信長」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B9%94%E7%94%B0%E4%BF%A1%E9%95%B7>(最終閲覧日 10月29日)

「織田信忠」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B9%94%E7%94%B0%E4%BF%A1%E5%BF%A0>

(最終閲覧日 10月29日)

「織田信雄」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B9%94%E7%94%B0%E4%BF%A1%E9%9B%84>

(最終閲覧日 10月29日)

「織田信孝」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B9%94%E7%94%B0%E4%BF%A1%E5%AD%9D>(最終閲覧日 10月29日)

「長島一向一揆」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%95%B7%E5%B3%B6%E4%B8%80%E5%90%91%E4%B8%80%E6%8F%86> (最終閲覧日 10月29日)

柴田勝家

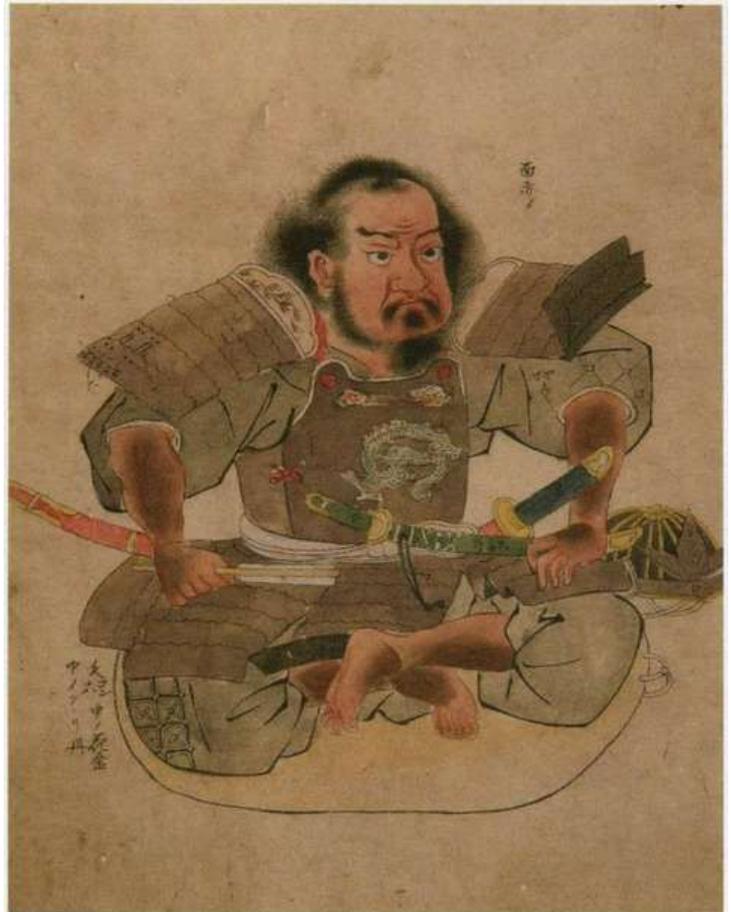
53R 澤西春樹

はじめに

柴田勝家は、一言でいうと「秀吉になれなかった男」である。

幼い頃から織田家に仕え、特に信長の時代に武勲を上げて信頼を勝ち取ったが、信長の死後の後継者争いに敗れ、天下を秀吉に譲ることになった。このような彼の波乱万丈な人生について、紹介したいと思う。

(注：文中で用いられている月日はすべて旧暦である)



1 誕生～織田信秀時代

彼は1522年、尾張国愛知郡上社村(現在の愛知県名古屋市名東区)にて生まれた。彼が生まれたとされる下社城址(現在は明德寺という寺になっている)には碑が設置されている。(これは「張州府誌」の記載によるもので、出生年は1526・1527・1530など諸説あり)一説には清和源氏の流れをくむ柴田勝義という人物の子とされるが、明確な資料がなく出自は不明である。幼い頃より織田信秀(信長、信行らの父)に仕え、尾張国愛知郡下社村を治めるなど、ある程度の地位にいたと考えられている。

2 織田信行時代

信秀に仕えた後は織田家三男の信行(信長の弟、別名織田信勝)に仕え、1551年に信秀が死去すると彼の家臣となった。信秀の葬儀の際に、信行随行の家臣の筆頭としてその名が記されている。

1552年の萱津の戦い(信秀の死後、家督を継いだ信長に反対した織田信友が起こした戦い)では信行側も信長に協力し、勝家が信友の家臣の坂井甚介を討ち取り、活躍する様子が「信長公記」に書かれている。

・稲生の戦いと勝家の裏切り

勝家が仕えた信行だが、彼は織田家の家督を継がず、兄の信長が家督を継いだ。しかし、信長は「うつけ者」と呼ばれるほど素行が悪く、また、先述の萱津の戦いや、三河との国境の要所である鳴海城を信秀の時代から守っていた山口教継の謀反、織田家と友好関係にあった斎藤道三の嫡男義龍との戦いによる戦死など、周囲の情勢も安定しなかった。

「信長では織田家をまとめられないだろう。」と考える家臣も少なくなかった。反対に信行は家臣の間の評判は良く、信秀死後に織田家の本城ともいえる末森城を継承していたため、家督を信行に継がせるべきと考える派閥ができていた。

そんな中で、織田家宿老の林秀貞とその弟の林美作守、勝家らが結託して、信長を排除して信行に家督を継がせようと策略を巡らせた。信行自身も信長に不満を持っており、信長の直轄地を横領し砦を構えて、信長に反抗の意思を示した。この動きを信長が察し、稲生原で両者が戦うことになる。ここで勝家は約 1000 人の軍勢を率いて戦ったが、信長軍との戦闘で傷を負い撤退を余儀なくされた。勝家が退いたことで信行側は総崩れとなり、降伏した。その後信行は信長・信行の生母である土田御前が詫びを入れたため赦免され、彼のもとで戦った秀貞、勝家らも許された。ここで勝家は信長の力を認め、戦いの後自身を冷遇し始めた信行を見限って、信長に協力した。

1557 年に信行が再び信長の排除を試みようとして計画した際には信長にこのことを密告し、信長は仮病を装い、見舞いに来た信行を拠点としていた清州城で家臣の河尻秀隆に殺害させた。

3 織田信長時代

稲生の戦いの後、信長に罪を許されて彼の家臣となった勝家だが、一度彼に逆らったこともあってか、その後の桶狭間の戦いや尾張統一戦、美濃攻略戦では登用されなかった。しかし、勝家は当時の所領安堵の文書に丹羽長秀・佐々氏らとともに署名しており、このころは信長の奉行の一人となっていた。

・勝家の活躍と越前統治

1568 年の上洛戦では勝家は先鋒として登用されるようになり、京都に向かう中で起こった観音寺城の戦いでは周辺地域を鎮静化し、勝龍寺城の戦いでは武勲をあげた。その後は武勲を買われて姉川の戦いや長島一向一揆の討伐、足利義昭への攻撃、一乗谷城・小谷城の戦い、長篠の戦いなどの名立たる戦いで活躍し、信長の信用を得ることになった。(小谷城の戦いでは、羽柴秀吉が先鋒として参戦している。)

朝倉氏滅亡後、勝家は信長から越前国の八郡 49 万石を与えられ、越前平定と一向一揆の再発防止を任された。彼は統治の拠点として北ノ庄城を築城し、秀吉に先駆けた越前国内での刀狩や城下町の建設、北陸街道の拡幅、寺社・農民・商人らへの還住(元の住まいに戻る事)の厳命、検地などに着手して領国運営に力を注いでいった。

・対上杉軍、加賀一向一揆

1577 年には越中侵攻を仕掛けた上杉謙信に対処することになるが、その際の軍議にて秀吉と衝突を起こし、信長に無断で秀吉が戦線離脱したことで信長軍の足並みが乱れた。これにより謙信軍から攻撃を受けていた七尾城が陥落した。その後手取川の戦いに敗れた信長軍は大聖寺に防衛拠点を設置し、撤退することになる。しばらくして 1578 年に謙信が死去すると、織田信忠(信長の長男)軍によって越中の上杉軍は退けられた。

その後、勝家は加賀侵攻を任されたが、またも苦戦を強いられる。一向一揆の勢力が根強く、進展がなかった。そんな中信長が本願寺と講和を結んだことが勝家軍に追い風を吹かせることになった。勝家軍は猛進撃を仕掛け、一向一揆の本拠地であった金沢御堂を落として加賀を平定しただけでなく、能登・越中にまで軍を進め、謙信死後の上杉軍を圧倒した。

4 信長の死と秀吉の台頭

勝家はそのまま進軍を続け、1582年6月3日には上杉側の重要拠点であった魚津城を陥落させ、さらに越後へと兵を進めていた。しかし、魚津城攻略の前日には主君信長が本能寺の変で自害していた。この知らせを6月6日の夜に聞いた勝家はすぐさま北ノ庄城に帰還し、近江にいると思われる明智光秀を、大坂にいた丹羽長秀とともに討つ計画を長秀に伝えた。(実際はすでに近江を離れ、山城にいた)しかし、同じく信長死去の知らせを聞いた上杉軍による攻勢と、一揆軍の再蜂起のため、加賀方面でともに戦っていた前田利家と佐々成政らと連携して対応に追われることとなった。その間に、中国地方で毛利氏と戦っていた羽柴秀吉がすぐさま毛利氏との講和を取りまとめ、踵を返して光秀を山崎にて討ち取った。

・清須会議

山崎の戦い後、織田家の後継者を定めるために織田家家臣の勝家・秀吉・長秀・池田恒興の四人が尾張国清洲城に集まり、清須会議が開かれた。後継者の候補とされたのが、信長の次男の信雄・三男の信孝・本能寺の変で自害した嫡男信忠の長男秀信(幼名三法師)の三人である。勝家は山崎の戦いでも活躍した功績のある信孝を推したが、光秀討伐の功績のある秀吉が会議の主導権を握っており、秀吉が推した秀信が後継者として決定された。また、この会議では信長の遺した領地の配分も決定され、勝家には北近江の三郡と長浜城(元々は秀吉所有の城、後に勝家が甥である勝豊に与えた)を受け取った。そして、ここで勝家は信長の妹で、浅井長政の妻であったお市の方を嫁に貰った。これは、勝家の会議内容に対する不満を抑えるために秀吉が動いたとされている。

・秀吉への反抗

清須会議後、勢力を増した秀吉に対する不満がほかの家臣達の間にも広まった。勝家は同じく不満を持っている信孝や滝川一益、長宗我部元親、佐々成政らと協力して秀吉に対抗しようとする姿勢を示すようになる。また、清須会議にて安土城に移すことになっていた秀信を信孝が岐阜城に留めようとしたことを口実に、秀吉と信雄が挙兵した。まず秀吉は勝豊のいる近江国長浜城に兵を送り圧力をかけ、元から勝家との関係があまりよくなかった勝豊はすぐに人質を出して秀吉側についた。次に秀吉は信孝のいる岐阜城に兵を進めた。秀吉軍の圧倒的な兵力に加えて、信孝の領国である美濃の国侍らの協力が得られず、信孝もあっさりと降伏した。1583年1月からは伊勢の一益を攻めるために七万の大軍を送り、3月まで対峙していた。

5 賤ヶ岳の戦い

この伊勢での動きを聞いた勝家は近江に出陣し、毛利氏に書状を送り、毛利氏が匿っていた足利義昭を擁して上洛するよう要請した。(毛利氏は両軍の強弱がわからず傍観に徹したため、この働きかけはうまくいかなかった)勝家の出陣を聞いた秀吉は、伊勢の一益を信雄に任せ一度長浜に戻った後賤ヶ岳に陣を敷き、柳瀬に陣を敷いた勝家軍と対峙した。秀吉軍と勝家軍が北近江で膠着している間、一益と勝家の動きを聞いた信孝が再び秀吉に反旗を翻すがまたもや美濃の国侍の協力が得られなかった。この動きを聞いた秀吉は、4月16日に信孝を攻めるために美濃へと出陣したが、大雨により大垣城にて足止めを食らうことになった。

4月20日、秀吉不在のうちに戦局を有利にしようとする勝家側の佐久間盛政が勝家に攻撃を進言し、賤ヶ岳前方の大岩山に陣を構えていた中川清秀を攻めたことで戦いの火蓋が切られた。この戦いの末に清秀は討ち死にし、この知らせを聞いた秀吉はわずか5時間で北近江の本陣へと戻り、賤ヶ岳にて盛政軍と激戦を繰り広げた。ここで秀吉は、盛政軍を破るために、後世にて「賤ヶ岳の七本槍」と呼ばれる武将たちを投入した。その後、盛政軍を破った秀吉軍が勝家の本陣へと進軍して直接対決になるかと思われたが、勝家側の前田利家が突如戦線を離脱して越前国府中城に籠り、不破勝光・金森長近の軍

勢も退却したことで勝家軍が総崩れとなった。これを受けて勝家は北ノ庄城へと退却を余儀なくされる。逃れる最中に勝家は利家のいた府中城を訪ね、これまでの苦労を労い、秀吉に降伏するよう話したという逸話が残されている。（「賤ヶ岳合戦記」）

6 最期

4月23日、勝家は北ノ庄城に逃れるも、秀吉軍に包囲されたことで死を悟り、城内にて妻のお市の方や家臣らとともに決別の宴を催した。この時勝家はお市の方に城を出るよう勧めたが、お市の方はこれを拒んで勝家とともに死ぬことを選んだ。そして彼女は秀吉に対し自分の三人の娘（浅井三姉妹）の庇護を求める直筆の書状を送って一族と家臣とともに勝家に殉じ、勝家も後を追って自害した。その後、側近の中村宗教が死後の辱めかねてより用意していた火薬を使って北ノ庄城天守とともに吹き飛ばした。享年62歳。

辞世の句

「夏の夜の 夢路はかなき あとの名を 雲井にあげよ 山ほととぎす」

おわりに

秀吉はその後も勢力拡大を続け、遂に天下統一を成し遂げて戦国時代の終りを告げた。そんな秀吉が勝家の最期について、「百戦錬磨の武将であり、七度まで切って出て奮戦した。」と全国の大名に喧伝したといわれている。彼は秀吉のように天下統一を成し遂げることができなかったが、戦国の時代に多大な影響力をもっていたことを伺わせる。

参考文献

谷口克広『明智光秀軍の司令官 部将たちの出世競争』（2005年/中央公論新社）

和田裕弘『織田信長の家臣団—派閥と人間関係』（2017年/中央公論新社）

山本博文『信長の血統』（2021年/文藝春秋）

渡邊大門『清須会議 秀吉天下取りのスイッチはいつ入ったのか?』

（2020年/朝日新聞出版）

『歴史群像シリーズ⑩ 賤ヶ岳の戦い【秀吉 VS 勝家】 覇権獲得への死闘』

（1989年/学習研究社）

『柴田勝家』 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9F%B4%E7%94%B0%E5%8B%9D%E5%AE%B6>

（最終閲覧日2021年7月24日）

『お市の方』 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%8A%E5%B8%82%E3%81%AE%E6%96%B9>

（最終閲覧日2021年7月24日）

『稻生の戦い』 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A8%B2%E7%94%9F%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84>

（最終閲覧日2021年7月22日）

『織田信孝』 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B9%94%E7%94%B0%E4%BF%A1%E5%AD%9D>

（最終閲覧日2021年7月24日）

『前田利家』 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%89%8D%E7%94%B0%E5%88%A9%E5%AE%B6>

（最終閲覧日2021年7月24日）

『賤ヶ岳の戦い』 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B3%A4%E3%83%B6%E5%B2%B3%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84>

（最終閲覧日2021年7月24日）

『福井城』 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A6%8F%E4%BA%95%E5%9F%8E>

（最終閲覧日2021年7月24日）

『戦国武将 「肖像 家紋」大辞典』 livedoorBlog

<http://blog.livedoor.jp/jidai2005/archives/24032233.html> (最終閲覧日2021年7月24日)
『「福井県史」通史編3 近世一 第一章第二節一 柴田勝家の越前統治 越前の国割』
<https://www.library-archives.pref.fukui.lg.jp/fukui/07/kenshi/T3/T3-00.htm> (最終閲覧日2021年7月24日)

『柴田勝家—北庄に掛けた夢とプライド』福井市立郷土歴史博物館
<http://www.history.museum.city.fukui.fukui.jp/tenji/tenran/katsuie.html> (最終閲覧日2021年7月24日)

『柴田勝家の生誕地・名古屋市名東区の下社城址(明徳寺)』ゼロからはじめる愛知の城跡と御朱印、戦国史跡巡り講座 <https://sengokushiseki.com/?p=857#> (最終閲覧日2021年7月22日)

羽柴秀吉

32R 原田結心

はじめに

下剋上の見本とも言える、羽柴(豊臣)秀吉。低い身分から天下人に成り上がったと同時に苦労人でもあった。ここでは、彼の人生を、時代背景と共に追っていこう。

秀吉の行ったことで有名なのは、織田信長の草履を自らの懐で暖めたこと、徹夜して墨俣一夜城を造り、美濃制圧の為の戦を勝利に導いたことなど多数である。その中でもやはり有名なのは、山崎の戦いにおける秀吉軍のとんぼ返りだろう。

では、ここから秀吉の詳しい説明に入る。

1 幼少期

1536年(現在は1537年説が有力)、秀吉は生まれた。当時の幼名は「日吉丸」であった。実は、秀吉は武士の家系に生まれておらず、出自は農民であった説等多数だ。平民階級である説は有名であるが、元々武士の階級に生まれたのではないかという説も囁かれている。また、父親は、足軽と伝えられる木下弥右衛門であるが、秀吉の生い立ちについて、このような説がある。木下弥右衛門亡き後、母は竹阿弥という人物と再婚したが、秀吉はこの竹阿弥と折り合いが悪く、虐待を受けていたという。そして1550年、後述する通り、「自分は侍になる」と家を出ていった。これが、秀吉の天下人への道のスタートラインであった。

2 武士の道へ

1550年、秀吉は家を出て、木下藤吉郎と名乗った。そして、今川氏の臣下である松平之綱に仕えたがすぐに退転し、1554年、秀吉17歳の時に織田信長に仕えることとなった。秀吉は当時、体格が優れていなかったため、「小者」という現代でいうところの雑用係についた。やがてあだ名を付けるのが好きな信長は秀吉に「サル」と名付けた。その内、秀吉の持つ力を認めた信長は、秀吉を清州城の普請奉行に任命するなど、内政面での活躍を始めた。

同時に、秀吉は浅野正勝の養女であるねねを正室としたが、その後の秀吉は戦続きであった。まずは齋藤氏との戦、次に観音寺城の戦いだ。その他にも秀吉はここでは収まりきらない程の戦を戦っている。

3 政治への台頭

ここからは他の地域の有名な武将と戦いを交えていき、出世していくことになる。1569年には、毛利元就と大友氏の戦い(多々良浜の戦い)の際に、尼子氏が挙兵。これに対し元就は、信長に対し出兵を依頼した。この戦いに、秀吉は大將として参戦。そ

の軍の数2万である。この軍を率い、秀吉は僅か10日間で18の城を落城させる大活躍をした。1570年には朝倉義景討伐に従軍。しかし、同盟を結んでいた浅井長政が裏切り、織田信長軍を挟み撃ちにした。金ヶ崎の退き口である。この絶体絶命の危機を秀吉は殿として明智光秀と共に乗り越えたのだった。姉川の戦いの後、小谷城の戦いでは3000の兵を率いて京極丸を攻め落とした。そして、秀吉は名を木下藤吉郎から丹羽長秀の羽と柴田勝家の柴をとって羽柴秀吉と改めた。1573年、浅井氏滅亡後に、今浜の地を「長浜」と改め、長浜城の城主となった。1575年、長篠の戦いに従軍。

順調に出世していた秀吉だが、1577年の手取川の戦いで秀吉はとんでもない失態を犯してしまう。「上杉謙信と対峙している柴田勝家を救援せよ」と信長に命じられた秀吉は救援に向かった。ところが秀吉は作戦を巡り柴田勝家と仲違い。無断で兵を撤収し帰還してしまったのだ。これに対し信長は激怒。進退が危ぶまれたが、信貴山城の戦いにおいて、松永久秀軍で功績をあげたことで許された。

1577年、信長は毛利氏の影響下にある中国地方の攻略を秀吉に命じた。その3年後の1580年には播磨の三木城主を2年にもわたる兵糧攻めで下した。

4 中国攻めと主君の悲劇

1582年、秀吉は備中国に侵攻し、毛利方の清水宗治が守る備中高松城を水攻めにした。1582年。この年は、秀吉にとって山あり谷ありの年であった。まず、京の織田信長に悲劇が起こる。同年6月2日、信長の家臣・明智光秀が謀反を起こし、本能寺において信長は自害をした。本能寺の変、信長49歳、秀吉46歳の時であった。この悲劇を知った秀吉は、備中高松城主清水宗治の切腹を条件に毛利輝元と和議を行い、城主の切腹を見届けた上で、すぐさま軍を京へ返した。これが世にいう「中国大返し」だ。秀吉はなんと、マラソン選手もびっくりの11日間で212kmを走り抜けた。6月13日、秀吉は山崎の地へ辿り着き、山崎の戦いが起こった。この戦いでは、光秀は敗走した。そしてこの戦いは、光秀が落ち武者狩りにより討たれるという決着を見ることとなった。



5 天下人への道とキリスト教の弾圧

こうして敵討ちを果たした秀吉は、清州城に要人を集め、信長の後継者等を決定する清州会議を開いた。秀吉は信忠の嫡男・三法師を推し、柴田勝家は信長の三男・信孝を推した。これを巡り対立する2人。結局秀吉が後継は三法師とし、後見人に信孝を置くという妥協案を提示した事により、三法師が後継者となった。この結果、勝家は秀吉と対立することになった。この2人は、賤ヶ岳の戦いで相まみえることとなる。柴田軍の前田利家が突然撤退を始めると戦況が不利であるが故に撤退しているのだ、と誤解した武将が大量発生し、柴田軍総崩れ。1583年4月24日、戦いに敗れた勝家は正室のお市の方と共に自害する。こうして、織田家の実権を失わせた秀吉は、かつての石山本願寺跡に大坂城を築いた。1584年、東海の徳川家康と小牧・長久手の戦いを戦った。しかし、秀吉軍の作戦が失敗し、池田恒興ら3名が討ち死にを遂げてしまい、敗戦を喫した。それから1年後の1585年、秀吉は関白となった。そして1586年9月9日、天皇から「豊臣」の姓を賜り、豊臣秀吉となった。その後、九州の島津氏を討伐した。ここで、問題が起こっていた。それは、各地に広がっていったキリスト教布教者の存在である。秀吉はイエズス会の人間を呼び出し、追及をした。その上

で1587年、パテレン追放令を発出。キリスト教布教者を国外へ追放した。しかし、諸外国との貿易は認められていたため、事実上キリスト教は黙認された。

内政面では、1588年に刀狩令を発出。武装を解除し農業に専念させ、年貢を納めさせるのが農民の役目だということが叫ばれていたからだ。

6 天下統一とその後の豊臣政権

1589年、秀吉と秀吉の側室淀殿(お市の方)との間に後継者となる鶴松が生まれた。1年後の1590年には小田原征伐のために遠征を始め、小田原城を包囲した。これにより北条氏政は降伏し、切腹となった。ところが、秀吉を再び悲劇が襲う。なんと鶴松が数え3歳で亡くなってしまったのである。秀吉にとっては唯一の跡取りであった。更に、秀吉の左腕として活躍していた弟の秀長までも亡くなってしまふ。こんなこともあり、秀吉は関白を甥の秀次に譲った。この年にはまた、何故か千利休に切腹を命じている。理由の一つには、千利休は秀吉の政治に対し助言をしていたが、朝鮮及び明を巡り意見の食い違いがあったとされている。

そんな中でも秀吉は天下を我が物とすべく、1591年、葛西大崎一揆の鎮圧のため、軍を奥羽に派遣した。9月4日に制圧は完了した。これで、秀吉の天下統一が達成された。

同年、遂に秀吉は明の征服に向けて行動を起こす。朝鮮に協力を求めたが、断られた。1592年の春、宇喜多秀家をはじめとする16万の兵を朝鮮に送り、文禄の役が開戦した。序盤は日本軍が優勢であり、漢城(現在のソウル)や、平壤(ピョンヤン)を占領したが、明の大軍にあっさり撃破された。戦闘が膠着状態となったため、翌年には明との和平交渉が開始された。1593年、遂に秀吉に世継ぎができた。秀頼である。秀吉は日本を5分割し、その4つを甥の秀次に、残り1つを秀頼に与えるという構想を練っていた。ところが、1595年、秀次に謀反の疑いが持たれた。流罪となったが、すぐに切腹を命じられた。この後に、家臣は殉死し、三条河原にて秀次の子4男1女、更に側室等計29名が処刑された。

1596年に秀吉は禁教令を發布し、翌年に京都奉行石田三成に命じ、京都・大坂に住むフランシスコ会員及びキリスト教徒全員、合わせて26名を捕縛、処刑させた。二十六聖人処刑である。

7 豊臣政権の衰退と秀吉の最期

1593年以来、明との和平交渉が続いていたが、1596年に決裂した。1597年には再び朝鮮に小早川秀秋を筆頭とし14万人を送った。慶長の役である。今度は朝鮮水軍を殲滅し、幾つかの地域を制圧。この後南へ下り、倭城を建築。蔚山城で明・朝鮮軍を撃破し、防衛に成功した。

一方日本では、天下人秀吉が病に伏していた。秀吉は自分がいる伏見城に徳川家康等諸大名を呼び寄せた。徳川家康が秀頼の後見人になること、徳川家康・前田利家・宇喜多秀家・上杉景勝・毛利輝元を五大老とし、石田三成らを五奉行とすること、自身を神格化することなどを遺言した。そして、1598年8月18日、その生涯を終えた。62歳だった。

秀吉亡き後、五大老筆頭の徳川家康は、秀吉の死を隠した上で兵を朝鮮から撤収した。しかし、秀吉の死は既に国民や大名に早くから知れ渡っていた。1599年には秀吉を祀る豊国神社が建立され、これに先立ち、朝廷から「豊国大明神」の名を受けた。神として祀られたために、葬儀は行われなかった。

おわりに

豊臣家は秀頼が継ぎ、これを五大老と五奉行が補佐することになった。そして、秀

吉亡き豊臣政権は実権を失った。最後に、秀吉の辞世の句を紹介する。

「露と落ち 露と消えにし 我が身かな 浪速のことも 夢のまた夢」

参考文献

「豊臣秀吉」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B1%8A%E8%87%A3%E7%A7%80%E5%90%89>

(最終閲覧日 2021 年 8 月 17 日)

「本能寺の変」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%AC%E8%83%BD%E5%AF%BA%E3%81%AE%E5%A4%89>

(最終閲覧日 2021 年 8 月 17 日)

明智光秀

33R 坪田和正

はじめに

明智光秀は、NHK 大河ドラマ「麒麟がくる」で初めて主人公として取り上げられたことで、これまでの謀反人としての暗いイメージを一新し、新たな人物像が描かれた。

1.血筋

明智十兵衛光秀は、清和源氏の土岐氏支流の明智氏に生まれ、生地は美濃国の明智荘(現岐阜県可児市)と言われる。青年期の光秀については不明な点が多い。

2.信長に出会うまで

光秀は、はじめは美濃国の守護、土岐氏に代わって美濃の国主となり、斎藤道三に仕えた。しかし、道三とその息子、斎藤義龍に争いが勃発した際に、道三側についたことから、明智城を義龍に攻撃され、一族の多くが死亡した。光秀は明智家再興を誓って諸国を放浪、各地で極貧生活を続け、妻の照子は黒髪を売って生活を支えたという。やがて光秀は、鉄砲の射撃技術を買われて、越前の朝倉義景に召し抱えられた。

その後、十三代将軍足利義輝が暗殺され、京を脱出した弟、足利義昭が朝倉を頼ってきた。光秀は義昭の側近、細川藤孝と意気投合し、藤孝を通じて義昭も光秀を知ることとなる。

3.幕府との関係

室町幕府の復興を願っていた足利義昭は、朝倉義景には天下を取る気もないと判断し、朝倉氏に見切りをつけた。そこで桶狭間の戦い以来、勢いに乗っている織田信長を頼ることにした。その義昭に見込まれた光秀は、付き従う形で朝倉家を去り、両者の仲介者として信長の家臣となる。天下を狙う信長にとって、足利家の者が手駒に加わったことになり、さっそく義昭を奉じて上洛した。そこで信長は十四代将軍義栄を追放して、十五代将軍義昭を確立したのである。

光秀は、貧しい時代に自分を召し抱えてくれた義景に対しても、幕臣として自分を重用してくれた義昭にも、深く感謝しており、これで恩が返せたと思った。

こうして光秀は、信長の家臣であり、室町幕府の家臣でもあるという、特殊な環境を身に置くことになったのである。

4.丹波攻め

天正三年(1575年)信長の命により、光秀は丹波国攻略を任される。

丹波は山続きで、その間に国人が割拠して、極めて攻めにくい地域であった。

丹波国人は親義昭派で、以前は信長に従っていたが、義昭追放的に転じていた。

ただし丹波国人全員が一致していたわけではなく、まず光秀は小畠氏、川勝氏の協力を得て、丹

波攻略を開始する。しかし丹波攻めは長期戦となり、石山本願寺との戦いなど、各地への転戦を往復して繰り返すことになる。この間、妻の照子が坂本城で病死し、娘の玉子(後の細川ガラシャ)が細川忠興に嫁ぐ事になる。

天正七年(1579年)ついに丹波を占領、さらに細川藤孝と協力して丹後も占領した。

天正八年(1580年)光秀は丹波攻めの功績により、丹波一国を加増され、三十四万石を領する。さらに石山本願寺で戦死した、塙直政の支配地の南山城を与えられる。亀山城、周山城を築城し、横山城を修復して、「福知山城」に改名した。

黒井城を増築して家老の斎藤利三を入れ、福知山城には明智義満を入れた。

また丹波一国拝領と同時に、丹後の細川藤孝、大和の筒井順慶らの近畿大名が光秀の寄騎として配属される。これにより光秀支配の丹波、滋賀都、南山城を含めた、近江からの山陰へ向けた畿内方面軍が成立した。これらの寄騎の所領を合わせると、二百四十万石ほどになり、この地位を「関東管領」になぞらえて「近畿管領」と呼ばれるのである。

5.本能寺

本能寺の変に至る、光秀の謀叛理由には諸説ある。

【理由①】比叡山焼き討ち、信長が「天魔」となる大虐殺事件、光秀ほか家臣団もぞっとし、信長への信用が大きく下がった。

【理由②】足利義昭追放。光秀が復興させた室町幕府は、主君信長の手で滅亡した。

【理由③】姉川の戦い勝利の宴席にて、朝倉義景の頭蓋骨を酒の材料にしたことにより、重臣たちは腰を抜かす。

天正十年(1582年)五月二十八日、坂本城を出陣した光秀は愛宕神社に参詣し、人生最後の連歌会を開いた際に、光秀は発句をこう読んだ。「時は今、雨が下たる、五月哉」

そして六月二日、桂川を超えた明智軍は、明け方に本能寺の包囲を終えた。前列には鉄砲隊が並ぶ。刀を抜いた光秀の「かかれ〜！」の声がかかり突撃。

13000(明智軍)対 100(信長軍)

本能寺の境内では若い小姓たちが戦ったが、そのほとんどが死亡。信長は数本の弓矢を撃ち、弦が切れると槍を手にとったが、やがて戦うのをやめた。そして炎上する本能寺の奥の間に入ると、切腹したのであった。

6.山崎の戦い

中国地方で毛利と対峙していた羽柴秀吉は、いち早くこの本能寺の変を知り、迅速に行動を開始した。毛利と手を組み、主君の仇を取るべくして京に引き返した。いわゆる中国大返しである。

秀吉はその途上で、信長配下にあった武将を次々に傘下に加えた。摂津にいた信長三男の織田信孝も加わり、これを名目上の総大将に担ぎ出したことで、主君の仇討ちという大義名分を得た。兵力も40000まで膨れ上がっていた。

山崎という場所は摂津と山城の国境で、淀川から五つの川への分岐点と天王山に挟まれた地形である。

すぐ近くに勝竜寺、淀といった明智方の居場所があり、守りやすい。だが、ここを突破されると、京



都まで平地が開けていた。秀吉軍は西国街道を京に向け、猛烈な勢いで前進してきた。

六月十二日、両軍は狭い街道を挟んで円明寺川で対峙した。先陣の中川清秀が天王山の麓に押し出たのを皮切りに、羽柴秀吉、黒田官兵衛らはそこへ続々と前進した。

翌十三日、光秀は 5000 の兵とともに勝竜寺城を出て、山崎出口の卸坊塚に兵を集結させた。午後四時、中川清秀が陣形を変更しようと移動するところを狙って、明智の先陣が円明寺川を渡って攻撃したことで山崎の戦いの幕が切って落とされた。続いて光秀配下の斎藤利三が、高山重友らへ攻めかかる。これを合図に、天王山を押さえていた羽柴秀吉らの隊も、山を目指す明智の並河易家、松田政近らと戦闘に突入した。

前半、光秀は的確な指示を下ろし続けた。秀吉の軍勢は、狭い山崎周辺に戦場が固定されたこともあって苦戦した。後陣に控えていた丹羽長秀、信孝、戦い上手で知られる堀秀政の隊が参戦し、辛うじて支えたほどである。しかし、数で勝るうえに、信長の吊い合戦と意気盛んな秀吉の勢いに、光秀の軍勢は徐々に圧倒され、綻びが見え始めた。

ここで、密かに円明寺川を渡っていた池田恒興、加藤光泰が率いる 5000 の大軍が、光秀軍の側面を奇襲した。この攻撃で明智の陣形が崩れ始めた。秀吉軍はこれを逃がさず、全力で押し出し、開戦から約 2 時間で決着がついた。

光秀は、辛うじて勝竜寺に逃げ込んだが、秀吉の大軍が迫ってくる。近江にある坂本城で態勢を立て直そうと落ち延びたが、途中の小栗栖村で落ち武者狩りの農民らに襲撃され死亡した。本能寺の変から二週間も経っていなかった。

おわりに

山崎の戦いでは本来、光秀配下に入るはずの中川清秀、高山重友は秀吉側に参入しただけに留まらず、光秀とは古い付き合いで、姻戚関係にもある丹後の細川藤孝、大和の筒井順慶も光秀に協力を拒否する態度を示した。中国大返しを知ったことが原因とされている。

光秀はこの戦いで鉄砲を大量に装備していたため、秀吉軍に少なくない損害を与えている。善戦したと見るべきだが、兵力の不足を覆すことはできなかった。何より想定外だったのが、秀吉の中国大返しである。山崎から天王山の地域に、十分な兵力を投入できなかったのは、準備不足と言えるだろう。光秀の首は戦いの 4 日後に本能寺に晒され、明智の謀反はここに終わったのである。

参考文献

「明智光秀」Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%8E%E6%99%BA%E5%85%89%E7%A7%80>(最終閲覧日 2021 年 8 月 26 日)

「あの人の人生を知ろう～明智光秀」 kajipon.sakura.ne.jp

<http://kajipon.sakura.ne.jp/kt/haka-topic33.html>(最終閲覧日 2021 年 8 月 27 日)

参考資料

「攻城図～山崎の合戦」攻城団 <https://kojodan.jp/castle/252/memo/974.html>(最終閲覧日 2021 年 8 月 31 日)

滝川一益

54R 沼田知大

はじめに

織田四天王の 1 人として数えられている滝川一益だが、実際にどういう功績を残したのか知っている人は少ないのではないだろうか？織田四天王の中でも知名度の低い滝川一益だが、織田家への貢献度は柴田勝家や羽柴秀吉にも引けを取らない。では何故、知名度が低いのか？どういう人物であったのか？略歴に沿って滝川一益を深掘していきたい。

1,織田家への仕官

一益は、大永5年(1525年)に滝川一勝の子として生まれた。滝川家は由緒ある家柄だが、一益は博打を好んだり不行跡を重ねたりで、ついに一族に見放され、尾張津島の知人のところに身を寄せた。そういったことから、まだ家督を相続して間もない初期の信長と知り合い、鉄砲という共通の趣味もあってか、信長に仕官したといわれている。射撃の腕前を検分したところ、百発百中に近い腕前であった為、鉄砲の腕前を見込まれて織田信長が家臣に加えたとも言われている。

2, 信長包囲網との戦い

一益は、元亀元年(1570年)9月に起こった石山本願寺の蜂起・石山合戦の開始に伴い、これに呼応して蜂起した長島一向一揆勢に対し、北伊勢、尾張、さらに各地へと出陣している。一益の働きは、この一揆勢との戦いでは、天正6年(1578年)第二次木津川口の戦いが特筆に値する。九鬼嘉隆が率いた黒船6隻(鉄甲船)と共に一益も軍船で出陣し、石山本願寺への補給を支えていた毛利勢の水軍を撃破、この補給を断ち石山本願寺の降伏に繋がる働きをみせた。

3, 武田滅亡に貢献

一益は、天正10年(1582年)に信長の嫡男・信忠が武田攻めの軍を起こして信濃へと侵攻するのに従い、森長可らと攻略の主軸を担った。一益はこの甲州征伐において天目山で武田勝頼を自刃に追い込む大きな武功を挙げている。戦の後、武田氏の遺領は分割され、先の武功により一益には上野一国と信濃小県郡・佐久郡が与えられ、同時に「関東御取次役」にも命じられた。この時点が武将としての一益の栄華の頂点だったと言える時期だと言える。因みに一益は武勇に秀でただけでなく、一方で茶の湯も嗜む風流を介する人物でもあったようだ。巷説では一益自身はこの武田攻めの褒美として、領地ではなく信長が所有していた名物茶器である茶入れ・「珠光小茄子」を所望したとも伝えられている。しかしその願いは叶わず、代わりに名馬「海老鹿毛」と短刀を下賜されたとされている。

4, 本能寺の変の影響

しかし一益の関東支配は短命に終わることになる。天正10年(1582)6月7日、一益の元に驚くべき報せがもたらされる。信長が本能寺において明智光秀に討たれたというのだ。一益は驚愕悲憤し、袖が濡れるほど泣いたといわれている。天正10年6月2日に明智光秀が本能寺の変で信長を討ったことで、一益らが拝領した旧武田の領地では武田旧臣の蜂起が起こった。これによって北信濃の森長可が美濃へ逃れ、南信濃の毛利長秀もその地を追われ、甲斐の川尻秀隆は誅殺された。一益は、ここを勢力拡大の好機とみた北条氏総勢5万6千もの大軍の侵攻を受けた。ここで1万8千の兵を率いて迎撃に出た一益は、初戦こそ何とか勝利したものの、3倍にも上る北条に抗しきれず人質を取って撤退を敢行した。そして何とか美濃へと逃れ、その後ようやく伊勢へと同年の7月1日に戻ることが出来た。しかし6月27日に清州で開かれた清須会議に参加することが出来ず、以後織田家中における一益の序列・立場は急激に低下し、挽回することはなかった。

5, 秀吉の配下へ

その後一益は、急速に台頭した秀吉と敵対、柴田勝家に与して戦う道を選んだ。一益自身は善戦したものの、天正11年(1583年)4月には勝家が賤ヶ岳の戦いに敗れたことで長島城へ籠城、同年7月に降伏することとなった。この結果一益は所領を没収されたため、京にて剃髪して丹羽長秀を頼って越前へと赴いて蟄居した。しかし、翌

天正12年(1584年)に織田信雄が徳川家康と共に秀吉に反抗して兵を挙げた。この小牧・長久手の戦いが起こると、一益は秀吉から呼び戻され、長島および北伊勢5郡の旧領を与えることを約束された。一益は織田秀包、蒲生氏郷と兵を合わせて嶺城を囲んだ。6月、一益は木造城にいて、蟹江城主の虚を狙い、謀略によって攻め落とす。知多半島の大野城を、九鬼水軍と共に攻めるが、山口重政の逆襲により舟を焼かれ、大野城の攻略に失敗する。翌日、一益は蟹江に戻ろうとするが、徳川家康、織田信雄の連合軍に阻止され、前田定利の下市場城に逃れる。岡部長政、山口重政ら家康配下らが下市場城を取り囲んだが、一益は逆にこれらを打ち払い、追い返すことに成功している。またその翌日、家康軍は織田信雄の部隊と共に下市場城を取り囲み、城主の前田定利を討ち取った。敗れた一益は蟹江城から逃れてきた前田種利を討ち、その首を家康に差し出して死罪を免れた。一益は木造城へと逃れたが、守将の富田知信は、一益の内通を疑い、城内に入れずに追い返した。秀吉の元に戻り、許しを乞うが許されなかった。

終わりに

翌天正13年(1585)3月。一益をして甲賀の諸士を招集し、紀伊川の修復をさせるが、凱旋の時期を失ったとの理由で、諸士ごとく領地没収の上、民籍に落とされた。これに最後まで抵抗した佐治氏などは、攻め滅ぼされたという。これは「甲賀破儀」と呼ばれ、甲賀武士団の滅亡でもあった。一益は、天正14年(1586年)9月に享年は62で死去したと伝えられている。本能寺の変で織田の重臣の地位から外れたとはいえ、一益はその後の北条、秀吉との戦いにおいても圧倒的に不利な状況で善戦した。秀吉の優位を見誤った感があるとは言え、晩年まで戦い続けた勇猛な武将だったと思う。

参考文献

「滝川一益 誰よりも早く出世したが、悲しい晩年を迎えた武将」らいそく一信長戦国の古文書解説サイト-<https://raisoku.com/1244> (最終閲覧日 2021年10月26日)

「滝川一益こそ信長家臣で最強のオールラウンダー！ 62年の波乱万丈な生涯」BUSHOO!JAPAN (武将ジャパン) <https://bushoojapan.com/bushoo/oda/2020/10/27/5375> (最終閲覧日 2021年10月26日)

「滝川一益～織田四天王の名将も本能寺の変のあとは・・・」戦国武将列伝Ω 武将辞典 <https://senjp.com/taki-2/> (最終閲覧日 2021年10月26日)

丹羽長秀

58R 松田 和敏

1.はじめに

丹羽長秀という人物を知っているだろうか？丹羽長秀は武将としての才覚だけではなく、尖った武将たちの仲裁役や信長への説得役として活躍し、織田家のナンバーツーにまで上り詰めた。ここではそんな織田家屈指の万能キャラである丹羽長秀の生涯を説明していこうと思う。

2.幼少期—青年期

丹羽長秀は天文4年(1535年)9月20日、織田家の家老丹羽長政の次男として尾張国に生まれた。幼名は万千代。

長秀が数え年15歳の時、長秀は信長に仕えることになる。この頃は信長の歌舞伎仲間の一員だった。そして翌年、梅津表の戦いで初陣を飾ったといわれている。(梅津表戦いの詳細はいまだ不明

で、場所もわかっていない)信長の歌舞伎仲間としての生活が変化したのは織田家の家督争いからだと思われる。織田家の家臣の多くが信勝につく中で、長秀は信長についたのだ。

3.織田家の二番家老へ

永禄8年(1664年)、織田軍は美濃攻めの最中だった。長秀の調略により、犬山織田家の配下である黒田城主和田伸介と小口(於久地)城主中島豊後守が相次いで信長に降ることとなり、これによって犬山城を落とすことができた。さらにそのことが長良川対岸の猿啄城、鵜沼城などの城を落とすことに繋がった。その軍功が要因となったかは不明だが、同年長秀は信長の養女を娶っている。そしてその後は調略で斎藤方の武将を説き伏せて寝返らせ、美濃攻めにおける織田軍の勝利に貢献した。

時は飛んで永禄11年(1568年)、信長が上京すると、長秀は京都の治安維持や指出検地を任せられる。これらの仕事は地味なお役目なので評価はされにくいが縁の下の力持ちとなる非常に重要な仕事であった。

この時期から「木綿藤吉、米五郎左、掛かれ柴田に、退き佐久間」というあだ名が使われ始めたといわれている。このあだ名の中では丹羽長秀を示す五郎左を「米」だと表している。米は何にでも合う上に、生きていくために必要なもの。同様に長秀も誰と合わせてもうまくいき、織田家にとって必要なものであるという意味だ。

このように、信長から評価されていた長秀は天正元年(1573年)9月、織田家家臣団の中で最も早く領地を手にした。それ以上の武勲や家柄がある柴田勝家や羽柴秀吉よりも早く長秀は領地を得たのだ。長秀はそれだけ信長に信用されていたのである。

4.安土城築城

天正四年(1576年)の一月、長秀は安土城建設の総奉行に任命され、およそ三年で安土城を完成させた。安土城は11メートルの石垣が積まれていたといわれている。これは安土城の石垣は当時の城の最大である3メートルの4倍近くであり、標高199mの安土山一帯に建てられたため、見に来た人の度肝を抜いて信長もとい織田家の力をアピールした。

朱色や金色の外装の中に様々な動物が描かれた屏風が城内にはあったという。

1581年信長は当時の天皇正親町天皇の御前で京都馬揃えを行った。馬揃えとは今でいう軍事パレードのようなものである。畿内が治まりつつある中で、正親町天皇と誠仁親王に馬揃えをお見せすることが目的で行われたこの軍事パレードの先頭は長秀だった。これは名誉なことであり、長秀の信長からの評価が織田随一であったといえる。

5.本能寺の変、そして…

1582年6月2日京都の本能寺で信長が明智光秀に討たれると、その情報は各地にいた信長の配下に瞬時に伝わった。この時長秀は四国征伐に向かった織田信孝の戦目付をするために大阪におり、残りの織田配下は長秀よりもずっと遠いところにいた。よって本能寺の変直後は長秀が明智をもっとも討ちやすかったのだ。しかし大阪にいた長秀の手勢は少なく、さらに長秀の領地も明智方に抑えられていたため長秀は自軍だけでは明智方を打つことはできないと判断。織田信孝と合流して明智を打つ判断を下す。この後が問題であった。信孝は信長の死に関して戒厳令を敷かなかつたため兵士がみな逃げってしまったのだ。これが長秀の誤算だった。この誤算によって光秀討伐が遅れ、中国大返しを行った秀吉に追いつかれてしまう。そして光秀を討つ手柄を秀吉に奪われてしまうのだ。

6.清須会議—長秀の死

織田信長が死んだあと、信長の後継者を定めるために織田家の重鎮が集められた。清須会議である。清須会議では織田信長の嫡男であり、本能寺の変で信長とともに亡くなった長男信忠の嫡男三法師を信長の後継者にしようとする秀吉側と、三男信孝を推す勝家側に分かれて会議が行

われた。この会議の行方を決めたのは長秀だった。比較的中立の立場であった長秀が秀吉の「長子相続の筋目論」を支持したことで三法師(当時わずか3歳)が信長の正統な後継者に決まったのだ。

織田家の跡継ぎが三法師になることは信長の後を秀吉が継ぐことを意味していた。三法師の後見人が秀吉であったからである。このままではまずいと思った柴田勝家は1583年、秀吉に大半の勢力用いて戦いを仕掛けた。賤ヶ岳の戦いである。長秀は秀吉方につき琵琶湖北岸の塩津口を守った。そして秀吉が賤ヶ岳の砦へ戻ってくるまでの間、柴田軍の強襲を持ちこたえるという非常に大きな役割を果たした。その後、柴田勝家の居城・越前北ノ庄城攻めでも軍功を上げた。この合戦の功によってこれまでの所領にだけでなく近江2郡、越前全て、加賀南半分が長秀に与えられ、123万石の大大名となった。

長秀は天正13年(1585)4月16日に亡くなった。享年50。この後、丹羽家は長男長重が継いだ。丹羽家は領地を減らされたり、転封させられたりしながらも最終的には二本松藩主として明治の世を迎えた。

7.あしがきの何か

お読みくださりありがとうございました。安土城の建設など実績を残してはいるものの、個性の強すぎる織田家の武将たちの陰に隠れてしまう丹羽長秀、彼は現代人にもつながるものを持っていると思います。この冊子の何らかの記事を読んで少しでも歴史に興味を持ってくれたら幸いです。ちょっとですが宣伝しておきます。

世田谷学園様とのコラボ企画「清須会議ゲーム」は字の通り清須会議がもとになっているので是非見てね！

おまけ

武将姓	武将名	足軽 統率	騎馬 武勇	弓 知略	鉄砲 政治	兵器 義理	寿命 相性
所持戦法	信仰	出自	親武将			口調	
にわ	ながひで	C	C	B	A	D	50
丹羽	長秀	69	75	73	86	78	0
鎮静	仏教	武士	-			男性：能吏	

武将姓	武将名	足軽 統率	騎馬 武勇	弓 知略	鉄砲 政治	兵器 義理	寿命 相性
所持戦法	信仰	出自	親武将			口調	
しばた	かついえ	C	A	D	C	B	61
柴田	勝家	90	93	53	67	72	85
突撃之四	仏教	武士	-			男性：猪武者	

「信長の野望 天道」における丹羽長秀のステータスと柴田勝家のステータス比較(AからEまでの五段階)

こうしてみると長秀の軍事、政事における万能さがわかる。(実際は両者とも所領を治めているためそれなりに運営の力は皆持っていたようです。)

参考資料

佐々木功『織田一の男、丹羽長秀』(2019年/光文社)

司馬遼太郎『歴史の中の邂逅2織田信長—豊臣秀吉』(2010年/中央公論新社)

清須城公式ホームページ <http://kiyosujyo.com/kaigi.html>

「丹羽長秀 信長が最も信頼した武将の生涯」 らいそく <https://raisoku.com/893>

(最終閲覧日 2021 年 10 月 30 日)

「丹羽長秀」 ニコニコ大百科(仮)

<https://dic.nicovideo.jp/a/%E4%B8%B9%E7%BE%BD%E9%95%B7%E7%A7%80>

(最終閲覧日 2021 年 10 月 30 日)

「丹羽長秀は信長に最も信頼された織田家重臣の一人 その生涯 65 年まとめ」BUSHOO!JAPAN

<https://bushoojapan.com/bushoo/2021/08/12/17722/2#i-3>

「丹羽長秀とは」 コトバンク

<https://kotobank.jp/word/%E4%B8%B9%E7%BE%BD%E9%95%B7%E7%A7%80-17349>

(最終閲覧日 2021 年 10 月 30 日)

「信長の館を見る」安土城天主 信長の館

zc.ztv.ne.jp/bungei/nobu/tenji/index.html(最終閲覧日 2021 年 10 月 30 日)

「信長の美濃攻め まとめ年表作ってみました;達人に聞け!」 中日新聞

<https://plus.chunichi.co.jp/blog/mizuno/article/233/5698/>(最終閲覧日 2021 年 10 月 30 日)

「信長主催『京都御馬揃え』のメンツが凄え! 織田家の軍事パレードに天皇は?」 BUSHOO!JAPAN

<https://bushoojapan.com/bushoo/oda/2021/02/28/15245/>(最終閲覧日 2021 年 10 月 30 日)

「【麒麟がくる】コラム】明智光秀が担当した京都馬揃え。織田信長は軍事力で正親町天皇を脅そうとしたのか」YAHOO!JAPAN <https://news.yahoo.co.jp/byline/watanabedaimon/20210205-00221072>

(最終閲覧日 2021 年 10 月 30 日)

信長を裏切った武将

12R 山岸幸平

信長は順調に天下統一を進めていったがその間、彼はたくさんの武将に裏切られた。

ここでは信長を裏切った有名な武将について書く。

家臣

1 明智光秀(1528 頃-1582)

信長に信頼されていながら信長を裏切り、自害に追いやった武将明智光秀。2020 年の大河ドラマの主人公として有名だ。若い頃は美濃(岐阜県)の斎藤道三、道三の死後は越前(福井県)の朝倉義景を頼り、将軍足利義昭に仕えた。信長に仕えてからは、信長に信頼され、丹波(兵庫県)と近江(滋賀県)を領地とした。1582 年彼は本能寺の変で信長を自害に追い込んだ(本能寺の変)。しかし仇を討ちに来た豊臣秀吉に敗れ、逃げる途中に落ち武者狩りに殺された。



2 荒木村重(1535-1586)

信長に仕える前は摂津(大阪府)の池田家に仕え、その後三好家に寝返り池田家を乗っ取った。信長に仕えてからは茨木城主、伊丹城主(兵庫県)となり、摂津を領地とした。1578 年信長に謀反を起こした。この時彼は一人で有岡城(伊丹城)から逃げた為、一族は皆殺しにされた。信長の死後は茶人となり、出家し、1586 年病死した。



3 松永久秀(1508 か 1510-1577)



戦国三大悪人に数えられる武将松永久秀。主君の子と將軍足利義輝(義昭の兄)を暗殺し、大仏殿に火をかけたとされるが真偽は不明。信長の前は三好長慶に仕え、長慶の死後は幕臣となり、信長の上洛に協力した。信長に大和(奈良県)を与えられたが、1571年足利義昭の信長包囲網に入った。2年後包囲網が崩壊して信長に降伏し、許された。1577年再度信長を裏切ったが敗れて自害。大切な茶釜平蜘蛛を叩き割り城に火をかけて切腹という壮絶な最期を遂げた(信貴山城の戦い)。

家臣以外

1 浅井長政(同盟者 1545-1573)

近江の戦国大名。同盟として信長の妹お市の方と結婚した。彼は同盟を結んでいる朝倉義景を攻めない約束をしたが、1570年信長が義景を攻めたため信長と戦ったが敗北(姉川の戦い)。その後信長包囲網を結成した。しかし1573年包囲網が崩壊して信長は朝倉家を滅ぼし(一乗谷の戦い)、近江に侵攻してきた。

信長軍は降伏を勧めたが断り続けて最期は自害し、浅井家は滅びた(小谷城の戦い)

2 織田信行(弟 1536頃-1558)

信長のすぐ下の弟。若い頃の信長は異様な服装で柿や瓜を食べながら町を歩いたり、信秀の葬儀の際は位牌に抹香を投げつけたりと寄行が目立ち、後を継ぐのは態度の立派な信行が良いという意見が多かった。1556年信長に戦いを挑むが敗北(稲生の戦い)。母のとりなしで命拾いした。その2年後再び謀反を起こしたが、仮病を装った信長に騙され清洲城に見舞いに来た際に殺された。

終わりに

信長は苛烈(厳しく激しい)性格だったので多くの人物に謀反を起こされた。上記の他にも信長を裏切った武将はいる。裏切りがなければ信長は天下を取れたかもしれない。

参考文献

「明智光秀」Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%98%8E%E6%99%BA%E5%85%89%E7%A7%80>
(最終閲覧日 2021年7月30日)

「荒木村重」Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8D%92%E6%9C%A8%E6%9D%91%E9%87%8D>
(最終閲覧日 2021年8月18日)

「松永久秀」Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%BE%E6%B0%B8%E4%B9%85%E7%A7%80>
(最終閲覧日 2021年8月18日)

「浅井長政」Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B5%85%E4%BA%95%E9%95%B7%E6%94%BF>
(最終閲覧日 2021年8月19日)

「織田信行」Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B9%94%E7%94%B0%E4%BF%A1%E8%A1%8C>
(最終閲覧日 2021年8月19日)



個人研究 「攻玉史稿」



『吉備大臣入唐絵巻』

世界史・日本史を問わず、人類史を古代史・中世史・近世史・近代史に区分して研究した。学生ならではの自由奔放な考えで歴史学に取り組んだ。この若さ特有の自由な発想が新しい見地を発掘することを我々は目指している。

古代史

古代史編集担当 松島絆

この章は、部員が各々で研究して執筆された論文の中で、主に古代史の論文は集約したものである。古代史の期間は様々な学説があるが、日本史の場合は古墳時代～平安時代末期、東洋史の場合は殷王朝の成立～後漢朝の崩壊、西洋史の場合は古代ギリシアにおけるエーゲ文明の成立～西ローマ帝国の崩壊と、ここではする。

古代史は人類史の根本にして、全ての文明の始まりにあたる。ゆえに、古代史から得るものは多いと私は考える。

目次

古代律令体制下の象徴天皇制の法則性……………	p70	45R	松島絆
ソワソン管区小史……………	p80	51R	神原孝太郎
ハンニバル・ノヴァ ～ハンニバル・バルカの人生を添えて～	p83	42R	大内和音
コラム 日本が奈良時代の時のヨーロッパ……………	p85	16R	梅元総介



談山神社所蔵『多武峰縁起絵巻』
江戸時代に乙巳の変を描いたもの。左上は皇極天皇。

はじめに

昨今、学者の中には古代律令体制下に於ける天皇制が現在の象徴天皇制と酷似していると論じるものも多くいる。私もその考えに大いに同意する。けれども、その多くが摂関政治ばかりに着目し、古代律令体制下に於ける天皇制全体への見識が希薄になっているのではないかと考えざるをえない。故に、私は摂関政治のみならず、古代律令体制下に於ける天皇制全体が象徴天皇制であったと仮定し、その矛盾点となる、古代律令体制下に於いて、唐突な象徴天皇らしからぬ非象徴天皇（例えば、天平十五年（743）の大仏建立の詔で「夫れ天下の富を有つ者は朕なり。天下の勢を有つ者も朕なり。此の富勢を以て此の尊像を造る」と述べるほど権力をほしいままにした聖武天皇や、源頼朝に「日本第一の大天狗」と言わしめた後白河法皇を初めとした院政に於ける治天の君らなど）が現れる、その政治的要因を探ることで、その法則性を掴み、古代律令体制下に於ける象徴天皇制の実態を示したいと思う。

1 律令体制下に於ける象徴天皇制

象徴天皇制と一言に言っても、その言葉を受け取る人によって様々なことを連想するであろうし、「象徴天皇制」とはそもそもそういう多義的な言葉である。「象徴」という言葉がややこしいのである。ともかくも、この論文に於いては、国家権力を一手に掌握し国家機関を自己の意志の下に動かし政治を恣意的に動かす専制君主制とは異なり、国家の頂点に立ちながら極力政治介入を行わない君主制（不執政王権と呼ばれたりする。）、すなわち現在の天皇制に近いものを象徴天皇制と呼称する。

では、何故律令体制下に於ける天皇制は象徴天皇制と比定されるのか。それは律令によって新たに設立された太政官合議体制を基盤として、緻密な執政機関が形成され、天皇が特段何もしなくても政治が回っていたからである。これを理解するには、古代律令体制下の政治構造というものを理解しなくてはならない。

もちろん、頂点には帝がいる。そして、その下には政治を司る太政官、祭祀を司る神祇官が存在し、さらに太政官の下には行政機関・八省（中務省、民部省、治部省、式部省、兵部省、刑部省、大蔵省、宮内省）が存在した。その八省も、左弁官局と右弁官局に分かれたり、太政官の下には太政官の事務局的な存在としての少納言局があったりなど複雑であるが、ともかくも図にまとめておくので、それを参照して頂きたい（図1）。一般的に歴史を学ぶ上で名を聞く、左大臣、右大臣といった大臣や大納言や中納言の納言（ちなみに太政官の構成員に少納言は含まない）、参議といった人々は太政官の構成員である。では太政官とは何か。それは律令官制に於ける最高官庁にして、国政の審議機関である。国家の政治にかかわること全てを統括し、国家の政治に関わる事全てがここで、この構成員

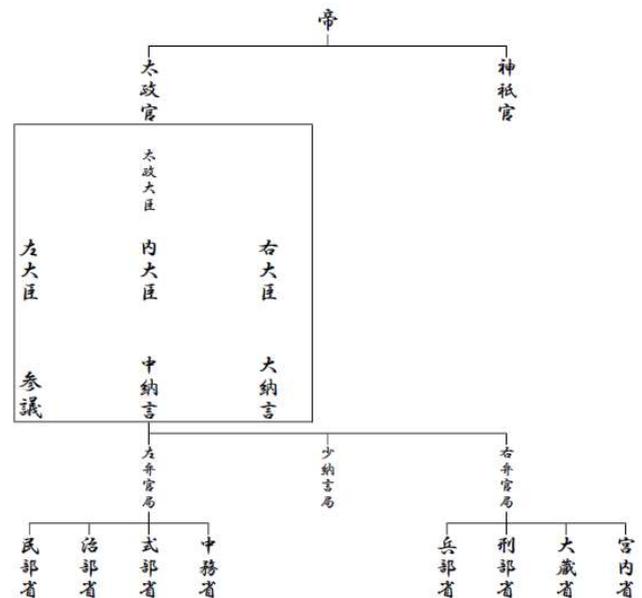


図1 律令中央官制

(日正社『日本史小典』参照)

すなわち公卿たちによる合議制で決定される。また、公卿たちの多くが八省の卿（かみ）や六衛府や大宰府などの要職を兼任していることからさながら、現代の閣議のようなものである。この合議での決定は蔵人を通して天皇に上奏され、天皇は認可、そしてその決定が適用されるという形であった。この政体は太政官合議体制と呼ばれることがある。

この太政官合議体制が律令の完成で確立されたことで、天皇独裁で万事を決めるのではなく、天皇が特段、政治的に何もしなくとも官僚組織によって、国家の諸事が処理されるようになったのである。こうして、律令体制下の太政官合議体制の天皇は政治に極端に介入することなく、国家運営が行われていたということで、現代のような天皇制に似ていることから、象徴天皇制であると比定されるようになったのである。

2 太政官合議体制に於ける象徴天皇制の欠陥と補完

ここまで、太政官合議体制による象徴天皇制を述べてきたわけであるが、これには大きな欠陥がある。それは天皇が何もしなくてよいといわれて、何もしないはずがないということである。天皇も、また人である。一天万乗の君になった時、その権力を行使したいと思うのも当然である。これは尊卑問わず同じく思うことである。また、臣下とは異なる主義・思想を持っていて、己の理想の政治を行いたいと思うのも当然のことである。そして、これらを実行するという事も十分に考えられることである。当然、天皇が政治をしてはいけないとのルールはこの当時なかったわけであるから、これらのことは自然な事である。しかし、これでは太政官合議体制による象徴天皇制が起こる確率は全く0に等しいであろう。けれども、太政官合議体制が政治の中心であった時、原則として（多くの例外が存在するが）象徴天皇制（不執政王権）が存在したとされている。これはなぜか。この太政官合議体制による象徴天皇制には欠陥がある一方で、その補完も存在しているからである。

では、その補完とは何か。端的に言うなれば、太政官が強かったのである。日本の律令の特徴として良く挙げられるのは、太政官に政治権力が一極集中していること、そしてその太政官が合議制であるということである。これは何を表すか、それは太政官を掌握する、それすなわち国家権力を掌握したに等しいということであり、その為には太政官は合議制で複数人なのだから、それらを一族で独占すればいいということである。これさえできれば、この国の権力を我が物にすることができるのである。これを実現できれば、いくら一天万乗の君たる天皇の命令であろうと太政官の絶大な権力を背景に押しとどめることができるわけである。これを実現したのが藤原氏による摂関政治であったのだ。

ともかくも、太政官合議体制による象徴天皇制は制度上欠陥がある一方で、太政官の強さを以て、その欠陥は補完されていたのである。故に古代律令体制下に象徴天皇制が存在していたときは太政官が強かったからであると考えた。また、古代律令体制下に非象徴天皇制がまばらに例外的に存在したのは、何らかの事情で太政官の力が弱く、太政官合議体制に於ける象徴天皇制の欠陥に対する補完が正常に働かなかったからではないかと私は考える。すなわち、古代律令体制下に於いて、太政官が強ければ補完作用により象徴天皇制が現象し、反対に太政官が弱ければ補完不作用により非象徴天皇制が現象する。これにより、古代律令体制下に於ける象徴天皇制には例外が存在したのである。その例外が律令に則した専制君主、非象徴天皇である。

3 太政官の強弱

ここまで理論的なことばかり述べてきたが、いかなる崇高な理論も理論のみでは画餅に過ぎない。事例に迫らねばならぬ。けれども、その事例の前に一つ考えねばならぬことがある。それは太政官の強弱とは具体的にはどういうことなのかということである。

ある。

太政官が弱いというのはどういうことか。もちろん、古代律令体制下に於ける象徴天皇制の欠陥の補完をなすことができないという事であるから、すなわち天皇を太政官が止めることができない状態である。故に私はそのような政治状態が起こる政治的要因に下記の3つの要因があると考える。

- ①太政官内が複数氏族並立である時
- ②皇親勢力が太政官内の多くを占めている時
- ③太政官構成員（公卿）が出自の低さなどより、確固たる地盤をもたない者が多い時

まず、「①太政官内が複数氏並立である時」であるが、これは古代律令体制下に於いて一般的な状態というか、理想的とされた状態である。故に特段変わった状態というわけではない。けれども太政官内で複数氏族が並立するという事は、太政官として統一した状態を作ることができないわけである為、同一氏族による独占状態の太政官と比べると、太政官の力が弱いのは事実である。次に「②皇親勢力が太政官内の多くを占める時」であるが、そもそも皇親勢力とは何かという話である。簡潔に言えば、皇親勢力とは「皇家に親しい」勢力といったところであろう。主に外戚などではなく、天皇家の分家といった感じで、天皇家と血縁的に近い氏族たちの勢力である。今回の話とそれるが、この律令体制の基盤を作った天武天皇は宣化天皇の後裔である多治比氏などの皇親勢力を利用することで、天皇の専制権力を確固たるものとして、この時の政治は「皇親政治」と呼ばれていたりする。ともかくも、皇親勢力は、その出自より天皇家による政治を支持する傾向にあり、天皇を止めるというよりは、天皇の専制政治を助長する方向にあり、太政官が補完としての働きを持ちにくくなる。最後に

「③太政官構成員（公卿）の出自が低さなどより、確固たる地盤をもたない者が多い時」だが、低い身分から公卿まで昇りつめて、身分社会の世の中に珍しく、すごい、で終わればよいが、象徴天皇制の実現をなすための補完としては大変心細い存在であることは自明なことであろう。低い身分から昇りつめたものにとって、古今東西共通するのが、確固たる権力地盤がないということである。名家の貴公子たちは、長年積み上げた一族の権力基盤を父より受け継げばいいわけだが、成り上がり者には、それが無い。このことが象徴天皇制の実現の為の補完、すなわち天皇を止めるというところには弱いところである。

では。反対に太政官が強い状態とは、どのような状態であろうか。すなわち、古代律令体制下に於ける象徴天皇制の欠陥を補完できるということである。その政治的要因は、先ほど挙げた太政官が弱い時の3条件の全くの反対であると考えられる。それが以下のことである。

- ①太政官内が一氏族独占である時
- ②皇親勢力が太政官内に占める割合が少ない時
- ③太政官構成員（公卿）が名門多いなどで、確固たる権力基盤を持つ時

このような状態が、太政官を強くし、古代律令体制下に於ける象徴天皇制実現の欠陥を補完するのである。

3 非象徴天皇の現象とその実例

先ほどから、長々と語っている理論の実例を述べねばならない。古代律令体制が完備されるようになってきたのは、壬申の乱に勝利して天皇位の即位した天武天皇の頃よりである。天皇は律令体制の確立を目指し、律令の編纂を開始するなどして、この

頃には、二官八省の原型となるもののほとんどが存在したとされている。ただ、天武天皇の御世の頃に、明文化された律令の完成まではなすことができなかった。そして、天武天皇の妻であり天智天皇の娘である持統天皇の時に「飛鳥浄御原令」という令が完成した。この「飛鳥浄御原令」は後の「大宝律令」の内容がほぼ同じとされていることから、この頃には古代律令体制が完備されていたと考えられる。すなわち、この後の天皇は欠陥と補完の法則が基本的には成り立つわけである。では、その実例として、政治情勢が不安定であり、象徴天皇と非象徴天皇が交互に存在した奈良時代の天皇制の推移を挙げようと思う。

4 聖武天皇に於ける非象徴天皇の実例

奈良時代の天皇と言え、やはり聖武天皇であろう。聖武天皇といえ、大仏の建立、国分寺・国分尼寺の建設により、仏教を保護し鎮護国家の樹立に貢献した天皇として有名である。このことで天皇は後の世に名君として名を残すわけであるが、このようなことは、絶大な権力がないと行えないものである。なぜならば、これらの仏教保護政策及び彷徨五年と呼ばれる首都移転事業の頻発などは大規模建築物の建築という全人民を強制的に労働させる必要のあるものであるからである。名君と称されている聖武天皇であるが、天皇のこの政策は、結果として、労役の辛さから、国より配布された口分田を捨てて逃げる逃亡農民を生み、律令体制の根本たる土地制度である公地公民制の崩壊の一因を招いたのである。また、当時の政治家で、橘奈良麻呂などは「東大寺を造り人民辛苦す」として人民の疲弊を糾弾し謀反を企てたし、160、70年後の平安時代の有名な漢学者である三善清行は「意見封事」に、この当時の過度な仏教保護政策によって「天下の費えは十分の五に達した」として国家財政の疲弊についても挙げている。ともかくも、聖武天皇の政策はとんだ悪法であったのである。

当然、当時の太政官はこのような悪法を止めるべきであった。当時の太政官は決して無能ではなく、橘諸兄などの優秀な政治家もいた。けれども、止めることはできなかった。これはすなわち、聖武天皇が太政官では止めることのできない象徴天皇ではない非象徴天皇であることを表すのである。

では、その非象徴天皇とはなぜ現れたのであろうか。古代律令体制下に於ける象徴天皇制の欠陥に対しての補完がしっかりと対応してないのである。すなわち太政官が弱かったのである。ではどの程度、先ほど挙げた太政官が弱い時の諸条件を満たしているだろうか。当時の太政官はどのような状態であっただろうか。聖武天皇即位の時、養老八年（神亀元年）の太政官は下記の具合であった。

知太政官事	一品	舍人親王
左大臣	正二位	長屋王
大納言	正三位	多治比真人池守
中納言	正三位	巨勢朝臣祖父
		大伴宿禰旅人
		藤原朝臣武智麻呂
参議	正三位	藤原朝臣房前
	正四位上	阿部朝臣廣庭

そして、神亀六年（天平元年）長屋王の変で、長屋王とその一党が政界から駆逐されると、二年後、天平三年には太政官は下記の具合になった。

知太政官事	一品	舍人親王
大納言	正三位	藤原朝臣武智麻呂

従三位 阿部朝臣廣庭
 参議 正三位 藤原朝臣房前
 参議 従三位 藤原朝臣宇合
 多治比真人縣守
 藤原朝臣磨
 正四位上 鈴鹿王
 正四位下 葛城王（橘諸兄）
 大伴宿禰道足

贈太政大臣藤原不比等の息子たち、藤原四兄弟、武智麻呂、房前、宇合、磨すべてが台閣している。藤原政権の確立と言っても過言ではない。これは神亀六年の長屋王の変で藤原氏のライバルである長屋王一党が没落したからということもあるが、同年の光明氏の皇后への立后というのがよく働いたからであろう。この時の状態は、10人中4人が同一氏族、藤原氏に占められていることから、もちろん皇室と近い氏族である多治比氏や皇族（親王や王）などの皇親勢力がまだまだ健在であるが、太政官が弱いという状態ではなく、反対に太政官は強く天皇を止める太政官による補完作用が正常に働いたであろう。けれども、この時がきてしまった。

天平九年、都で天然痘の大流行が起きたのである。始まりは三月下旬に復命した遣新羅史であると考えられる。当時のことを記された『続日本紀』には、「百官の官人、疫を患うを以てなり」と記されている。そして、国の中樞を担う四位以上の官人の死を、六月に4人、七月に4人、八月に2人、とも記されている。ともかくも、多くの高位高官のものも含む人民が、天然痘にかかり死んだのである。これは藤原氏と雖も、例外ではなく、4月17日には次男・民部卿房前が、7月12日には四男・磨が、7月24日には長男・右大臣武智麻呂が、8月5日には三男・参議式部卿兼太宰帥宇合が死んだ。栄華を極めた藤原四兄弟も疫病には勝てなかったのである。他には中納言多治比真人縣守なども、またこの疫病の為に死んだ。そして、この天然痘流行後、天平十年の太政官は下記の具合となった。

右大臣 正三位 橘宿禰諸兄
 知太政官事 正三位 鈴鹿王
 中納言 従三位 多治比真人廣成
 参議 正四位下 大伴宿禰道足
 従四位下 藤原朝臣豊成

太政官構成員は藤原氏、一氏で大部分を占めていた状態から皇族、橘氏、多治比氏、大伴氏、藤原氏の各氏族から一人といった具合になり、複数氏族による並立状態になった。また、橘宿禰諸兄とは元の名を葛城王といい、皇族から臣籍降下したばかりで、ほぼ皇族といって差し支えなかったし、多治比氏は先述した通り、宣化天皇の後裔で皇統に近い家柄であった。すなわち、鈴鹿王、橘宿禰諸兄、多治比真人廣成と太政官5人中3人が皇親勢力であったのである。複数氏族の並立、皇親勢力の勢力拡大、こうなると先述した通り、太政官の力が弱まり、天皇権力が増大し、非象徴天皇が現れるのは自然なことである。こうして、聖武天皇による非象徴天皇的天皇親政政治が行われることとなるのである。

5 淳仁天皇に於ける象徴天皇の実例

その聖武天皇の跡を継ぐのが、女帝・孝謙天皇（称徳天皇）である。この女帝は僧侶・道鏡と男女の関係にあり、この国を乱した暴君として、後世に語られているが、

それが事実かどうか定かではない。だが、強権的であったことは事実であるらしい。けれども、孝謙天皇である頃は随分とおとなしかったようである。

では、孝謙天皇即位当初、太政官はどうであったか。孝謙天皇は天平二十一年（天平感宝元年）に、父・聖武天皇より位を譲られた。その当時の太政官は下記の具合であった。

左大臣	正一位	橘宿禰諸兄
右大臣	従二位	藤原朝臣豊成
大納言	従二位	巨勢朝臣奈豆磨
	正三位	藤原朝臣仲麻呂
中納言	正三位	大伴宿禰牛養
	従三位	石上朝臣乙磨
	従三位	紀朝臣麻路
	正四位上	多治比真人廣足
参議	正四位上	大伴宿禰兄磨
	従四位上	橘宿禰奈良麻呂
	従四位上	石川朝臣年足
	従四位下	藤原朝臣八束
	従四位下	藤原朝臣清川

天然痘により衰えた藤原氏は、この時には盛り返しており、藤原四兄弟の息子たちの多くが台閣している。太政官の首座は皇親氏族・橘氏であるが、台閣人数は橘氏2人に対して藤原氏は4人と上回っている。けれども、太政官13人いる中では4人も2人も大差ないであろう。皇親勢力による太政官の大部分の占拠は、既になくなってはいたが、この時未だに複数氏族による並立状態であり、太政官は弱く、天皇権力は強いものであった。だが、孝謙天皇が権力をにぎるのではなく、聖武天皇が存命中は聖武天皇が、聖武天皇死後は光明皇后がその権力を握っていった。後の権力者、藤原朝臣仲麻呂（恵美押勝）はこの政治情勢を利用することで、権力を掌握していった。

聖武天皇は天平勝宝八年（756）に崩御した。そして、その後聖武天親政期を支え、天平勝宝八年（756）から職を退いていた橘宿禰諸兄が、翌年天平宝字元年一月に死去した。こうして、太政官の首座は藤原四兄弟の長男・武智麻呂の子である右大臣藤原朝臣豊成にうつった。けれども、同年七月に橘宿禰諸兄の子で当時参議であった橘宿禰奈良麻呂とその一党が、謀反を企てていたと判明。橘氏を始め、多治比氏、大伴氏、小野氏などが連座していたとして、死刑若しくは流刑に処せられた。また、右大臣藤原朝臣豊成もまた、この一党に心を寄せていたとして、太宰員外帥に左遷された。この一連のことを、その首謀者の名前を取って、橘奈良麻呂の乱と呼ばれている。そして、この一連の政治動乱を謀ったのが、光明皇后の信頼あつく、右大臣藤原朝臣豊成の弟である、紫微内相藤原朝臣仲麻呂（後の藤原恵美朝臣押勝）であった。この乱によって、藤原朝臣仲麻呂は太政官の首座を獲得したのである。

この一連の政治動乱後、孝謙天皇は天平宝字二年（758）に退位、皇太子であった大炊王が即位した。これを淳仁天皇という。もちろん、淳仁天皇は藤原朝臣仲麻呂改め藤原恵美朝臣押勝の傀儡であった。では、当時の太政官はどうなったのだろうか。恵美押勝最盛期、天平宝字六年（762）の太政官は下記の具合である。

大師	正一位	藤原恵美朝臣押勝
御史大夫	正三位	石川朝臣年足
	正三位	文屋真人浄三

中納言	従三位	藤原朝臣永手
	従三位	氷上真人監焼
	従三位	白壁王
	従三位	藤原朝臣真盾
参議	従三位	藤原朝臣御盾
	従三位	藤原朝臣巨勢磨
	従三位	紀朝臣飯磨
	正三位	藤原朝臣弟貞
	正四位上	藤原惠美朝臣真光
	正四位下	藤原朝臣清河
	従四位下	藤原惠美朝臣訓儒磨
	従四位下	藤原惠美朝臣朝狩
	従四位下	中臣朝臣清磨
	従四位下	石川朝臣豊成

大師とは太政大臣のことであり、御史大夫とは大納言のことである。押勝は唐風を趣味とした人物で、これら以外も、多くの官職名や役所名が唐風に改められた。太政官は乾政官、紫微中台は坤宮官、左大臣は太傅、右大臣は大保といった具合である。現代でいうところのハイカラな人物であったのだろう。太政官改め乾政官の17人中10人が藤原氏であり、他は石川氏2人、皇族、文屋氏、氷上氏、紀氏は1人ずつといった形で、藤原氏に拮抗する勢力は現れず、太政官は藤原氏による一氏独裁状態であり、太政官は強く、ここに古代律令体制下に於ける象徴天皇制の欠陥に対する補完が正常に働く象徴天皇が現れたのである。けれども、その状態が長く続くことはなかった。

太政官における藤原氏は10人と述べたが、そのうち4人が藤原惠美朝臣であった。すなわち、親子4人（藤原惠美朝臣押勝、真光、訓儒磨、朝狩）で公卿となったのである。これは当時異例のことである。最初、太政官は複数氏族の並立が理想的な形とされたことを述べたが、これは太政官合議制という日本独自の政体が大夫制という律令体制以前古代の伝統政体を引き継ぐものであったからである。大夫制とは、有力豪族の長、大夫（まえつきみ）たちが、合議によって国の大事を決める政体である。この合議を構成する大夫は氏族の長が任命されるものであるから、あくまで一氏族につき一人というのが原則であった。この原則が、律令体制導入直後は太政官に引き継がれていった。よって、基本的には一氏族一人の公卿というのが、望ましいとされていた。この原則は時が過ぎるにつれ、形骸化していったものの、奈良時代は未だその考え方が少ないながらも残っていた。そんな中、親子4人で公卿の席を占めたわけである。反発は必至であった。他氏族からの反発のみならず、同氏族からの反発も強く、藤原四兄弟の三男・故式部卿宇合の次男にして、藤原式家（式部卿家）の代表となっていた、藤原宿奈麻呂（後の良継）は仲麻呂（押勝）暗殺計画を練ってさえいる。（このことがのちに露見し、良継は八虐の中の大不敬の罪を問われ、官位と姓が剥奪されている。）ともかくも、この人事によって氏族内外で藤原惠美朝臣押勝に対する不満が高まっていったのである。

また、彼を手厚く保護してくれた光明皇太后が天平宝字六年（760）六月に死去した。これも押勝にとっては痛手であった。皇太后から信頼が彼の権力基盤の一つであったからだ。

そして、孝謙上皇の信頼を失ったことも彼の進退に大きく影響した。光明皇太后が死に、孝謙上皇は一種の解放感を味わったのかもしれない。天平宝字七年（761）、上皇が病気になった時、看病禅師として近づいてきた道鏡をやがて親しむようになって

きたのである。押勝は淳仁天皇を通して、道鏡に関して上皇に文句をつけた。これに激高したのか、翌年天平宝字八年（762）六月三日平城宮の朝堂院にて、上皇は次のような宣命を下した。

朕は女子ながら嫡系を継ぐただ一人として天皇の位にあったのだが、今の天皇（淳仁天皇）に譲位したところ、かれは恭しく従うことなく、いうまじきことをいい、すまじきことをした。だいたい、とやかにいわれる覚えはないのだが、（道鏡と）別な宮にいれば、もういいがかりのつけようもあるまい。それをとやかにいわれてしまったのは、どうせ朕の不徳のせいだろう。くやしくてならぬ。まあこれも菩薩心を起こす仏縁と思えばいい。だから朕は出家する。ただし今後、今の天皇は、神々の祭や小さな事にかぎって採決するがいい。国家の大事と賞罰との両者は、朕がする。

淳仁天皇と藤原恵美朝臣押勝に対しての宣戦布告といってもよいであろう。上皇が「国家の大事と賞罰の両者は、朕がする」と宣命にて堂々と言えたのは、やはり実際に国家の政治を動かしている押勝に不満のある太政官の公卿たちの助けがあったからであろう。こうして、押勝は上皇の信頼を失った。

この後、押勝は国内の不穏な動きを、朝鮮半島の新羅遠征や東北地方の蝦夷討伐などの外征で払拭しようとするも、結局払拭できず。恵美押勝の乱で、多くの氏族の協力を得た孝謙上皇によって、押勝は討たれるのである。孝謙上皇は乱後、淳仁天皇を淡路に流し（このことで淳仁天皇は淡路廢帝と呼ばれることがある）、重祚、再び天皇位についた。そして、ここに多くの人々に知られている強権的な孝謙天皇（重祚した後は称徳天皇）が現れるのである。

6 称徳天皇に於ける非象徴天皇の実例

称徳天皇は即位した後、詔して、自分は仏の御弟子として菩薩の戒を受けているので、まず三宝に供えまつり、次に天社国社をうやまうという、神仏を混じても差し支えない、というようなことを述べている。これは聖武天皇以来の仏教路線を最高にまで高めたものである。僧侶である道鏡を重用していたことから随分と仏教に強く傾倒していたことがわかる。

また、称徳天皇はやはり強権的であった。己の皇位を犯すと考えたのか、己が廃した淳仁天皇（淡路廢帝）の甥にあたる和氣王を、王が寵愛していた紀益女とともに謀反のかどで絞首、このことに関与したとして参議粟田道麻呂も流罪に処せられた。さらに女帝の神経質な目は異母妹にまで向けられ恵美押勝の乱で処刑された塩焼王に嫁いでいた不破内親王も、その子志計志麻呂とともに女帝をのろったという罪で神護景雲三年（769）に、内親王の籍を奪われ、志計志麻呂は土佐に流された。後にこの時代を回顧したものは、みな「皇位の後継者が決められず、人はたがいに疑って、罪に落とされるものが多かった」や、「政刑日に峻しく、殺戮みだりに加えき」、すなわち政治的裁判は年ごとに酷くなり、おやみに人を処刑すようになった、と述べている。他にも、己の寵愛する道鏡を太政大臣さらには天皇に匹敵する法王に任じたり、東大寺の対となる大寺・西大寺や道鏡の故郷である弓削に弓削宮という広大な京（天皇はこれを「西京」と称させた）を建設するなど、大規模土木建築を繰り広げたりした。両者とも強大な権力が必要である。ともかくも、称徳天皇は絶大な権力を保持していたことがわかる。

では、即位後の太政官はどのような状態であったのだろうか。天平神護二年（768）の太政官は下記の具合である。

太政大臣 道鏡禪師（後に法王に）

左大臣	正二位	藤原朝臣永手
右大臣	従二位	吉備朝臣真備
大納言	正三位	白壁王
	正三位	藤原朝臣真盾
中納言	正三位	弓削宿禰浄人
参議	従三位	藤原朝臣清河
	従三位	山村王
	従三位	石川朝臣豊成
	従三位	文屋真人大市
	従三位	中臣朝臣清麿
	正四位下	藤原朝臣縄麿
	正四位下	石上朝臣宅嗣
	従四位上	藤原朝臣田麿
	法臣位	円興禪師
法参議	正四位上	基貞禪師

太政官構成員は16人であり、その首座は道鏡である。そして、その一党、参議弓削宿禰浄人（道鏡の弟）、参議法臣位円興禪師、法参議基貞禪師、合わせて、道鏡勢力は太政官16人中4人を占めていた。次に藤原氏は道鏡に次ぐ地位にある左大臣永手をはじめ、16人中5人占めている。（中臣氏は藤原氏の出身氏族であることから、藤原氏勢力に入るであろうが、清河は752年に遣唐大使に任じられ唐に渡航していることから、この時日本におらず、日本の中央政府の政治に影響を及ぼしたとは考えにくい為、実質太政官に於ける藤原勢力は5人である。）太政大臣道鏡、左大臣藤原朝臣永手に次ぐ地位にある、右大臣吉備朝臣真備は、その出自が低く、天皇を止めるほどの確固たる基盤を持っていなかった。他には白壁王などの皇親勢力が3人といった具合であった。つまり、当時の太政官は複数氏族（勢力）による並立状態であったのである。その為、古代律令体制下に於ける象徴天皇制の欠陥に対する補完が働かず、称徳天皇という非象徴天皇が現れたのである。

7 称徳天皇に於ける非象徴天皇の例外性

ただ、称徳天皇は古代律令体制下に於ける象徴天皇制に例外として現れる非象徴天皇の中でも、特に専制性が高い。主に道鏡の人事がみればわかることである。いくら寵愛しているからといって、天皇に準ずる地位（法王）につけ、さらには彼を天皇にしようと試みるなど、とても律令体制下の君主とは思えない。

私はこのことを称徳天皇が天武天皇と同じような状態にあったからではないかと考える。先述した通り、天武天皇は律令体制を建設した人物である。その律令体制の建設であるが、そう容易なものではなかった。律令体制の根幹たる公地公民制は、当時政治を動かしていた大豪族たちの土地とその人民を収奪するものである。また、他にも律令は大豪族には都合の悪い点が多かった。これでは律令体制が実現するはずがなかった。けれども、天武天皇は律令体制を実現した。いったい何があったのか。壬申の乱があったのである。壬申の乱は、広く一般に知られている通り、天智天皇のあとを継いだ天智天皇の子である大友皇子を、天智天皇の弟である大海人皇子（天武天皇）が討ち、天皇位に即位した一連の内乱である。この乱は古代によくある皇位継承争い以上の意味を持った。あまりにも政治への影響が大きかったからである。確かに君主が変われば、政治が変わることは当然であろう。けれども、この時はいつもとは桁違いに違った。先述した通り、当時政治を動かしていたのは大豪族たちであった。ところが、その大豪族たちの多くが近江方（大友皇子方）についていたのである。もちろん

ん、近江方についたほとんどの豪族たちは没落した。そうなれば、天皇を妨げるものは何もない。こうして、天皇は天皇専制を確立したのである。そして、律令体制を建設したのである。私はこの時の天武天皇による天皇専制と称徳天皇による非象徴天皇は酷似していると考える。

称徳天皇も天武天皇と同じく内乱（恵美押勝の乱）後に即位している。そして、その結果、当時政治を動かしていたもの（恵美押勝）が没落した。やはり、両天皇とも武力によって確立した王権であることで、その権力を犯すようであれば武力行使も厭わないといったようなイメージを臣下たちに与えたのかもしれない。

称徳天皇の専制はあくまで、律令体制に則したものであるから、非象徴天皇である。けれども、やはり専制性が高い。ここには天武天皇と同じく、武力による王権というイメージがあったからだと私は考えずにいられない。

おわりに

奈良時代に於ける天皇制の推移よりわかるように古代律令体制下の天皇は太政官が弱ければ天皇権力は強く、反対に太政官が強ければ天皇権力は弱い。基本的には、このような法則性によって、古代律令体制下の天皇権力は推移したのである。この法則性を内包した古代律令体制は聖武天皇の治世から始まる基盤たる土地制度・公地公民制の崩壊及びそれに伴う武人階級の勃興という政情の不安定に、既存体制での対処が不可能となり、古代律令体制は院政の確立及び武家政権の樹立によって、完全に瓦解した。この時に内包する古代律令体制下に於ける天皇制の法則性も失われたと考えられる。故に、院政期の「治天の君」は古代律令体制下の天皇と比べて、はるかに専制的なのである。けれども、その専制権力も、承久の乱によって失われることとなるのである。しかしながら、天皇制はその後も大覚寺統と持明院統による両統迭立などの苦難を迎えるものの、しぶとく存立し続け、紆余曲折ありながらも現在まで続いているのである。

参考文献

- 今谷明『象徴天皇制の源流』（2011年/新人物往来社）
井上光貞『日本の歴史1 神話から歴史へ』（1965年/中央公論社）
直木孝次郎『日本の歴史2 古代国家の成立』（1965年/中央公論社）
青木和夫『日本の歴史3 奈良の都』（1965年/中央公論社）
北山茂夫『日本の歴史4 平安京』（1965年/中央公論社）
土田直鎮『日本の歴史5 王朝の貴族』（1965年/中央公論社）
竹内理三『日本の歴史6 武士の登場』（1965年/中央公論社）
児玉幸男『日本の歴史 別巻5』（1970年/中央公論社）
和田英松『新訂 官職要解』（1988年/講談社学術文庫）
井上光貞『日本思想体系3 律令』（1976年/岩波書店）
大津透『天皇の歴史1 神話から歴史へ』（2018年/講談社学術文庫）
「国史大系第9巻 公卿補任前編」JAPAN SEARCH <https://jpsearch.go.jp/item/dignl-991099>
(最終閲覧日令和3年11月3日)
日本史広辞典編集委員会『日本史広辞典』（1997年/山川出版社）
坂本太郎『日本史小典』（1990年/山川出版社）
旺文社『日本史辞典』（2002年/旺文社）
肥後和男『歴代天皇記』（1982年/秋田書店）
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋『日本書紀（一）』（1994年/岩波書店）
佐藤信『古代史講義【氏族篇】』（2021年/ちくま新書）
渡辺晃宏『日本の歴史04 平城京と木簡の世紀』（2001年/講談社）

はじめに

ソワソン管区（ソワソン王国）とは5世紀末、ガリア北部（現フランス北東部）に存在した軍事・行政領域である。西ローマ帝国から独立した軍人アエギティウスにより設立され、アエギティウスの息子シアグリウスの代まで継続した。西ローマ帝国の崩壊後はガリア最後のローマ人支配地として統治されていたがフランク族のクローヴィスに征服され、大陸におけるローマ人支配は終焉を迎えた。

独立初期

アエギティウスの時代はソワソン管区の草創期にあたる。彼はガリアのマグステル・ミリトゥム（軍管区長）としてガリア方面軍を率い、蛮族の侵入に対抗した。彼の時代は同時に西ローマ帝国の野戦機動軍（コミタテンセス）や地域守備軍（リミネタイ）が正常に機能していた最後の時代であった。

アエギティウスの時代

ソワソン管区を創始したアエギティウスは 393 年西ローマ帝国ガリア属州で誕生した。

出身地と息子の名前から彼の出身はガリア・セナトール貴族（ガリア属州の元老院貴族。属州の運営に大きく関与した）のシアグリウス家だと考えられている。後に西ローマ帝国有数の軍団指揮官となるアエティウスと同時期に帝国軍に入隊し、アエティウスを補佐した。また、当時の西ローマ軍団には後に皇帝となるマヨリアヌスや宰相として強権を振るウリキメルも在籍しており互いに親交を深めた。アエギティウスがマヨリアヌスとリキメルによる政治的な派閥において中心人物として遇されていたところからもそれは窺える。マヨリアヌスが西ローマ帝国の皇帝となった後にアエギティウスはその忠誠心の報酬として 458 年にガリアのマグステル・ミリトゥムに任命された。

同年に彼はテオドリック 2 世率いる西ゴート族をオルレアンの戦いで打ち破った。当時ヒスパニア（現在のスペイン）をローマから篡奪し支配下に置いていた西ゴート族は領地を西ローマ帝国に返還し再びの臣従を余儀なくされた。リキメルが 461 年にマヨリアヌス帝を暗殺し新たな皇帝としてリウィウス・セウェルスを擁立すると彼はリウィウス・セウェルスを認めず、当時支配していたガリア管区を率いてローマ帝国から独立した。

アエギティウスは、西ローマ帝国からの独立とガリア軍の保持を正当化するために、東ローマ皇帝レオ 1 世に直接忠誠を誓った可能性もある。

独立当初アエギティウスはイタリアの帝国政府に対して数回にわたりローマに進軍すると脅迫を行った。結局リキメルの妨害と西ゴート族からの圧迫を受けてイタリア遠征が実行に移されることはなかったものの近隣のフランク族の支持を得てアエギティウスの勢力は徐々に拡大した。

アエギティウスの独立後イタリア半島の帝国政府は彼をマグステル・ミリトゥムから解任し、アグリッピナスを後任として送り込んだ。アグリッピナスはナルボンヌを西ゴート族に、リオンをブルグント族に与えるなどして現地勢力の懐柔を図ったがいずれもアエギティウスの支配を覆すには至らなかった。

独立間もなくからアエギティウスはヴァンダル族のガイセリック王に反リキメルの同盟を組むことを目的として使節を送るなど外交面で精力的に活動した。

また、ガリア属州とおなじく本土からの補給が途絶え、蛮族の脅威に晒されているブリ

タンニア属州へは救援要請に応じて兵力を派遣した。ホノリウス帝の勅令以後ローマ軍が撤退していたブリタンニアは蛮族の中で孤立状態にあり、相互に助け合う同盟相手としてアエギティウスは理想的なリーダーだったのだろう。

それを象徴するようなアエギティウスとフランク族に関する逸話がある。アエギティウスがガリア属州に着任する以前にガリア北部の大部分を支配していたのはフランク族であった。当時のフランク族の王キルデリック1世は多情な男として有名であり、それを不満に思った家臣らにより国外に追放された。この時フランク族が次代の王として選出したのが他ならぬアエギティウスだった。8年後にキルデリック1世は呼び戻され追放先で得た妻との間にクローヴィスを得たという。これらの逸話はトゥールのグレゴリーの「歴史」や「偽フレデガリウス年代記」に詳しいが現在の研究ではほとんど架空のものと思われている。

アエギティウスは464年もしくは465年の後半にロワールで死去した。古代の歴史家は彼の死を暗殺としてとらえたが現代では自然死としてみる向きも大きい。キルデリック1世とアエギティウス、キルデリック1世とシアグリウスの関係は良好だったがクローヴィスは父親とは違う態度でもってシアグリウスとソワソン管区に臨み、これを手に入れた。

アエギティウスの子・シアグリウス

アエギティウスの後を継いだシアグリウスは父親の死後ソワソン管区とマギステル・ミリトゥムの地位を継承した。480年に西ローマ帝国の最後の皇位継承者であったユリウス・ネポス帝が暗殺されて以降は名実ともに大陸最後のローマ人統治者となった。486年、ソワソンの戦いでフランク族の若き王クローヴィスに敗れ西ゴート王国のアラリックの宮廷に逃げ延びるがほどなくして暗殺された。5世紀ガリアの司教であったシドニウス・アポリナリス（彼とシアグリウスの間には低くない確率で血縁関係があった）はシアグリウスを指して「ブルグント族中のソロン」と呼びその統治を讃えている。シドニウスはまたシアグリウスへの書簡で「ゲルマンの言葉をいつ覚えたのか」と書いてもおり、シアグリウスの管区支配が純ローマ的ではなくゲルマン民族への融和とともに行われていたことを示唆している。エドワード・ギボンが自著「ローマ帝国衰亡史」のVI巻でシアグリウスの統治について次のように触れている。

「ローマ人として彼は修辞学と法学との教養を身につけたが、偶然と政策のお蔭でゲルマンの言葉を楽に話すことも覚えた。独立の蛮族らは、彼らの土語で道理と構成との教えを説明するという不思議な才能を持つこの異邦人の宮廷に詰め掛けた。この判官はその勤勉さと愛想の良さで人気の的となり、その判決の叡智に富んだ公平さは蛮族の自発的服従を勝ち得て、かくてフランク族、ブルグント族に対するシアグリウスの統治は市民社会の本来の姿を復活させるかに見えた。」

彼は統治者としてドゥクス（dux）の称号を用い、あくまでも西ローマ帝国の一属州の代官としての立場を崩さなかったが周辺の諸部族からは「ローマ人の王」として扱われ彼の治めるソワソン管区はシアグリウスの「王国」として認知されていた。蛮族からの認識に反して彼は最後の正当な皇位継承者であったユリウス・ネポス帝の熱心な支持者であり同盟関係にあったフランク族のキルデリック1世が西ローマ帝国を崩壊させたオドアケルと同盟すると関係を解消した。キルデリック1世との同盟関係を解消した後は西ゴート族と結んだ。父親同様シアグリウスも東ローマ皇帝に使節を送ったが当時の東ローマ皇帝がオドアケルの支配を承認してからは表立って関係を持つことは無かった。シアグリウスがソワソン管区を継承した時既に大陸の帝国政府はガ

リアに派兵できるだけの影響力は有しておらず、双方ともに接触を図ることは無かったと考えられる。

486年に起こったソワソンの戦いはクローヴィスの率いるフランク族の圧倒的な勝利に終わった。クローヴィスは当時21歳になったばかりの若年王であったが小王国に分立していたフランク族領から6000の兵を徴収し、「日時と場所を指定して」シアグリウスに宣戦を布告した。

当時のソワソン管区はその規模こそフランク族領と同等であったが戦力に関してはかつてカエサルが駐留していた時代のそれと比べるべくもなかった。

ソワソン管区は精強さで知られたガリア方面軍管轄域に位置しており、少なくともアエギディウスの時代には西ローマ帝国軍有数の精鋭部隊を擁していたことは間違いない。だがそれがシアグリウスの時代まで十全に機能していたかについては疑問が残る。蛮族の襲撃は年を追うごとに激しくなり、帝国政府からの補給は無く、当時精鋭だった兵士たちも次々に退役していく。管区の戦力は次第に正規訓練兵の軍団から退役兵、逃亡兵、難民、傭兵らを中心とした練度の低い寄せ集めの集団に変わっていったことだろう。末期にはフォエデラティ（蛮族同盟）からの傭兵を戦力に数えざるをえなくなっていたことからそれは窺える。

肝心の戦いの詳細は今なお明らかでないがソワソン管区の軍団がフランク族の戦士たちに決定的な敗北を喫したことは確かなようだ。敗北後シアグリウスは管区から約780 km離れたトゥールーズの西ゴート王の宮廷まで逃げ延びた。当時の西ゴート族は先代のエウリック王からアラリック二世に代替わりして間もなくクローヴィスの追求からシアグリウスを保護することは難しかった。結局シアグリウスはソワソンのクローヴィスの下へと引き渡された。トゥールのグレゴリーによると彼は487年、ソワソンの獄中で暗殺された。

おわりに その後のソワソン管区

シアグリウスの死後管区の領域は征服者のクローヴィス1世（クローヴィス）によって統治され、ソワソンはフランク王国の主要都市のひとつとして発展した。511年に彼が亡くなるとフランク王国はクローヴィス1世の四人の息子たちによって四つの王国に分割された。旧ソワソン管区を含むネウストリア王国を継承したのはクロタール1世だった。ソワソンの戦いの十年後にソワソンで生まれた彼は親譲りの巧みな外交手腕と戦争の指揮能力を遺憾なく発揮して558年に全フランク王国を統一した。クロタール1世は561年に死去したときフランク王国は再び分割され、最終的にアウストラシア（東方の土地）、ネウストリア（西の土地）、ブルグンディア（ブルグントの土地）の三王国が鼎立した。ネウストリア王国の王都はソワソンに置かれ、613年にクロタール2世がフランク王国を再統一するまでの間隆盛し続けた。

参考文献

塩野七生 「ローマ人の物語 ローマ世界の終焉」(2006年/新潮社)

椿悠紀子「西ヨーロッパ世界形成史；主婦の一考察」(2009年/ぶんしん出版)

トマス・クローウェル 蔵持不三也訳「図説 蛮族の歴史～世界を変えた侵略者たち～」(2009年/原書房)

ヘンリー・R・ロイン 「西洋中世史事典」(2006年/東洋書林)

南川高志「歴史の転換期2 378年 失われた古代帝国の秩序」(2018年/山川出版社)

エドワード・ギボン 朱牟田夏雄訳「ローマ帝国衰亡史」V,VI巻(1988年/筑摩書房)

「Syagrius」 Wikipedia <https://en.m.wikipedia.org/wiki/Syagrius> (最終閲覧日 2021 年 10 月 29 日)
「キルデリク (†481) とクローヴィス(†511)—歴史叙述、考古学、文書作成—」 九州
大学文学部・大学院人文科学府 西洋史学研究室
https://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~his_west/siryu_ron/housoku_syo_/1-3.dirukensu.pdf (最終閲覧日 2021
年 10 月 29 日)

「Reich-von-Soissons」 Wikipedia
https://de.m.wikipedia.org/wiki/Reich_von_Soissons
(最終閲覧日 2021 年 10 月 29 日)

「初期フランク王国におけるローマ人貴族」 一橋大学研究機関リポジトリ
https://repositry.kulib.kuotou.ac.jp/dspace/bitstream/2433/238095/1/shirin_055_5_612.pdf
(最終閲覧日 2021 年 10 月 29 日)

「ブルンヒルド」 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/ブルンヒルド> (最終閲覧日 2021
年 10 月 29 日)

「フォエデラティ」 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/フォエデラティ> (最終閲覧日
10/29)

「偽フレデガリウス年代記」 Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/> (最終閲覧日 2021 年
10 月 29 日)

「Afranius-Syagrius-Aegidius」 Geni
<https://www.geni.com/people/Afranius-Syagrius-Aegidius/6000000003828196377> (最終閲覧日 2021 年
10 月 29 日)

「Syagria」 Geni
<https://www.geni.com/people/Syagria/600000000424703643> (最終閲覧日 2021 年 10 月 29 日)

ハンニバル・ノウァ ～ハンニバル・バルカの人生を添えて～

43R 大内和音

かつてローマは史上最大の帝国を作った。それは世界を震撼させ、地中海世界を作り、たとえ東西に分裂しても、コンスタンティノーブルが陥落するまで、1000 年以上にわたってその存在を世界に知らしめた。しかし、ローマは一日にして成った訳ではない、ローマはたくさんの危機を乗り越え、成長していった国なのである。それらの危機の中でも、ローマを滅亡寸前にまで追い込んだ最大の危機、それが今第二次ポエニ戦争である。そして、その戦争はたった一人の男によって引き起こされた。その男こそ、今回の主人公ハンニバル・バルカであった。

ハンニバルについて説明する前に、ローマとカルタゴの関係についてまず触れておく。

ローマは当初、小さな都市国家に過ぎなかった。周囲を敵国に囲まれ、戦争に明け暮れ、戦争を繰り返す、少しずつ成長し、次第に周囲を圧倒する存在となり、でも内紛も抱えつつ、だがそれにもめげず、ただただ半島統一に生命を懸けた。

その末に紀元前 270 年ごろ、ローマはイタリア半島を統一。その圧倒的な軍事力はそのときすでに他国をおおいに凌いでおり、特に重装歩兵は世界一とも称された。多大な血と汗を流しつつ半島の統一を成し遂げたローマは、次に地中海の沿岸の征服に乗り出す。その最初の相手が、当時地中海を根城に繁栄を築き、強力な海軍力を持っていたカルタゴという国であった。

ローマとカルタゴは性格が違う異なる国である。カルタゴが商業国家であったのに対してローマは農業国家であり、カルタゴが海軍中心であったのに対してローマは陸軍中心であり、傭兵からなるカルタゴ軍に対してローマ軍は貴族が中心であり、あらゆる面でライバルといえる関係であって、この二国が地中海世界の覇者であった。両国とも互

角ともいえる国力であり、この二国の戦争は、時間がたつにつれ避けられないものとなっていった。

～第一次ポエニ戦争～

徐々に緊張が走る両国は地中海の真ん中にあるシチリア島を巡って対立を深めていくことになる。シチリア島はイタリア半島の近くに位置する地中海の島で、古来より地中海の要であった。シチリアはローマのすぐ近くであったが、海を隔てており、海軍を持たないローマはこの島を手に入れることができず、逆に海軍力に優れるカルタゴの影響力のほうが大きい島であった。

前288年、そのシチリア島に突如内乱が勃発した。シチリア島の自治都市シラクサはローマ、カルタゴ両国に救援要請を送る。ローマに先んじて、強力な海軍力を誇るカルタゴはシチリアに軍を投入、それを見て、カルタゴがシチリアを取ることを懸念したローマもこれまた軍を派遣、両国が互いに軍を派遣しあい、シチリアにはローマとカルタゴの二国の軍が集結、必然的に戦争に発展した。

当初は全く海軍を持たなかったローマだったが、戦争の勃発と同時に海軍を編成、さらにはカラス装置を戦艦に搭載、装備の充実により、一転して海戦に優位に立つと、たちまちシチリア周辺を席卷、制海権を失ったカルタゴはシチリアを維持することができず、20年に及んだ戦いの末にローマに敗れた。

この戦いでひととき目立っていたカルタゴの将軍がいた。名前はハミルカル・バルカという。彼は劣勢であった戦争の終盤に現れ、シチリア島のカルタゴ陸軍において連戦連勝、シチリアのほとんどを征服する活躍を見せた。結果的に海軍が壊滅したために、ハミルカルは補給が途絶え、ローマに降伏せざるを得なかったものの、この第一次ポエニ戦争において、ローマに多大な恐怖を与え、「バルカ家」という一族の強さ、恐ろしさを地中海に知らしめた。

ハミルカルは第一次ポエニ戦争後、再びローマと戦い、勝つことを夢見て、当時未開であったイベリア半島を開拓、これをバルカ家の根城とし、戦力の強化を図った。そして息子に、「ローマを一生の敵とし、これを滅ぼす」ことを誓わせた。その息子の名は、ハンニバル。

ハミルカルの死後は、弟のハスドルバルが地位を継承、彼もまたイベリア半島を開拓、多くの民族を従え、イベリア半島でのバルカ家の勢力を盤石のものとした。ハスドルバルの死後、跡を継いだのはハンニバルだった。

～ハンニバル戦争 序章～

ハスドルバルの跡を継いだハンニバルは26歳という若さで将軍に任命され、イベリア半島の全軍を率いる元帥となった。跡を継いですぐ、兵力の充実を図り、ローマとの戦争に備えた。

ハミルカルが死に、ハスドルバルを経てハンニバルが後を継いだ頃のローマは、第一次ポエニ戦争のころとは全くの別物であり、その勢力はカルタゴを大きくしのぐものであった。ローマは地中海を支配し、かつて最強とうたわれていたカルタゴの海軍も、ローマ海軍に遠く及ばないものとなってしまった。

そのローマに対し、紀元前218年、カルタゴは突如攻撃を開始した。ローマ方のイベリア半島北部の都市をハンニバルが攻撃、占拠したのである。第二次ポエニ戦争、いわゆるハンニバル戦争の幕開けである。報告はすぐさまローマに飛んだ。ローマは即座に軍の派遣を決定、その指揮官に名将であり、経験豊富なプブリウスニコルネリウススキピオが選ばれた。

P.C.スキピオはすぐさま海岸沿いをローマからイベリアへと進撃を開始した。ところが途中のガリア(今のフランス)に差し掛かったとき、奇妙なものを見つけた。軍の通っ

た跡があったのである。調べの結果それはカルタゴ軍のものだとわかった。そのことにP.C.スキピオを含むローマ軍は驚愕した。ローマは、「カルタゴ軍がイベリアのローマ方の都市を攻撃している」という報告しか聞いていなかったからである。イベリアからずっと遠いガリアの地にカルタゴ軍がいるはずがない。全く信じられないことだ。

実は、ハンニバルはイベリアのローマ方都市をあっという間に落としていた。そしてすぐさまローマに向けて進撃していた。それはローマ軍が全く予想できないスピードであった。このとき、まだローマにハンニバルの名は知られていない。

P.C.スキピオは即座に追跡を決定、カルタゴ軍の後を追う。追跡するにつれ、カルタゴ軍はガリアの北に向けて進んでいることが分かってきた。それはローマから遠ざかる動きであり、「カルタゴ軍はガリアの海沿いを通してローマに進撃しようとしているのでは」と思っていたローマには一切理解不能な行動であった。

カルタゴ軍はいったいどこに行くのだろうか。そもそもカルタゴ軍はどこにいるのだろうか。ローマの誰にもそれはわからなかった。いや、違う。一人だけカルタゴ軍の動きを読んでいたローマの将軍がいた。それが先に登場した名将 P.C.スキピオであった。

どこにいるのかわからないカルタゴ軍、その動きを唯一よんでいたP.C.スキピオ、突如現れたハンニバルという若い将軍、そして彼の前をふさぐローマの歴戦の大將軍たち、それに勝つためのハンニバルの包圍殲滅戦術、史上最大の包圍殲滅作戦カンネーの戦い、そして登場するプブリウス=コルネリウス=スキピオ=アフリカヌス、まだまだハンニバル戦争は始まったばかりである。

～終わりに～

ハンニバルの世界史に及ぼした影響は計り知れないものであった。ローマの矛と呼ばれたマルケッルス大將軍をいとも簡単に殺し、ローマの盾と呼ばれたファビウス・マクシムス独裁官を出し抜いてローマ人を恐怖のどん底に陥れた。次第に劣勢に陥るカルタゴ軍を最後まで支え、負けるとわかっていてもザマの最終決戦に打って出た。彼は膨張を遂げるローマに抗い、これを追い詰めた唯一の人物であり、彼は今でもローマの人々の心に、英雄として、また恐怖の代名詞として刻まれている。

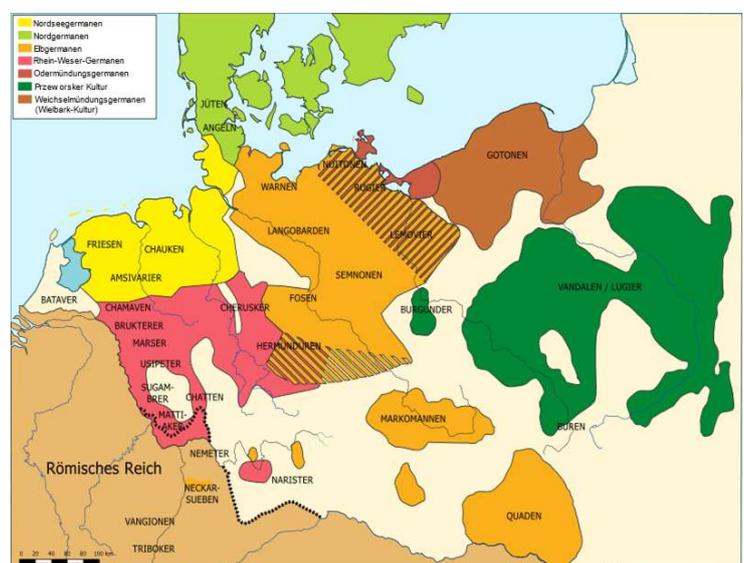
~~編集長の恣意的な事情により、この記事は途中で中断せざるをえなかった。これを書いている今も、隣に見張りがいる。大変申し訳なくも、どうかこの恐怖、ご理解して頂きたい。(編集長による校閲済み)~~

日本が奈良時代の時のヨーロッパ

16R 梅元総介

日本が奈良時代の時、ヨーロッパは主に中世であった。前期は民族大移動などで国家としてのまとまりが変動的である。ここで言う民族とはゲルマン民族で、スカンジナビア・デンマーク南部地帯に居住していた、インド・ヨーロッパ語派、ゲルマン語派に属する言語を母語とする諸部族・民族である。

奈良時代に作られた和同開珎は主に銀と銅であり、銅だけではなかったことがわかっている。また、和同開珎は富本銭の発展形で、唐の銭貨



をもとにしてつくられた。発行に至るまでが早かったのは銀の通用の伝統があったからだと思われる。

参考文献

矢部健太郎 『日本の歴史大事典』（2015年/西東社）

中世史

編集担当 生嶋文敬

この章は、部員が各々で研究して執筆された論文の中で、主に中世史の論文を集約したものである。中世史の期間は様々な学説があるが、ここでは日本史の場合は院政期から戦国時代までの期間、東洋史の場合では魏晋南北朝時代から唐末期までの期間、西洋史の場合は西ローマ帝国滅亡から東ローマ帝国滅亡までの期間とする。

中世史は伝統風俗の根本となるものが出来た時代である。ゆえに、中世史から学ぶものは多いと思う。

目次

武田信玄……………	p88	58R	関口和史
九鬼嘉隆……………	p90	53R	大沢和嵩
前田利家の生涯……………	p93	57R	坂本宇瞭
コラム 承久の乱……………	p94	16R	小畑陽輝



宮内庁三の丸尚蔵館所蔵『蒙古襲来絵詞』

肥後国御家人竹崎季長が元寇での自らの勇敢な戦いぶりを描かせたもの。元寇において、多くの御家人が恩賞を受け取ることができなかったが、彼はこの絵を証拠とし、恩賞を受け取ることができた。

はじめに

織田信長と直接的な関係があまり知られていない、武田信玄とその関係について紹介していこうと思う。

1 甲斐の虎、生まれる

まず、武田信玄がどのような人物で、どんな人生を送ってきたのか見ていく。

武田信玄は1521年、積翠寺で生まれた。幼名は太郎といい、後に晴信(十二代将軍の足利義晴から一文字賜った)、信玄となった。しかし、父武田信虎には嫡子であるのにもかかわらず、なぜか好かれず弟の武田信繁ばかりかわいがっており、信虎は、家督を信繫に継がせるつもりであった。信虎は、戦ばかりで農民のことには目もくれず、しまいには意見しようとする家臣には容赦なく切り殺す有様だった。この現状を知っていた晴信は、家臣と共に信虎を追い出そうとしていたが、晴信は父の信虎と争いたくなかったため今川義元の協力のもと、追放に成功した。ここで、普通なら弟の信繁と家督争いをしてお家騒動となるところだが、信繫は元々晴信を慕っていたのでそのようなことにはならなかった。もし、この追放劇が成功していなかったら戦国時代における大大名となっていなかったであろう。そして、晴信は21歳で武田家頭首となった。

2 政治と戦の二刀流

武田信玄は、戦上手というイメージが強いと思うが、政治においても素晴らしい改革を行っていた。有名なものをいくつか紹介しよう。甲斐の国は、川がよく氾濫しており田畑に被害をもたらしていた。御勅使川を二つに分けて、釜無川と合流するところの氾濫を抑える信玄堤を建設した。また、今川仮名目録を参考にして甲州法度を定めた。これは、家臣達を縛るだけのものではなく晴信自身にも枷を付けた。

3 晴信の快進撃と敗戦

晴信は、戦においてもなるべく血を流さないようにしていた。1542年に義理の弟である諏訪頼重を攻めるために、桑原城を攻め落とした。(降伏)その年の九月には、諏訪を共に攻め落とした高遠頼継が裏切り、諏訪法性の御旗を掲げて戦いをして圧勝したため、のちの戦ではこの御旗を先頭で掲げるようになった。翌年、信濃一の美女とうたわれていた諏訪頼重の娘の諏訪姫を側室に迎えたが、皮肉にも正室三条公頼の嫡子より諏訪姫との子供である四郎(勝頼)を可愛がった。その後も、信濃の豪族に次々と戦いを挑んだ。1543年には大井貞隆の長窪城を攻め、1544年には藤沢頼親の伊那荒山城を苦戦しながら勝利し、一度晴信に敗れた高遠頼継を攻め、1545年に大井貞清の佐久内山城を攻略した。そして、晴信にとって初めての敗戦の時が訪れる。1548年に村上義清を討つために、北信濃に向かう。しかし、挟み撃ちにあっけしき重臣板垣信方、甘利虎泰を失ってしまった。(結果二度村上義清に敗れる。)この時、村上義清と並ぶ豪族の小笠原長時は機会だと思い武田軍を攻めるが、大敗した。1553年に三度目の正直でやっと勝利した。

4 川中島の戦い、開戦

このように、晴信に敗れた武将達は上杉謙信を頼りに越後へと逃れていく。これが、かの有名な甲斐の虎と越後の竜がぶつかった川中島の戦いである。そして、この戦いに専念するために、今川と北条と武田の強固な三角同盟を結び、川中島との距離を縮めるために棒道を作った。こうして、川中島の戦いは始まった。この川中島の戦いの間に、生母の大井夫人、諏訪姫が亡くなり晴信は出家して信玄を名乗るようになった。ちなみ

に、信玄は孫子の書物をよく読んでいることでも知られており、『風のように早く、林のように静か、火のように侵略し、山のごとく動じない』風林火山を取り入れたのもこのころだと、言われている。第四回の川中島の戦いでは信玄が山本勘助発案のキツツキ戦法という挟み撃ち作戦を執行しようとしたが、謙信に裏をかかれてしまい武田本陣に切り込まれてしまう。川中島の戦いの勝敗は引き分けとされている。

5 その後の武田家と信玄の最期

そして、桶狭間の戦いで織田信長に今川義元は討たれてしまい、跡を今川氏真が継いだ。戦に慣れていない氏真は直ぐに信玄に駿府城を攻め落とされてしまった。しかし、妻が今川出身だった信玄の長男の義信は反対したが叶うことはなかった。のちに、義信は死んでしまったが、その原因は病気や、自殺ともいわれている。次に、北条家を攻めようとしたが中々戦況が変わらなかったで引き返そうとした武田軍に、待ち伏せしていた北条軍を挟み撃ちにして大勝した。このころから、信玄の胸の病気が目立ち始めた。1572年に、京都を目指していると信長と同盟関係にあった家康と戦った、三方ヶ原の戦いで圧勝した。その勢いで三河の野田城をせめようとしたが、寒い中の連戦で病状が悪化してしまったので、秘密裏に甲斐に帰ることとなった。そして、武田信玄は、伊那の駒場で『自分の死を三年間秘密にして、遺体は鎧をつけて諏訪湖に沈めよ』という遺言を残して1573年(天正元年)4月12日、53歳の生涯を閉じた。

6 信長と信玄の関係

それでは、信長と信玄の関係を見ていこう。

まず、信長は信玄と対立する前は、友好関係を築こうとしていたと思われる。なぜなら、信長の姪に当たる遠山直廉の娘を武田勝頼に嫁がせることで、友好関係を結んでいる。さらには、上杉と武田の和睦の仲介を足利義昭と共に、信長が行った。では、なぜこの友好的な関係が破綻してしまったのか？私は、ここには宗教が絡み合っていると思っている。そのきっかけは延暦寺の焼き討ちである。信玄は仏教徒で出家もしている身なので、この信長の行為が許されるはずもなく、信長はキリスト教を保護していたので対立してしまった。前述したとおり、信玄は野田城攻めの直後に亡くなっている。これは偶然の出来事なのだろうか？確かに、体が弱っていたこともあるだろう。しかし、それははっきり『たまたま』と言いきれるだろうか。ここでは、信長が信玄に対して暗躍していた説を訴えていきたいと思う。先ほどの説明にあるように、信長はキリスト教を保護していた。ということは、日本にはないお菓子や着物などを持っていたことではないだろうか？そうした中に毒薬を大量に持っていたとしてもおかしくはない。信玄には元々持病があり、たくさんの薬を持ち歩いていたということが分かっている。そこにこっそりと信長の間者が毒薬を潜ませておけば難なく強敵信玄を葬ることができるのである。さらに、イエズス会からの目線で考えてみると、イエズス会の思想は全世界にキリスト教を広めることであるため、日本で布教するには仏教が邪魔になってくるのだ。そうすると、キリスト教に対して理解のある信長に布教の許可をもらう代わりに武器などを贈呈するという交渉などをする中で味方につけて、仏教の頂点の職である大僧正についていた信玄を殺し、比叡山延暦寺を焼き払い、石山本願寺との石山合戦をしたのも腑に落ちる。また、信玄と同じように恐れられていた上杉謙信も都合よく死んでいる。謙信も出家している身なので信玄と同じ事例だと推測することができる。

終わりに

上のように、歴史上の出来事を一つとっても、このようなことが起きていたのではないかという説を唱えることもできるのだ。私のように、歴史を知り、考察し、楽しむことも歴史の醍醐味の一つと言えるでしょうから、ぜひ皆さんもいろんな物事に対して様々

な視点を持って、楽しんでください。

九鬼嘉隆

53R 大沢和嵩

はじめに

今回の執筆にあたり織田信長に仕えた武将で僕の頭に真っ先に浮かんだのが後に「海賊大名」と呼ばれた九鬼嘉隆である。織田信長最強の水軍として名高い九鬼水軍を率いた九鬼嘉隆の生涯を見ていこう。

1. 流浪の身へ

天文 11(1542)年、九鬼嘉隆は九鬼水軍の当主・九鬼定隆の三男として志摩国英虞郡波切城で生まれた。当時の志摩国は、13人の地頭たちが割拠していて、定隆は地頭の一人として、英虞郡の波切城と答志郡の田城城の二つの城を持っていた。

天文 20(1551)年、嘉隆が十歳の時に定隆が亡くなり、九鬼氏の家督は長兄・浄隆が継いだ。

永禄 3年(1560)年、九鬼家以外の地頭 12人が伊勢国司・北畠具教の援助を受けて田城城を攻めた。九鬼家は地頭 13人の中で最も勢力が多かったため狙われたのである。浄隆と嘉隆は田城城に籠城するが籠城中に浄隆が病死(討死説有り)してしまい、当時 8歳だった浄隆の子・澄隆を当主に据えるも若い当主への不安で戦意が上がらない九鬼勢は敗退。嘉隆ら残党は朝熊山へ逃亡した。



2. 織田家の家臣としての活躍

流浪の身となった嘉隆らは織田家臣・滝川一益の誘いを受け列に加わる。すると、永禄 12(1569)年の伊勢攻略に水軍を率いて参加し、北畠具教の居城である大淀城を陥落させるなどの活躍を見せ、正式に織田家の家臣となった。

その後、嘉隆は志摩国の攻略を行い因縁の敵である志摩の地頭らを次々と屈服させていき、かつての居城である田城城を奪還した。そして、志摩国を平定した嘉隆は信長から志摩国の統治と九鬼氏の家督相続が認められ嘉隆は九鬼氏の第 8代当主となった(信長が家督を継ぐよう命じたとされているが、信長没後の天正 11(1583)年に澄隆を殺害して家督を奪ったという説もある)。

天正 2(1574)年には信長が伊勢長島の一向一揆を鎮圧する際、海上から射撃を行って織田軍を援護し、一向一揆鎮圧に尽力した。その後、一向一揆の総本山である石山本願寺に攻勢を強めると、天正 4(1576)年に摂津国木津川沖で嘉隆ら織田水軍



と石山本願寺側に付いた毛利水軍(村上水軍も参加)が海戦に及んだ(第一次木津川口の戦い)。毛利水軍ら 600 隻に対し、300 隻の船を率いて挑んだ嘉隆ら織田水軍だったが、毛利水軍らの焙烙玉や火矢に多くの船を焼かれて大敗を喫する。この敗戦に激怒した信長は、嘉隆に燃えない船を造るよう命じた。

この船がかの有名な「鉄甲船」である。鉄甲船は大型の安宅船に鉄の装

甲が施されたものと考えられていて、『多聞院日記』には長さが 12.3 間(約 21.8～23.6m)で、幅は 7 間(約 12.7m)、乗船した人数は 5000 人だったと書かれている。さらに、最新鋭の大砲を 3 門装備していたといわれている(鉄甲船は現物が残っておらず、史料の記述も少ないため存在を疑問視する声がある)。嘉隆はこの鉄甲船を 6 隻建造した。

天正 6(1578)年、本願寺の海上補給ルートを遮断すべく嘉隆ら織田水軍は再び毛利水軍らと対峙した(第二次木津川口の戦い)。毛利水軍らは小回りが利かない鉄甲船を取り囲むようにして攻めるが、鉄甲船は焙烙玉や火矢を寄せ付けない。そして、嘉隆ら織田水軍は毛利水軍らを間近に引きつけ、毛利方の大将の船らしいのをねらって大砲で打ち崩す作戦をとったところ、戦況が悪くなった毛利方は退却した。こうして嘉隆ら織田水軍は大勝利を納めた。この戦功によって嘉隆は信長から志摩に加え、摂津野田・福島などを与えられて 7000 石を加増され、合計 3 万 5000 石を領する大名となった。なお、この戦い以降石山本願寺は毛利氏より海路による物資供給を受けることができなくなり、本願寺頭如は 2 年後に織田信長に降伏するのである。

3. 豊臣秀吉の元、日本水軍総大将へ

天正 10(1582)年、信長が本能寺の変で討たれると嘉隆は織田信雄に仕えた。しかし、天正 12(1584)年の小牧・長久手の戦いの際に滝川一益の誘いによって羽柴秀吉陣営に寝返る。そして、伊勢国の松ヶ島城の海上封鎖や三河国沿岸の襲撃、蟹江城合戦に参加し、功績を積み上げていった。天正 13(1585)年には、従五位下大隈守に任官しており、国政規模で秀吉から厚遇されていることがわかる。嘉隆は、天正 15(1587)年の九州平定、天正 18(1590)年の小田原征討に豊臣水軍の頭領として参加している。

天正 20(1592)年、秀吉が朝鮮出兵に乗り出す(文禄の役)と、嘉隆は村上水軍の村上武吉を差し置いて総員 9000 名を指揮する水軍総大将に命ぜられる。ここに至って、嘉

隆は正式に日本水軍総大将となったと言える。嘉隆は慶長の役には出陣せず、慶長2(1597)年に家督を嫡男・守隆に譲って隠居した。

4. 嘉隆の最期

慶長5(1600)年、関ヶ原の戦いが起こると、嘉隆は西軍、守隆は東軍に属した。これはどちらが敗れても九鬼家を存続させるための嘉隆の戦略だったという。嘉隆は守隆が徳川家康に従って会津征討に赴いている隙を突き、堀内氏善らと共に守備が手薄になっていた鳥羽城を奪取。さらに、伊勢湾の海上封鎖を行い、安濃津城の戦いの勝利に貢献するが、本戦で西軍が壊滅すると鳥羽城を放棄して答志島に逃亡した。そして、九鬼家の行く末を案じた家臣の豊田五郎右衛門が独断で嘉隆に切腹するよう促し、これを受け入れた嘉隆は和具の洞仙庵で自害した。享年59。

一方で守隆は徳川家康と会見して父の助命を嘆願した結果、嘉隆の命だけでなく、当初の約束であった南伊勢五郡20000石の加増を守隆に約束。守隆は急ぎ、その朗報を知らせる急使を鳥羽に出した。

急使が伊勢・明星の茶屋に着いた際、嘉隆の首を守隆に届けようとする豊田の使者と出会う。独断で動いた豊田五郎右衛門に守隆は激怒し、豊田五郎右衛門を堅神の地において鋸引き(のこぎりびき)と言う、当時最も罪が重いとされていた「主殺し(主君殺し、父親殺しも含む)」を犯したものに適用される、戦国時代一番残忍な極刑に処した。

嘉隆は和具の洞仙庵にて自決の際「自分の首は山頂に掲げよ。死後も徳川を恨める。」と言い残したと言われ、九鬼嘉隆の首塚は今も和具の築上山頂にある。

おわりに

九鬼守隆は関ヶ原の戦いの後2万石を加増され、大坂の陣でも戦功により1,000石が加増され5万6,000石の大名となった。しかし、寛永9(1632)年に守隆が死去すると五男の九鬼久隆と三男の九鬼隆季との間に家督争いが起こり、九鬼氏は摂津三田藩3万6,000石と丹波綾部藩2万石に分割移封され、歴代の所領である志摩を失った。

その後、鳥羽藩は、内藤氏、土井氏、松平氏、板倉氏など目まぐるしく藩主が交代した後、享保10(1725)年より稲垣氏が8代にわたり藩主家に定着、幕末を迎えた。九鬼水軍の本拠であった鳥羽城も歴代藩主家に受け継がれた。

幕末の鳥羽藩士であった近藤真琴先生は、文久3(1863)年に四谷坂町鳥羽藩中屋敷の自宅に攻玉社の前身となる蘭学塾を開設するとともに、幕府の軍艦操練所に出仕、明治2(1869)年には新政府の築地海軍操練所(後の海軍兵学校)に出仕した。そして、故郷の鳥羽にも明治14(1882)年攻玉社分校として鳥羽商船黉を創設、現在も鳥羽商船高等専門学校として存続している。九鬼嘉隆の創始した九鬼水軍の伝統は、鳥羽藩出身の近藤真琴先生により受け継がれたといえるのである。

参考文献

『九鬼嘉隆』志摩の海賊大名！ 流浪の身から一国の主へ」戦国ヒストリー
<https://sengoku-his.com/748> (最終閲覧日 10月29日)

「九鬼嘉隆～九鬼水軍を率いた織田家・豊臣家の水軍大将」戦国武将列伝Ω
<https://senjp.com/kuki/> (最終閲覧日 10月29日)

【「麒麟がくる」コラム】織田信長が大坂本願寺攻めで用いた九鬼水軍の鉄甲船と

はどんな船なの」YAHOO!ニュース

<https://news.yahoo.co.jp/byline/watanabedaimon/20210128-00219693> (最終閲覧日 10月29日)

参考資料

資料1:九鬼嘉隆の肖像画

「信長に頼られ家康に恐れられた海賊大名」年表で見る戦国時代
<http://hoshinoufo2.blog.jp/archives/23010930.html> (最終閲覧日 10月29日)

資料2:鉄甲船CG

「【淡輪沖海戦】信長の巨大鉄甲船団 初陣！」戦国バトルヒストリー
<https://www.sengoku-battle-history.net/tannowaoki> (最終閲覧日 10月29日)

前田利家の生涯

57R 坂本宇瞭

はじめに

前田利家という人を知っているだろうか。歴史に興味がない人は誰だろうか、となるかもしれない。政治家？農民？船乗り？いいや、違う。この人は戦国武将だ。戦国武将と聞いて、ああとなるかもしれない。最近では、様々なゲームで出てくるはずだから。でも皆が知っているのは、武田信玄とか、徳川家康とかだろう。しかし、なんと前田利家は徳川家康と対等に張り合った偉人なのだ。少しは興味も出てきてくれたらだろうか。それでは、戦国の動乱とロマンを楽しんで行ってください。

一、前田利家

前田利家は、槍の名手であり、槍の又左という異名を持った。彼は、気性が荒く、喧嘩っ早い性格であったが、同時に頭脳明晰であった。読み書きそろばんをやった人もいるかもしれないが、そろばんが初めて伝わった時ただ一人、それを理解し、使いこなしたといわれる。

また、非常に肝が据わっていて、ただ一人敵陣に突っ込み、敵将を討ち取ったこともあるという。信長も私と同じことを思ったようで、(僕が信長と同じことを思ったのか?)『肝に毛が生えたやつ』といわれたという。このように頭もよく、度胸もあった彼だが、(この時点で強いのに)情にも熱かった。一度大事にしていた父の形見を信長が大事にしていた小姓に隠されたときは、その小姓を斬り殺した。それで信長に追い出されてしまったのだが、何度も武功をたて、ついに家臣に戻ったのだ。

このように、前田利家は、忠義心が強く、頭脳明晰で、度胸があり、槍の名手だ。また、はっきり言ってこれはあまりにも褒めすぎのような気がするが、どこを調べても大して欠点らしい欠点もないし、だからといって粗探しするのもなんか人間的になんかあれなので、とても良い武将だったのだろう。

二、戦国の終わりの始まり

さて、前述したとおり、前田利家は織田信長の家来だったわけだが、ここで輝玉祭という、面白い(?)文化祭に来てくれた人ならわかると思うが、織田信長と言えどもまずであるであろうことは、明智光秀の「敵は本能寺にあり」で有名な本能寺の変だ。本能寺の変は、どうでもいい一つの出来事のように見えるかもしれないが、実は歴史の表舞台から織田信長が退場し、豊臣秀吉に主役が変わった重大な事件なのだ。この後、裏切り者の明智光秀を誰が討つかで、誰が織田信長のつぎに主役になるのか変わった。そして、山崎の戦い(これもマイナーだが、大事だ。なぜなら、くどいようだ

が、この戦いで誰が出てくるかで、歴史が変わったからだ。)で、残念ながら、我らが前田利家は、上杉謙信とはるか遠くで戦っていたため。間に合わず、豊臣秀吉が明智光秀を討ち取った。

これによって、誠に残念ながら次の主役は豊臣秀吉になり、前田利家は支える側になることが確定した。彼は頭がよかったが、運が向いていなかったのか、チャンスを活かすことができなかったのだ。運も実力の内だ。残念だ。

三、そして再び時代は動く

そして前田利家に再びチャンスが巡ってくる。豊臣秀吉が死んだのだ。秀吉は、死ぬ前に 五大老五奉行、というものを決めていた。そしてその 五大老五奉行 の中でも特に、大きな働きをしたのは 徳川家康と前田利家だった。のちにこの2人が、この中でも特に、大きな実力者となっていく。そして秀吉は秀頼を頼むという遺言を残して死んだ。だが、秀吉が死んだことで徳川家康が黙っていることはなかった。早速家康はこれ、幸いとばかりに、戦争の準備を始めたが、前田利家がこれを取りなし、和解をして一時的に戦争は回避された。なぜならこの時前田利家と徳川家康は互角であり、徳川家康にとって前田利家は目の上のたんこぶのような存在であったからだ。そして利家は家康のことを警戒したまま、豊臣の世が続くことを信じて静かにこの世を去った。前田利家がいなくなった後、邪魔な存在が消えた徳川家康は豊臣秀吉の遺言を裏切り、天下分け目の戦いと呼ばれる関ヶ原の戦いを起こすことになる。前田利家が死ぬまで願っていた豊臣秀吉の天下は、皮肉にも、前田利家が死ぬことによって崩壊し 徳川家康が豊臣秀吉の後を継いで、平和を築いた。戦国のような人たちが願っていた平和は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康 と引き継がれ、徳川家康によって戦国の争乱は終わりを迎えたのだ。

まとめ

いかがだったでしょうか。戦国時代というのは日本史の中でも稀有なほど、人と人との思惑が絡み合った時代だ。歴史というのは、単語暗記のようにとらえがちだが、それぞれの行動には人々の思いが詰まっており、人々の欲望が詰まっている。この欲望や人々の想いを読みとくことこそが日本史である。もし日本史が苦手な人がいたら、ただの単語暗記と捉えるのではなく、こういう狙いがあったからこういう行動が起こったのだと理解してみればもっと得意になるのではないのだろうか。それでは、僕のような者の文章を最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

参考文献

「前田利家」 Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%89%8D%E7%94%B0%E5%88%A9%E5%AE%B6#%E7%95%A5%E6%AD%B4>

(最終閲覧日 2021 年 9 月 1 日)

承久の乱

16R 小畑 陽輝

承久の乱は1221年(承久3年)に起きた。これは後鳥羽上皇が、再び上皇中心の政治を取り戻すべく、鎌倉幕府を打ち滅ぼそうとした戦いだ。

鎌倉幕府が誕生したとき、当時朝廷の中で最高権力を持っていた後鳥羽上皇は、朝廷に従わない鎌倉幕府に不満を募らせていた。その中、1219年、将軍であった源実朝が暗殺され、将軍の後継ぎがいなくなった鎌倉幕府は大混乱した。そこで後鳥羽上皇は、

将軍のいない状態の鎌倉幕府を倒す大きなチャンスだと思い、1221年5月に院宣という命令書を出し、日本全国の武士に北条義時を倒すよう命令した。京都近隣の武士が中心となり、幕府を倒すために挙兵したのだ。院宣を出した後鳥羽上皇は「朝廷の命令なら全国の武士も従って、鎌倉幕府を倒すだろう」と考えていた。

また、鎌倉幕府の武士たちも激しく動揺した。そんなとき、北条政子が演説を行った。北条政子の演説の言葉として「故頼朝公の恩は山よりも高く、海よりも深い」という有名なものがある。一致団結し、鎌倉幕府を開いた源頼朝への恩を返す時だ、という内容だ。これに感動した武士たちは北条氏につくことを決めたが、それだけでなく、多くの武士たちは朝廷と幕府どちらにつくのが有利か考え、幕府につくことを選んだという。そして北条泰時を中心とした幕府軍は鎌倉を出発し、さらに全国からも武士が集まり、約20万人にも膨れ上がった。

院宣の効果を信じ、のんびりと構えていた後鳥羽上皇の思惑は外れ、大多数の武士が上皇の呼びかけに応じない結果となった。幕府と朝廷の力の差は歴然でわずか1か月で京都は幕府軍に支配され、朝廷の敗北で承久の乱は終わったのだ。

参考文献

坂井孝一『承久の乱:真の『武士の世』を告げる大乱』(2018/中央公論新社)

近代史

近代史編集担当 内田大翔

この章では近代史について研究した論文を集約したものである。近代史の期間について、ここでは終わりを第二次世界大戦終了までとし、日本史は明治維新から、東洋史は辛亥革命から、西洋史は産業革命からとする。

目次

ロイヤルネイビーとその起源	・p097	45R	植松航世
1941年から1945年の10年間で流行した言葉	・p099	11R	斎藤耕太郎
ダンケルク	・p102	41R	内田大翔
大陸打通作戦	・p106	54R	永安世範
コラム ナポレオンの生涯	・p119	11R	平井孝治



「原爆投下と真珠湾攻撃～リメンバー・パールハーバーの本当の意味とは～」

Sun-mait.com/2017/8/5/(最終閲覧日2021年8月26日)

はじめに

皆さんはロイヤルネイビーという単語を聞いたことがあるだろうか。恐らくほとんどの人々聞いたことが無いだろう。この言葉を直訳すると王家の海軍となる。王家と聞いて多くの人々が思い浮かべるのは、イギリスだろう。このイメージ通り、王家とはイギリス王室のことであり、ロイヤルネイビーという言葉はイギリス海軍（以後は英海軍）を指しているのである。

世界最強艦隊ロイヤルネイビーのはじまり

1707年、イギリス（以後は英国）が連合王国となり、海軍の呼び名が今までのイングランド海軍から Royal Navy(イギリス海軍)となった。日本と同じように島国である英国は他のヨーロッパ諸国に比べて、陸軍よりも海軍を重視していた。そして以前よりも他国の海軍が強大となっていたこともあり、当時の海軍の幹部らは他のどのヨーロッパ諸国も相手にならないほど強力な海軍を持つため様々な建艦計画を立てていた。その最たる例が「弩級戦艦」という最上級の戦艦のクラスを指す言葉のもととなった1906年のドレッドノート就役である。その今までとは比べ物にならない圧倒的な性能は当時の各国の最新鋭艦が旧式と見られてしまうほどだった。

ロイヤルネイビー二次大戦前史

1914年になると第一次世界大戦が勃発し、英海軍は独海軍との幾多の海戦に臨み、損害を代償にしながらも、勝利を重ねた。独海軍を破り、勢いづいていた英海軍だったが、1922年のワシントン海軍軍縮条約そして世界恐慌により軍拡は一気に失速し、第一次大戦時の主力艦の廃棄や、口径15センチ以下の艦船の建造中止も決まった。それに伴い大型巡洋艦のグローリアスら三隻が航空母艦へと改修された。だがここでの海軍の縮小をまずいと考えた英国は1930年のロンドン海軍軍縮会議後より軍拡を再度始め、排水量35000トンの大型戦艦キング・ジョージV世級や高性能な航空母艦アークロイヤルや、世界初の装甲空母で1968年まで運用されていた艦もあるイラストリアス級航空母艦、第二次世界大戦時そしてその後まで大活躍だったタウン級などそれぞれ優秀でかつ個性も併せ持つ様々な艦が建艦された。また、巡洋戦艦や重巡洋艦などといった旧式艦などにも対空砲や電探などといった防空装備の強化も行われた。

二次大戦に於ける独英海上戦 ビスマルク追撃戦

当時の英国を語る上で無視することのできないのが、オーストラリアやインドなどの広大な植民地の存在である。二次大戦では独海軍による無差別な潜水艦攻撃（無制限潜水艦作戦）により従来からの植民地からの補給が行えなくなった。そのため英海軍は駆逐艦や軽巡洋艦などといった巡洋艦などを総動員し、徹底的に対抗した。予想外の英海軍の抵抗に悩まされた独海軍は潜水艦作戦を挫折せざるを得なくなり、この長い補給妨害作戦は英国に軍配が上がった。二次世界大戦以前から海軍の規模や装備の質でいがみ合っていた独、英両海軍だが、この二か国による海戦で最も有名なのがビスマルク追撃戦であろう。

1941年、独海軍グナイゼナウとシャルンホルストの二隻は通商破壊作戦に従事していたが、英海軍の待ち伏せを察知し、フランスのブレスト港へ入った。独海軍はこの二隻と呼応して最新鋭艦ビスマルクを出撃させようとしていた。

突然だが、ここで戦艦ビスマルクを紹介したい。当艦は1940年に就役、ビスマルクという名はご存じの通り、ドイツの統一の立役者でその手腕から鉄血宰相と呼ばれたオットー・フォン・ビスマルクに由来する。基準排水量は41700トンで容姿の特徴である2連装砲は380mm、装甲も従来の艦より厚く、対空火器も充実、速力も30.8ノットと他国の最新鋭艦と比べても全く見劣りしない性能で独の技術の粋を集めたような艦であった。では海戦の話に戻る。



ブレスト港に入港していたグナイゼナウだが、先手を打っていた英海軍の奇襲により大破、作戦への参加は不可能となった。この出来事により、ただでさえ打撃を受けた独海軍だったが、さらに不幸が襲う。シャルンホルストの機関が故障し、十分な航海ができないことが分かったのだ。しかし大西洋に一刻も早く出なければならない独海軍に修理を待つ余裕などなく、急遽巡洋艦プリンツ・オイゲンを随伴させることにした。英海軍はデンマーク海峡で北上中のビスマルクをすでに発見しており、大西洋に出ようとしている独海軍の思惑を読んでいた。すぐに英海軍は迎撃すべく艦隊を編成した。デンマーク海峡にはレーダーを装備した巡洋艦ノーフォーク、サップォークをその後方にはキング・ジョージV世級2番艦で最新鋭艦のプリンス・オブ・ウェールズと巡洋戦艦のフッド。ブリテン島の北部には不沈艦のキング・ジョージV世そして巡洋戦艦レパルス極めつけはイラストリアス級航空母艦2番艦ヴィクトリアスと本国艦隊の主力を迎撃に向けたのである。ビスマルクはアイスランド周辺海域でプリンツ・オイゲンから離れ、別行動をとった。その後プリンツ・オイゲンは巡洋艦が発見したものの、振り切られ、ビスマルクもしばらくの間発見されなかった。英海軍をあざ笑うようにプリンツ・オイゲンは幾度も輸送船団を襲撃し、壊滅させた。しかし英海軍もただ輸送船団がやられるのを見ていたわけではない。本土近くの輸送船団を護衛し、時間を稼ぎながらいずれ発見されるであろう主力艦をたたくべく万全を期していた。幾度となく英巡洋艦を振り切っていたプリンツ・オイゲンだったが英駆逐艦戦隊や巡洋艦2隻の包囲により戦わざるを得なくなった。激戦の末プリンツ・オイゲンを撃沈した英海軍だったが、喜んでばかりもいられなかった。まったくビスマルクが発見されなかったからである。すぐに大捜索が始まった。しかしビスマルクは片腕のプリンツ・オイゲンを失い、単艦となってしまった。そのため独海軍はビスマルクを守るためUボートに集結を命令。しかし、暗号を解読した英海軍はその集合場所にビスマルクも来ると予測し、遊撃艦隊を差し向けた。ビスマルクは付近の船団を襲撃した。英海軍は艦隊に船団の護衛を命じていたが、ビスマルクが襲った艦隊には旧式巡洋戦艦ラミリーズ一隻のみしかついてなかった。性能では圧倒的に勝っていたが、ラミリーズの正確な射撃に悩まされ、撃沈はできたものの、各部に致命的な損傷を受けていた。その満身創痍のビスマルクにアークロイヤル、ヴィクトリアス、軽空母の集中爆撃が襲った。損害こそ軽微であったが、機関が攻撃により限界を迎えており、かろうじて動いていたただけであった。そのすぐ近くには無傷のキング・ジョージV世、レパルスがとどめを刺すべく迫っていた。ビスマルクは反撃する間もなく、集中砲火を受け、轟沈した。

おわりに

二次世界大戦後経済の悪化に伴い、英国は海軍を縮小せざるを得なくなった。世界の

海軍と呼ばれた「ロイヤルネイビー」の役割は米海軍が引き継いだ。この後も英海軍は存在しているが、昔ほどの貫禄はない。しかし逆を言えば、英国がそれほど強力な海軍を持たなくてもよい世界になったということである。この平和をつかむために数えきれないほどの人々が戦争に従事し、命を落とした。このことは現代に生きる私たちが決して忘れてはいけないことである。海戦で沈んだ艦たちの魂も2代目、3代目と名前が引き継がれることで、この平和な海でのびのびと航海をしているだろう。

1941年から1951年の10年間で流行した言葉

11R 齋藤耕太郎

はじめに

この論文では1941年（大東亜戦争開戦年）から1951年（開戦 十年後・終戦六年後）の期間で流行った言葉を一つの年につき一個ずつ選びその意味と選ばれた理由を解説するものだ。一九四一年間からの一〇年間を選んだ理由は日本が優勢だった一九四一年からすこしずつ日本が劣勢になり焼野原になって敗戦、そのあと復興する姿を見ることが出来る一〇年間だと思ったからだ。それでは一九四一年から。

一九四一年

この年の出来事は4/13日・ソ中立条約調印し12/8にマレー半島に上陸開始、ハワイ真珠湾攻撃を開始してアメリカに参戦布告。日米交渉を打ち切り第二次世界大戦に突入した。

この年に流行した言葉は「ABCD対日包囲陣」だ。ABCD=America（アメリカ）、Britain（イギリス）China（中国）Dutch（オランダ）の四か国が仏印進駐した日本に対して形成した対日本経済制裁、（例：在米日本人の資産凍結、日本に対し石油を送らないなどの圧力をかけた。日本政府はこの対日本経済制裁をABCD対日包囲陣と国民に宣伝して国民の危機感を煽った。

一九四二年

この年には日本軍がマニラ占領、シンガポールのイギリスの守備隊降伏、ジャワのオランダ守備隊降伏、珊瑚海海戦で機動部隊初の航空戦で戦術的勝利などと勝ち進んでいたが八月七日からアメリカ軍がガダルカナル島・ツラギ島に上陸し日本守備隊を敗退させ、ガダルカナル島からも撤退させ少しずつ日本軍が後退してきました。

この年に流行った言葉は「欲しがりません勝つまでは」だ。大東亜戦争一周年記念の企画として国民決意の標語を募集し32万人以上の募集から入選一〇点、佳作二〇点が決まり入選一〇点の内の一にはいった言葉である。国民学校五年の少女が作ったとされている。意味は勝つまでは贅沢品はほしがらないということだ。金属回収令が発令され、軍に生活に便利な金属類（鍋、ペーゴマ）などをとられて陶器に代用させられ生活が不便になってきとときに国民を我慢させるためによく使われた。

一九四三年

この年には日本の敗戦色が濃厚になってきた。日本軍がガダルカナル島から撤退を開始し、連合艦隊司令長官山本五十六大将がソロモン諸島上空で米軍機に撃墜され戦死したり、アッツ島・マキン・タワラ守備隊が玉砕したり、さらには徴兵年齢が一九歳から四五歳になった年だ。

この年に流行った言葉は「転進」だ。ガダルカナル島の撤退を大本営が発表したとき、敗北ではなく転進という言葉を使ったのが始まりである。敗北したのにもかかわらずあたかもそうではなかったように使われていた。この後の大本営発表で敗北して撤退したときは転進とつかわれるようになった。転進の本来の意味は軍隊が今まで居た場所をさり別の方面に移ることだ。

一九四四年

レイテ沖海戦で敗退、マリアナ沖海戦で主力空母損失、特別攻撃兵器誕生、トラック島空襲、日本爆撃の本格化、東条内閣が総辞職などさまざまな混乱が日本で起きた年だ。海外でも同盟国のドイツがレーニングラード敗退、東プロシアドイツ国境突破など枢軸側が厳しくなっている。

この年に流行った言葉は「鬼畜米英」だ。この言葉は大政翼賛会が戦況が悪化してきたときにアメリカ兵を倒すというようなスローガンの最も有名になったのが「鬼畜米英」である。この言葉の意味はアメリカやイギリスを侮辱する意味で、戦意高揚のために使われた。使用例は：病院船を砲撃！！さすが鬼畜米英だ。（皮肉交じり）などだ。

一九四五年

硫黄島守備隊二万六千人玉砕、東京大空襲、沖縄戦、原爆投下そして降伏と、この長い戦争が終わった。日本は300万人以上の死者を出した。八月九日にソ連が満州を侵略し、沢山の死者が終戦後にも出た。それに加えて復員者が続々と日本に帰ってきて食糧難に陥った。さらに、親とはぐれたり戦争で亡くしたりして、路上で生活するような戦災孤児が多くいた。

この年に流行った言葉は「銀シャリ」である。戦中から戦後にかけての食糧不足に、麦飯や代用食に言いはじめた言葉だ。銀シャリの意味は白米の飯をいう俗語だ。戦後まもなくでは日本全国で一般的に使われていた言葉だが現在では刑務所などで使われている。かつては他の穀物と混ぜて炊いたものを食べるのが普通だったため、めったに食べられないもので高級品だった。

一九四六年

この年にはGHQの日本統治が本格的に始まり、GHQ映画検閲、天皇人間宣言、A級戦犯起訴、総選挙で婦人議員三九名誕生、警官のサーベル廃止などが行われた。その傍ら広島や長崎などの被爆地で白血病の患者が増えた。そして、食糧不足のためヤミ市で人々が買い物をし始めた。

この年に流行った言葉は「ワンマン」だ。皆さんが乗っている電車のワンマン運転ではなく、このワンマンは独裁者という意味だ。この言葉はヒトラーなどの独裁者を罵倒するために使われた。

一九四七年

この年は日本国内では大きな動きが無く、日本と敵対していたイギリスの植民地が次々独立していく。日本では驚くことに天皇陛下万歳！と小学校で叫ぶことを停止するようにやっと文部省が通達した。そして、京浜線・中央線に女性専用車両ができたり労働省で初の婦人局長ができたりなど女性の権利が認められてきた年だと思われる。

この年に流行った言葉は「逆コース」だ。逆コースの意味は日本の民主化・非軍事化に逆行した世界的な社会の動きである。アメリカとソ連の対立が深くなってきたにもかかわらず、アメリカが日本の民主化・非軍事化を進めている行動に対し皮肉を言っている言葉である。

一九四八年

この年には日本を徹底的に反共させるとアメリカのロイヤル陸軍長官が述べ、ソ連に圧力をかけたり、A級戦犯の一部が釈放、東条英機ら7人絞首刑にされたり、GHQが日本の大財閥解体を始めるなど、戦争の後始末が終わってきたとともにアメリカとソ連が対立し始める。海外では、中立のチェコスロヴァキアでソ連の後ろ盾を受けた共産党が政権を握るなどアメリカの警戒を強める動きがあった。

この年に流行った言葉は「裏口営業」だ。この言葉は表向きは休業を装い、合法的な営業をしているようにみせながら、実際には非合法の営業をしていることを指す。このような行動は太平洋戦争末期から行われている。きびしい統制経済下で飲食店が金儲けをするためにこのような行動を始めたと考えられる。

一九四九年

この年には沖縄を恒久的な軍事基地とする統治が本格化にすると琉球米軍政長官が発言するも、日本に対する講和条件を検討中とアメリカ国務省が発言。日本本土がGHQの支配から解放される希望が現れた年だ。海外では共産主義の中国人民解放軍が中国の大陸部を完全制圧。東ドイツが成立するなど共産勢力が強くなった。

この年に流行った言葉は「駅弁大学」である。この言葉は駅弁を売っている駅がある町に新しい総合大学があるという意味だ。この年の学制改革に基づきできた新制国立大学を揶揄した言葉で、大宅壮一の造語の一つである。

一九五〇年

この年には朝鮮戦争が勃発した。皮肉にも日本の経済はこの戦争のおかげで成長した。日本国政府はアメリカの戦争に協力すると発言した。北朝鮮軍は中国やソ連の支援もあり、韓国の首都ソウルを数週間で占領した。これに対してソ連の欠席の中、国連軍が派遣された。日本は国連軍に向け食糧を売り、戦闘機などの備品を整備することで多くの雇用が生まれた。

この年に流行った言葉は「特需景気」だ。この言葉の意味は好景気が特定の地域で何らかの社会現象で起きたことを指す。これは先ほど述べた通り、朝鮮戦争の影響で国連軍に発注された物資やサービスで経済が潤ったことだ。この時の特需景気が日本が経済大国になる土台になったと言っても過言ではないと思われる。

一九五一年

この年には日本が講和・安保条約に調印し日本が本物の独立を手に入れた年だ。この年も、朝鮮戦争で経済が潤っていた。日本の映画「羅生門」がベニス映画祭でグランプリ受賞。日本が世界に名をとどろかせていた。そして、プロレスが日本で流行った。

この年に流行った言葉は「DK」だ。DKの意味はダイニングとキッチンが一室になった空間のことである。日本が焼野原になり日本の一番の課題は食糧と住宅の改善だった。

当時はバラック小屋に住んでいた人が多く、国は国民に家を速やかに提供するという課題を背負っていた。そこで安い家賃で耐火性が高く、多くの家族が快適に住める住宅を求めていました。そこでこの DK という発想が生まれた。この発想のおかげで沢山の団地が作られ、国民に家を提供した。(当時の団地の一つ、戸山団地では大きさは 10 坪から 14.2 坪)

終わりに

一九四一年から一九五一年までの日本で流行った言葉をその時代背景と意味を執筆した。この研究を通して皆さんに当時の人々のその年に考えていたことをわかってもらい、時代の表舞台ではなくその背景を勉強することも重要だと伝えられればと思う。

参考文献

「1 分で分かる！激動の昭和史昭和 17 年 (1942 年) そのときあなたは？」はやぶさ宝石箱 <https://kagebome.com/showa17/> (最終閲覧日 8 月 2 日)

「世相を映す戦後の主な流行語一覧」神戸・兵庫の郷土史 Web 研究館資料 <https://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/dt22ryu.pdf> (最終閲覧日 8 月 2 日)

「流行り言葉」市立札幌新川高等学校 https://www.shinkawa-h.sapporo-c.ed.jp/jyoho/web2012_34/1330/page_4.html (最終閲覧日 8 月 2 日)

「転進」Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BB%A2%E9%80%B2> (最終閲覧日 8 月 2 日)

ダンケルク

41R 内田大翔

初めに

今年から部長が歴史を研究するために遊ぶために始めた war game の一つであるダンケルクについて調べた。

1 ドイツのマンシュタイン計画

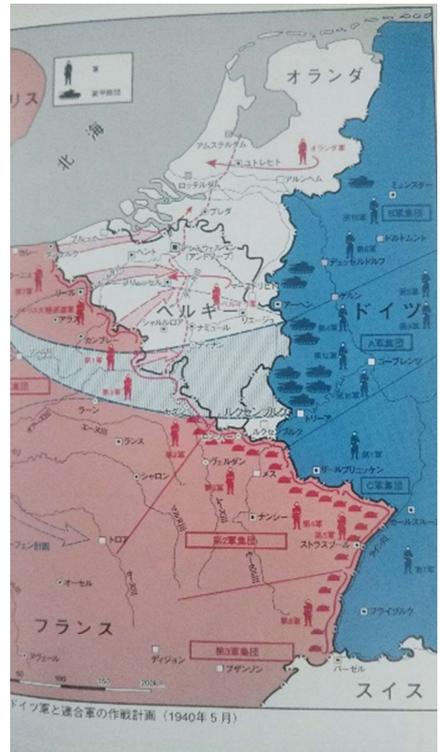
ドイツのポーランド侵攻をきっかけにして、第二次世界大戦がはじまった。しかし、独仏の本格的な戦争がすぐに、はじまったわけではなかった。その理由はフランスの要塞線、マジノ線があったからである。ドイツはフランスを打倒するため、オランダ・ベルギーと戦うことを決定した。それにあたって、ドイツは第一次世界大戦時のシェリーフェン計画のような右翼で攻勢をかける計画を採用しようとしていた。まずは、シェリーフェン計画について説明しよう。

シェリーフェン計画は第一次世界大戦時に計画されたドイツのフランス侵攻での戦略である。これの内容はフランスがドイツ左翼に攻勢をかけるように誘い出しながら、ドイツの強力な右翼がベルギーを通過しスイス国境を目指して突進してフランス軍を巨大な包囲網に閉じ込めるといったものだった。しかし、シェリーフェン計画の右翼の攻勢は失敗した。

第二次世界大戦においても右翼で攻勢をかける計画が立てられていた。フランス側もその計画を察知し、ブリュッセル近郊でドイツ軍主力を迎え撃つ計画をたてていた。そんな中、ドイツのマンシュタイン中將は右翼での主力同士の間で衝突は決定的勝利にはならないとして、攻勢の重点を中央にうつすことを考えた。そして装甲部隊が車両の走行が困難とされるアルデンヌの森を通過し、セダンへ奇襲を行うことによってムーズ川の戦線突き破り、さらにソム川河口まで突進して連合軍主力部隊を包囲すべきと考えた。

マンシュタインは装甲戦術のエキスパートであるグデーリアン将軍を訪ね、意見を求めた。グデーリアンは装甲部隊でアルデンヌを通過することは無茶なことではないと断言した。そして、できるだけ多くの装甲部隊と自動車化部隊を中央に投入するべきだと主張した。マンシュタインは覚書を作成し、陸軍総司令部に送付した。しかし、それは陸軍参謀総長ハルダーと陸軍総司令官ブラウヒッチュによって検討されることもなく却下された。

この頃、ヒトラーは決定的勝利をおさめるような計画を求めていた。ハルダーはヒトラーがこの魅力的な計画を知ったら飛びつくことに気づいていた。そして、ハルダーは危険な賭けを許すわけにはいかなかった。ハルダーはマンシュタインの口を封じるためにマンシュタインを書類上でしか存在しない第三十八軍団長に任命し、西部戦線からはるかかなたに左遷した。しかしマンシュタインの部下が奔走し、マンシュタインはヒトラーに自分の構想を説明することができた。実はこの会談の四日前、ヒトラーは攻勢の重点を中央にうつすことを決めていた。ヒトラーはマンシュタインの構想に同意し、ハルダーもヒトラーの構想と同じような計画案を提出した。こうして西方侵攻計画「黄号」が決められた。主な内容は装甲部隊がアルデンヌの森を通り、ムーズ川を渡る。そして、海峡沿岸部に向かって進撃し、連合軍を包囲すると決められた。しかし、軍上層部はこの作戦に不安を抱いていた。



2 フランスの戦略

連合軍は開戦時、兵力、航空機、戦車など全てにおいてドイツに優勢だった。そしてフランス軍はマジノ線とアルプス山脈の防衛線が破られることはないと考え、第一次世界大戦と同じくフランス北東部から攻めてくると考えていた。これに対してフランス軍はブリュッセル近郊で防衛することに決めた。また、第一次世界大戦と同じく長期戦になると考え、多くの兵、戦車、航空機を温存することにした。

3 開戦とムーズ川突破

ドイツ A 軍集団は計画通り、ムーズ川に向かって進んでいた。敵に作戦がばれるようなことがあってはならなかった。細い道を進む車両の列は格好の的だった。フランス軍偵察機が車両の列を見つけていたが、フランス軍将軍は報告を信じず、取り合わなかった。さらに、長期戦の考えやベルギー軍とフランス軍が共同しなかったことから遅滞戦闘もあまり行われなかった。そのおかげもあってドイツ軍はムーズ川まで順調に進んだ。

連合軍はムーズ川沿いに無数のトーチカを作っており、このトーチカ群を突破することは容易ではなかった。さらに、ムーズ川防衛の重要拠点セダン市はドイツ軍にとって大きな関門だった。五月十三日、セダン攻撃はドイツ軍の爆撃から始まった。爆撃は20分間行われ、その爆撃によってフランス軍の指揮系統はズタズタにされた。



爆撃の後、ドイツ軍は渡河を試みる。しかし、まだトーチカの大半は生き残っていた。トーチカからの銃撃にさらされる中で《大ドイツ》部隊は次々とトーチカを攻略した。同じころに、他の部隊もムーズ川を渡り始めた。こうしてドイツ軍は橋頭堡の確保に成功する。

セダン陥落へのフランス軍の対応

当初、重火器、戦車が渡れる橋はゴーリエの軍橋のみだった。ドイツ軍は予備の機材を持っていなかったため、損傷しても修復できなかった。両軍はこの橋の重要性を理解し、この橋に戦力を集中した。しかし、連合軍は爆撃機百五十二機、戦闘機二五〇機しか投入出来ず、ドイツ軍の三百三門の高射砲と八百十四機もの戦闘機に落とされていった。連合軍は一日のこの作戦のためだけに一六七機の航空機を失った。

フランス第十軍団はセダンが突破された場合を想定し予備兵力を投入する方針を固め、作戦を立てた。しかし、フランス軍は速やかな反撃命令を下さず、反撃の好機を逃してしまった。本来、反撃を開始できた時、川を渡っていた歩兵部隊は疲労困憊でドイツ軍は少数だった。しかし反撃は遅れ、ドイツ軍戦車部隊の渡河を許すことになった。フランス軍は戦車部隊で反撃に出るも戦車は歩兵部隊と共に進むとされていたため行軍が遅く、高台を取られ失敗した。その間にも、ドイツ軍は着々と川を渡っていた。

グデーリアンの決断

こうしてドイツ軍はムーズ川の渡河を成功させたが、そのまま作戦通りに進もうとはならなかった。もともと反対していた將軍たちはともかくとして、この作戦に賛成していたヒトラーでさえ西方への突進に反対したのである。ヒトラーが求めていたのはセダン攻略という点だけだったのだ。ヒトラーは側面からの攻撃を恐れ、「ムーズ川渡河に成功したあとの措置」については自身の専権事項に入れるように命じた。五月十四日十四時、グデーリアンはヴァルター・ヴェンク少将に自らのモットーである「もたもたするな、てきぱきとやれ」を言われ、命令に逆らっての西方への突進を命令した。作戦は再び動き出した。

4 ドイツ軍の進撃を止めるために

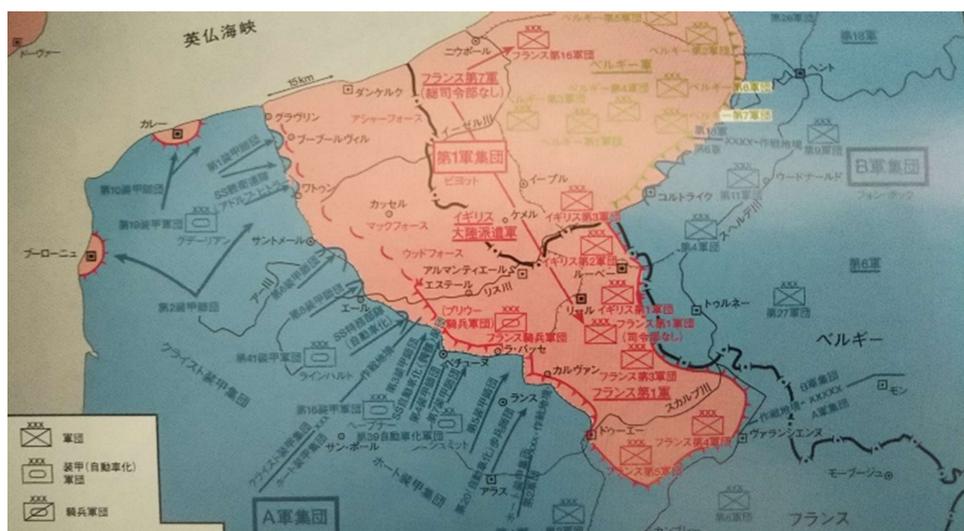
フランス軍は前記の通り長期戦を想定していた。そのため、たくさんの予備兵力が前線の後ろに置かれていた。その中の第三機甲師団を含む二個軍団が南からの反攻のために用意された。しかし、フランス戦車の鈍重さゆえに作戦開始時刻は延ばされ、あろうことか第二十一軍団長のフラヴィニーは攻撃開始命令を下さなかった。この時ドイツ軍の橋頭堡の南を守っていたのは第十装甲集団だけだったにもかかわらずだ。さらに反攻に使われるはずだった戦車は前線を張るために分散させられた。北方戦線軍総司令官ジョルジュ將軍に反抗するよう再度命じられるも、無線機器が相次いで故障しほとんどの戦車がガス欠状態だったため延期が相次いだ。その間にもドイツ軍が反攻作戦の芽を摘むため要衝ストンヌを攻撃し、十五日から両軍はストンヌを奪い合う。フラヴィニーは十八時に攻撃中止命令を下し、ストンヌの確保を優先した。これによってドイツ軍は危機を免れた。ドイツ軍は敵の集結地点を叩くことによって敵の反攻を防いだのだ。さらにストンヌ攻撃はフランス軍にドイツ軍は南方へ大攻勢をかけていると思わせた。これを警戒したフランス軍は第二軍の左翼を動かし、ムゾン地区のあらゆる堡壘施設が簡単に敵にわたってしまった。

第二軍と第九軍の間には第六軍が配置された。第六軍には第二機甲師団、第十四歩兵師団、第三十六歩兵師団、第四十一軍団が加えられた。しかし、総攻撃はできず編成された兵をただ陣地に入れるだけだった。第六軍はエーヌ川に沿って部隊を置いた。これでドイツ軍の英仏海峡までの進撃を止める連合軍部隊はいなくなった。十五日には北の

ファビヨンでフランス軍第一機甲師団に勝利する。十六日早朝、グデーリアンはアルデンヌ運河西方の丘陵地帯を突破した。

5 三つの停止命令

ドイツ軍は快進撃を成し遂げ、フランス軍は各地で敗北した。あとは海峡にたどり着けば勝利は確定になる十七日、ヒトラーが停止命令を出した。ヒトラーは南方からのフランス軍の反撃を恐れた。しかし、前記のようにフランス軍は混乱



し、反撃をできる状態ではなかった。この停止命令によってドイツはフランス軍に時間を与えてしまった。この間にフランス軍はソンム-エヌの線に新しい防衛線を構築した。さらに、編成途上であった第四機甲師団を投入した。師団長はド・ゴール大佐（後のフランス大統領）である。彼はフランス軍の通常の戦車運用法とは違う歩兵支援がほとんどない中でモンテコルネのドイツ軍を攻撃した。これはドイツ軍の急所を突くものだったが空軍の支援がなく、敵の急降下爆撃に襲われ、ドイツ軍第十装甲師団が現れたため撤退した。十九日には西方への進撃を再開した。二十日にはアブヴィルを占領し、連合軍北翼集団は包囲された。そして、快速部隊は港町ブローニュ、カレー、ダンケルクを目指した。

イギリス軍はアラスにて反撃を行おうとした。しかし、十九日にフランス軍総司令官ガムランは罷免され、新任の将軍はいさつ回りに三日間を費やし作戦も反攻は限定された。二十一日、イギリス軍はフランス軍に頼らず、アラスからの反撃を開始した。しかし、イギリス軍は総力を挙げての反撃のはずだったが、反撃に使われた戦力は歩兵一個師団と戦車二個大隊だけだった。イギリス軍戦車は暴れまわったが他兵科との連携が取れずに孤立し、甚大な被害を出した。この時点でイギリス軍の反撃は終了し、連合軍が脱出できる海峡沿岸部諸港への競争の段階に入った。しかし、この反撃にヒトラーは今度こそ側背が危ないと判断し、二十四時間の停止命令を出した。それでも、二十四日には連合軍最後の脱出口ダンケルクまであと十五キロに迫っていた。ダンケルクにはドイツ軍を止められる部隊は存在しなかった。しかし、またもや停止命令が出された。この停止命令は三日間も続いた。この間にダンケルクの防御は強化され、数個師団が集結した。さらに、天候も連合軍に味方し、ドイツ空軍から連合軍を守った。この三日間は連合軍にとっても重要な時間をもたらした。当初、連合軍の撤退は多くとも四万五千人と見られていたが、五月二十六日から六月四日までに三十三万もの兵が撤退した。

終わりに

連合軍はドイツの作戦にはまり、フランスは降伏した。連合軍がドイツの作戦が失敗するような反撃をする機会はいくつもあった。しかし、多くの反撃が行われず、行われた反撃も決定的なものにはならなかった。その理由はもちろん軍そのものの遅さはあるだろうが、ドイツに天が味方したように感じた。さらに、同じように連合軍の撤退にも連合軍に天が味方したように感じた。war game ではフランス軍のムーズ川の戦力がとても低く、ドイツ軍の作戦がうまくいくことが当然のように感じるが現実には危険な賭けであった。さらに、フランスの防衛施設は一つも書かれていない。やはり、ゲームだけで

なく実際の戦争について知るべきだと感じた。

参考文献

カールニハインツ・フリーザー著 大木毅＋安藤公一訳『電撃戦という幻 上』
(2003年/中央公論社)

カールニハインツ・フリーザー著 大木毅＋安藤公一訳『電撃戦という幻 下』
(2003年/中央公論社)

大木毅著『戦車将軍 グデーリアン 電撃戦を演出した男』(2020年/角川新書)

レン・デイトン著 喜多迅鷹訳『電撃戦』(1994年11月1日/早川書房)

エーリヒ・フォンマンシュタイン 本郷健訳『失われた勝利 上』(1999年/中央公論社)

エーリヒ・フォンマンシュタイン 本郷健訳『失われた勝利 下』(2000年/中央公論社)

ハインツ・グデーリアン著 本郷健訳『電撃戦 上 グデーリアン回想録』(1999年/中央公論社)

ハインツ・グデーリアン著 本郷健訳『電撃戦 下 グデーリアン回想録』(1999年/中央公論社)

大陸打通作戦

54R 永安世範

はじめに

日中戦争があった事は周知の事実だろう。況んや、太平洋戦争をやである。1937年の盧溝橋事件を契機に日中戦争がはじまり、1941年には連合国との太平洋戦争が始まり、1945年の終戦に至る。太平洋戦争開戦まもなくは優勢だったが、アメリカの物量に押され負けた。この流れが定説的であり、一面においてこれは正しい。しかし、ここには重大な見落としがある。1941年の開戦以降、「日中戦争」はどこに行ってしまったのか。

「日中戦争」は「太平洋戦争中国戦線」となった。日本史では、「太平洋戦争中国戦線」において何が行われていたのかという視点が欠落しているのである。終戦直前を除けば、太平洋戦争の全期間を通して最も多くの兵員を擁していたのは、米軍やイギリス軍との最前線である南方軍でも、本土でも、ましてやソ連と相対する満州の関東軍でもない。中国の支那派遣軍であった。

攻玉社で使っている山川出版社詳説日本史においても、中国戦線に関しては、

中国戦線では、太平洋戦争開始後、中国の飛行場が米軍に利用されるのを防ぐ作戦や、華中と華南を連絡させるための作戦がなされた。とくに、中国共産党が華北の農村地帯に広く抗日根拠地(解放区)を組織してゲリラ戦を展開したのに対し、日本軍は抗日ゲリラに対する大掃討作戦(中国側はこれを三光作戦と呼んだ)を実施し、一般の住民にも多大の被害を与えた。(山川出版社 詳説日本史 p.365)

との記述に留まる。インパール作戦は地図に載っているのに、中国戦線に関しては地図に何も書かれていない。そもそも太平洋戦争に関する記述が薄いのだが。

では、中国戦線では何があったのか。私が注目したいのは、「華中と華南を連絡させるための作戦」としか書かれなかった「大陸打通作戦」である。この作戦は中国にある米軍の飛行場を占領するほか、中国を貫通し、陸路で大陸の連絡路を確保することを目的としていた。参加兵力は、日露戦争の奉天会戦を遥かに上回る帝国陸軍最大の作戦であった。

この忘れ去られた大作戦の推移と結果、意義について分析したい。

序章 太平洋戦争は日中戦争のために

本題の前に、軽く状況を説明したい。1937年7月7日に起こった盧溝橋事件を契機に、日中両国はお互いに宣戦布告のないまま、全面戦争に発展した。北京、天津、上海、南京、武漢、広州などと、大都市を多く占領したものの、重慶の国民政府は依然抵抗の姿勢を見せていた。日本史においてはここまでが政治史として比較的クローズアップされている。

さて、1941年7月2日、御前会議において、「情勢の推移に伴ふ帝国国策要綱」を決定する。内容は、「帝国は依然支那事変処理に邁進し且自存自衛の基礎を確立する為南方進出の歩を進め（以下略）」とし、南方への進出が確定され、7月28日に南部仏印進駐が行われた。これにより、日米関係は急速に悪化し、戦争回避の交渉が進められたが、結局障害となったのは、中国からの撤兵問題であった。多くの戦死者、莫大な戦費を費やした中国を手放すわけにはいかない。そもそも、南方への進出も日中戦争を有利に進めるための手段ともいえるのではないだろうか。すべては日中戦争を中心に回っていた。

そして、開戦に至る。開戦の詔勅においても「米英両国ハ残存政権ヲ支援シテ東亜ノ禍乱ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス」とあるように、日中戦争に介入しようとしている米英に宣戦するという主張である。つまりは、太平洋戦争がなぜ起こったのかを当時の日本側の見解から見たのなら、（正しいかはさておき）日中戦争に原因があることは、間違いないのではないだろうか。

しかし、開戦後、主役となったのはマレー半島、フィリピン、インドネシア、ビルマなどと次々と広がる戦線で米英軍と戦う南方軍であった。支那派遣軍総司令官の畑俊六大将は大戦中期にこう述べていた。

支那派遣軍が大東亜戦争に寄与するの途は、その有する戦力を提供することか、あるいは派遣軍が大陸に占拠する地位を基礎とする行動以外には残されていない。（以下略）（『戦史叢書 一号作戦〈1〉河南の会戦』p.6）

開戦直後、陸軍の総師団数の内、南方軍が10個師団で約20%であるのに対し、支那派遣軍は21個師団で41%であり、南方軍の兵力を遥かに上回っていた。どっちが主役なのかと言いたくはなるが、中国戦線は兵員をただただ抱えるだけの「お荷物」でしかなかった。

太平洋戦争中も、香港作戦の支援として、長沙に進撃し大敗した第二次長沙作戦、ドーリットル空襲に対応した浙贛作戦や、江北・江南・常德の殲滅作戦などが行われたが、重慶を攻略する五号作戦は戦局の悪化と、その膨大な作戦規模によって中止となり、中国戦線が完全に解決される見込みは全く潰えた。

第一章 大陸打通作戦 その立案

それでは本題に入ろう。大陸打通作戦（正式名称：一号作戦）を強力に推進したのは、1943年11月25日の新竹空襲である。中国江西省の遂川を出撃した米軍機が台湾の新竹を空襲した。この出来事は、大本営に大きな衝撃を与えた。絶対国防圏が早々に脅かされ、中国大陸にある基地から、日本本土の空襲が可能であることを示していたからだ。よって、中国にある航空基地を攻略し、本土への空襲を未然に防ぐという所に重点を置いた作戦となる。

まず、中国戦線の状況を整理しよう。図のように日本軍は華北を抑えていたが、華中、特に武漢周辺は突出した形となっていた。重慶攻略の足掛かりとして宜昌・武漢を占領していたが、細長い戦線は補給上極めて不利な状況にあった。

さて、大陸打通作戦の策定自体は、新竹空襲の4カ月ほど前にまで遡る必要がある。支那派遣軍は1943年3月に大本営に対し、重慶攻略によって、日中戦争の解決を図るべきだと具申した。当然というべきか、戦力に余裕が無いという事で、延期を命じられた。そこで支那派遣軍としては、「昭和十八年度秋季以降支那派遣軍作戦指導ノ大綱」を策定し、新たな作戦を計画した。この中に、「京漢打通作戦」という記述があり、その作戦目的は、武漢への揚子江(長江)補給路が米中空軍によって脅かされているため、華北との連絡路を作り上げ、兵力の運用や融通を楽にすることにあるとされている。この「京漢打通作戦」は延期を命じられたものの、大陸打通作戦の原案というべきものは、新竹空襲の前から計画されていたといえる。

では、「大陸打通」作戦はいつ計画されたのか。まず、服部卓四郎は自らが大陸打通という形で43年の1月に発案したものだと言っている。1943年10月、参謀本部作戦(第二)課長に服部卓四郎が復帰した。作戦課長に復帰した服部は、視察した南東方面(ラバウル)を視察した際には、沈滞した士気を立て直すには、陸軍独自で一戦戦を実行し、士気を高揚させる必要を感じたこともまた、推進する一因となった。その矢先、杉山元参謀総長は11月初頭に東シナ海での船舶喪失の状況を憂慮し、中国東南部の飛行場を粵漢鉄道の打通によって、基地を使えないように出来ないかを服部に研究するよう命じた。そして、服部は絶対国防圏を維持するためにも、東の戦線では耐えつつ、西の中国戦線では大陸を打通し、仏印に連絡させることを考えた。こうして、京漢打通と粵漢打通、そして中国と仏印を接続させるという大陸打通作戦の基本構想は11月中に固まった。(実は1942年の大晦日に杉山参謀総長は、本土空襲の未然防止の為の桂林・柳州の基地の覆滅を上奏していたようである。かなり前からアイデア自体はあったようである。ただ私が大本営陸軍部の戦史叢書を漁る限りは見当たらなかった上、河南の会戦などでの大陸打通作戦関連の戦史叢書でも言及がないので、大して重要ではないのだろう。)

さて、今までに出した大陸打通作戦の目的とは①東シナ海の交通保全②中国と仏印の接続③士気の高揚である。そして、11月25日の新竹空襲によって④本土空襲の防止という目的が追加された。よって、作戦目標は、①航空基地の占領②仏印までの交通路の確保ということになる。

明くる1944年1月4日、支那派遣軍は一号作戦計画大綱をまとめる。ここに依れば、作戦目的は、

- ① 南西地区の敵空軍基地を覆滅し、本土空襲を封殺する
- ② 大陸を縦貫している鉄道沿線地区を打通し、南方との陸上交通を確保する
- ③ 重慶政権の継戦意図を破碎する

この3点にあった。これに対し、東條英機総理大臣兼陸軍大臣はこう質問した。「真の究極目的は何か、作戦目的は単純明瞭なことが必要である」。この鶴の一声によって、航空基地の覆滅に集約されることになった。さらに、2月には東條英機が参謀総長を兼任することになり、認識の一致を図ったが、作戦中の7月に更迭される。これによって、作戦目的が再び多岐化する結末を迎えるのはまた後の話である。

また、この「大陸打通」のアイデアは、鉄道関係者が早くから、釜山発シンガポール行という、ロマンあふれる鉄道構想を持っていたこともまた、一つの材料ともなったとされる。そのためには、鄭州—漢口間と漢口—柳州間、すなわち、京漢線南部と湘桂線の占領が必要となる。そして、朝鮮海峡を除き、柳州と仏印国境さえ自動車道で結べば、東京からシンガポール直通の鉄道線が完成するのである。(しかし、前述の通り、輸送路の確保は棚上げされた。)

時を戻して、1月24日、一号作戦の実施に関する裁可が下った。これに対し、昭和天皇は、作戦による中国の治安悪化を懸念したが、杉山総長は問題ないと答えた。これもまた、伏線となった。

ともかく、大命は裁可され、大陸命 921 号、大陸指 1810 号が下った。また、「一号作戦要綱」として、作戦が明確に命令された。極力原文に準拠し要約した上で見ていこう。

1. 作戦目的

敵を撃破して、京漢・湘桂・粵漢の鉄道沿線の領域を確保して、空軍基地を覆滅し、跳梁を封殺する。

2. 作戦方針

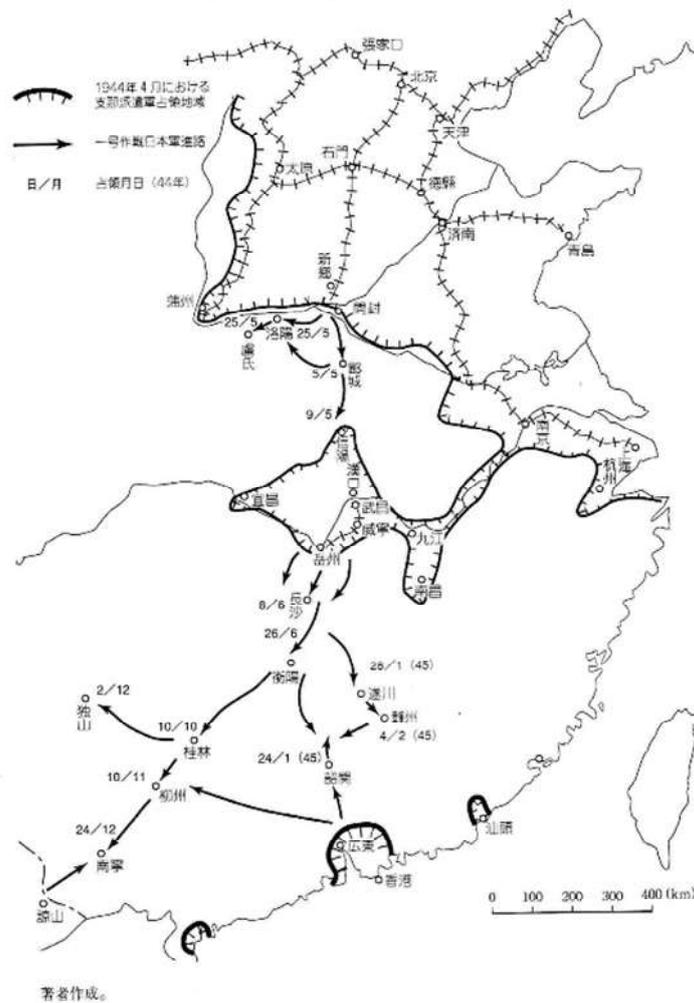
- ① 晩春に北支より、夏季に武漢・広東より進攻し、中央軍を撃破する。
- ② 京漢鉄道を、次いで湘桂・粵漢鉄道の沿線要域を占領する。
- ③ 作戦に伴って、京漢、粵漢鉄道は状況が許す限り復旧に勉める。

後に、この①と②の順番は、兵力と兵站の関係から逆になる。結果を分かりやすく説明すると、京漢線南部を打通（コ号作戦）し、華北と武漢を接続した後、武漢から出撃し、長沙、衡陽を陥落させる（湘桂作戦・ト号作戦前段一期）。その後、桂林・柳州を占領する（前段二期）。そして、南寧を攻略し、仏印に接続する（後段）。また、衡陽と広東から粵漢線を打通する（前段三期・南部粵漢打通作戦）。

ただし、3月10日に支那派遣軍の「一号作戦計画」には、作戦目的に「帝国本土空襲並びに海上交通破壊の企図を封殺する」と「重慶政権の継戦意図を破摧衰亡せしむる」という文言が追加された。後者は、大本営と支那派遣軍で、意見の相違が初期の頃から若干ながらあった事が垣間見える。これでは、作戦の優先順位が鈍ってしまうのである。

さて、大陸打通作戦は実に巨大な作戦であった。その規模に実感がわかないだろうから、これを日本に当てはめて見ていこう。

付図第6 一号作戦（大陸打通作戦）要図



青森県下(黄河河畔)に集中した北支軍は盛岡付近での会戦を遂行して北関東に打通する(距離四百キロ)。

南関東の第11軍は名古屋(衡陽)を攻略し(前段一期)、次いで姫路(桂林)、岡山(柳州)を攻略した後(前段二期)、一部で福岡(南寧)を経て、鹿児島(仏印・諒山)に到る(後段)。その作戦距離は千四百キロ。その間、衡陽—広東間の600キロを打通する(前段三期) (佐々木春隆「大陸縦貫・一号作戦」『完本・太平洋戦争(下)』)

そして、作戦兵力も桁違いだった。51万の兵力、馬匹10万頭、火砲1,500門、自動車1万5,000両、延べ約21個師団、作戦期間10カ月。奉天会戦に参加した日本軍の兵力がおよそ24万人であったとされるが、まさにこれは、日本陸軍最大の大作戦であった。名も忘れ去られたこの大陸打通作戦とはこのように計画されたのであった。

第二章 大陸打通作戦 その実行

1.京漢作戦(コ号作戦)

まず、大陸打通作戦の号砲となったのは、京漢線南部を打通する京漢作戦(コ号作戦)であった。支那派遣軍は基本的に、重慶政権を打ち破ることを悲願としていた。この大陸打通作戦が認可・命令された時には、きっと喜んだに違いない。しかし、その中でも、北支那方面軍は、あまり乗り気ではなかった。北支那方面軍は、黄河を挟んで、中国軍と対峙するとともに、華北の広い占領地の警備も担っていた。この地域は共産党軍が浸透をいついかなる時も試みており、その治安のことを考えると、警備兵力を減らさざるを得ない大規模な作戦にはあまり乗り気ではなかった。(京漢線を打通するような資材があるなら、西安方面での作戦を行い、中国共産党の本拠地である延安を攻略する方がマシとまで思っていた。)それに「黄河を挟んで」というのもまたネックであった。中国の二大河川、黄河。それを安全に渡河して打通する作戦とは、いかにも難しいものと思われた。橋を架けて渡ろうにも、京漢線の黄河鉄橋は、1937年に中国軍が撤退の際に、徹底的に破壊して以来、放置されていた。1941年に日本軍は黄河南岸の霸王城に橋頭保を築き、来たる進攻に備えていたが橋が無いのでは大規模な作戦は難しかった。南部京漢線を打通し、中国の鉄道による交通の活発化が議論されると、黄河鉄橋を修復することとなった。資材は関東軍が対ソ戦のために温存していた資材を転用することとなり、1943年12月初旬に作業を開始し、1944年の3月25日に修復が完了した。その長さなんと3713m。作られる目的や、設計、材料、環境が全く異なるとはいえ、明石海峡大橋(3911m)の建設に10年かかったことを考えればもの凄い突貫工事であった事が分かるだろう。斯くして、京漢作戦の前提は整った。

では、参加部隊を見ていこう。

北支那方面軍(岡村寧次大将)

第12軍(内村英太郎中将)・主攻

第37師団、第62師団、第110師団、戦車第3師団、騎兵第4旅団、独立混成第7旅団等

第1軍

第69師団等

菊兵団(北支那方面軍直轄)

第63師団基幹、独立歩兵第9旅団、野戦補充隊など

第11軍

第27師団(関東軍より転用)

作戦の主眼は、速やかに黄河を渡河し、第12軍を京漢線沿いに急速に南下させるこ

とによって、対峙する中国軍の第1戦区軍（蔣鼎文上将）約40万の内、中核戦力となる、副長官・湯恩伯上将が指揮する部隊（約20万）の側面攻撃を誘引し、そこで日本軍は右旋回し、捕捉撃滅することになった。また、第1軍を用いて、蔣鼎文軍を誘い出し、古都・洛陽を落とす事になった。

また、大陸打通作戦自体は、鉄道沿線の確保による、敵航空基地の覆滅が目的であったが、第12軍の行動を推察すると、敵野戦軍の撃滅をより指向していたと考えられる。とはいえ、敵軍をただ押し込んで鉄道線を確保するだけでは、もちろんやっていけないはずもない。そのバランスをいかにとるか、というのが重要な点である。

1944年4月17日、第12軍の黄河の渡河を皮切りに大陸打通作戦が始まった。第62師団と第110師団が黄河鉄橋方面から、第37師団が中牟方面から黄河を渡河し、4月19日には早々に鄭州を攻略し、京漢線を一気に南下した第12軍は、4月30日許昌を攻略した。作戦通り、湯軍が側面を狙ってきた。第12軍は右旋回を開始し、包囲を試みた。また、この時に、戦車第3師団と騎兵第4旅団を突進させ、退路の遮断を試みた。5月9日に包囲戦が終了したが、結果として、戦車を見て戦意を喪失し、逃げ足の速い中国軍は逃げ切ってしまった。

なお5月9日に第27師団は、京漢線の打通に成功した。

次の日本軍の目標は、洛陽の攻略であった。第12軍は、西方にいた蔣鼎文軍を、第1軍と共に撃破すると、追撃を行い、大打撃を与えた。この間に、菊兵団が洛陽を攻撃していたが、ここに戦車師団などを増派し、5月24日に総攻撃開始、25日朝には、かつての古都・洛陽は陥落した。

残敵の掃討には、6月下旬までを要したが、京漢線の打通という作戦目的は難なく達成したのであった。一方で、打撃を与え、撃破したとはいえ、やはり主力軍は取り逃がす結果となってしまった。

さて、この京漢作戦に参加した部隊の中でも、戦車第3師団に注目したい。というのも日本軍の戦車師団が参加した戦闘というのは、この大陸打通作戦における戦車第3師団とフィリピンのルソン島での戦車第2師団の例しかない。（ただし后者は、善戦空しく徹底的に米軍に打ち破られている。）

その前に、日本の戦車師団の編成から見ていこう。2個戦車旅団（各戦車連隊2個）と、機動歩兵連隊、機動砲兵連隊、搜索隊、その他部隊から成る。戦車の装備定数は231両であったが、これは（戦車の質を別として）海外に劣るものではなかった（ドイツ200両強、ソ連（戦車軍団）約190両、アメリカ（大戦末期）中戦車190両、軽戦車80両、計270両）。ただし、問題は、日本軍の戦車師団の編成において、連隊の下組織が中隊であったことだ。つまるところ、運用規模が中隊規模になることは、歩兵直協の運用の域を出ず、機甲戦力の集中による突破を考慮していなかった事になる。この分野においては、グローバルスタンダードに遅れていたことになる。

今作戦における戦車第3師団は戦史叢書によれば、戦車第3師団は、戦車第13連隊、戦車第17連隊ほか部隊が所属し、記述のもの（各戦車・機動歩兵・機動砲兵連隊）を合計すれば戦車168両、自動車（装軌車などを含む）216両が参加したようである。（『戦史叢書 一号作戦〈1〉河南の会戦』p.600によれば、255両が参加したとするが、何が255両なのか分からないので特定ができない。ただし、本部や搜索隊の装備や、輜重部隊ではさらに自動車を保有しているはず（戦車第1師団、戦車第2師団の編成の実例では自動車が1000両を超えているようである）だから、実数はもっと大きいであろう。）

さて、その戦いぶりをみてみよう。先ほど述べた、湯恩伯軍の側面攻撃に対する第12軍の右旋回において、騎兵第4旅団と共に、退路を遮断し包囲を行う部隊として許昌から臨汝を通して洛陽に打通し、洛陽攻撃に参加した。

結果的に、内山第12軍司令官はこう報告した。「戦車師団は編制が過大で、もっと小編制でよい。機動力としては騎兵旅団の方が優秀だった。」こう言われては身も蓋もな

い。現場からも戦車師団の評判は良かったとは言えないだろう。結局は、内山司令官が過大と言ったのは、日本軍における戦車の用法が歩兵直協に過ぎないことを暗示している。また、「機動力」は騎兵が多少の不整地であろうと、問題なく進軍できるのに対し、戦車は路上・平地でなければ「進軍」は出来ない。戦闘においてキャタピラは地形を関せず戦えるが、移動という面においてはやはり難がある。つまりところは、投入場所を誤っていた感が強い。というのも、京漢線（鄭州—許昌—漢口）などはまさに平地であるが、その西方は山地である。私は、戦車第3師団が適切な戦場に投入されていないが故の低評価なのだと結論付けたい。

2.湘桂作戦 前段第一期（ト号作戦）

京漢作戦の作戦目的を大部分達成した5月27日（海軍記念日）に攻勢を開始した。この湘桂作戦の前段第一期（以下第一期）は、長沙を攻略し、次いで衡陽を陥落させることにあった。このような長期・大規模な作戦においては、敵を残さず、撃滅しながら進むことが肝要だとした。それは編制に表れている。

参加部隊

第11軍（横山勇中将）

第一線兵团（第3、13、40、68、116師団）

第二線兵团（第34、58、27師団）

第三線兵团（第37、64師団）※第64師団は当初は支那派遣軍直轄

第23軍（1個師団、3個旅団）

その他

このように、参加部隊を3つに分け、縦深をもたせ、敵野戦軍の包囲撃滅に重点を置いた。またもや、大本营と意見が食い違った。何を言おう、この作戦の目的は、元と言えば航空基地の覆滅にあったはずである。

作戦は順調に推移した。6月18日には長沙を攻略した。長沙はかつて、1941年に第2次長沙作戦で大敗した因縁の地であった。その際は、日本軍を深くおびき寄せ、反撃を開始し、包囲を試みるという第9戦区長官薛岳の「天炉作戦」にまんまとはまった日本軍であったが、湘桂作戦とでは兵力規模が段違いであり、また、戦線の両翼に配置された第3師団、第13師団の精鋭師団はその戦法を一切寄せ付けず、さらには、敵の反撃拠点となるべき所を次々と奪い、その反撃を全く封殺したのであった。とはいえ、正面から戦うことの不利を悟っていた薛岳は主力を後方に下げたため、長沙で包囲撃滅出来た兵力は多くなかった。

さてここで、日本軍にとっての幸運が訪れる。長沙を攻略した日本軍であったが、長沙城の入城を禁じた。略奪などの戦争犯罪の対策として出されたものだった。陥落後の夜、米軍機が来襲し、陥落した長沙を焼き払った。もちろん、城外にいた日本軍は被害を受けなかったのである。

問題はここからであった。長沙で中国軍を打ち破った第11軍は、今なら防備の甘い衡陽を「奇襲攻略」出来ると考え、第68師団、第116師団を以て、衡陽に向かわせた。6月26日に第68師団は郊外の衡陽飛行場を夜襲によって、一晩のうちに奪取した。そして、6月28日より衡陽を包囲し、攻撃を開始した。ところが、砲兵の到着を待たずして行った攻撃は、強固な防衛設備と頑強な抵抗に遭い、頓挫してしまった。そればかりか、第68師団の師団長が前線で指揮を執る中、司令部に迫撃砲弾が命中し、重傷を負った。衡陽への第一次攻撃は7月2日に停止された。

衡陽は守備していたのは、方先覚將軍率いる4個師であった。方先覚將軍は、かつての第2次長沙作戦において、日本軍から長沙を守り抜いた名将であり、その能力を衡陽にて存分に発揮することとなる。

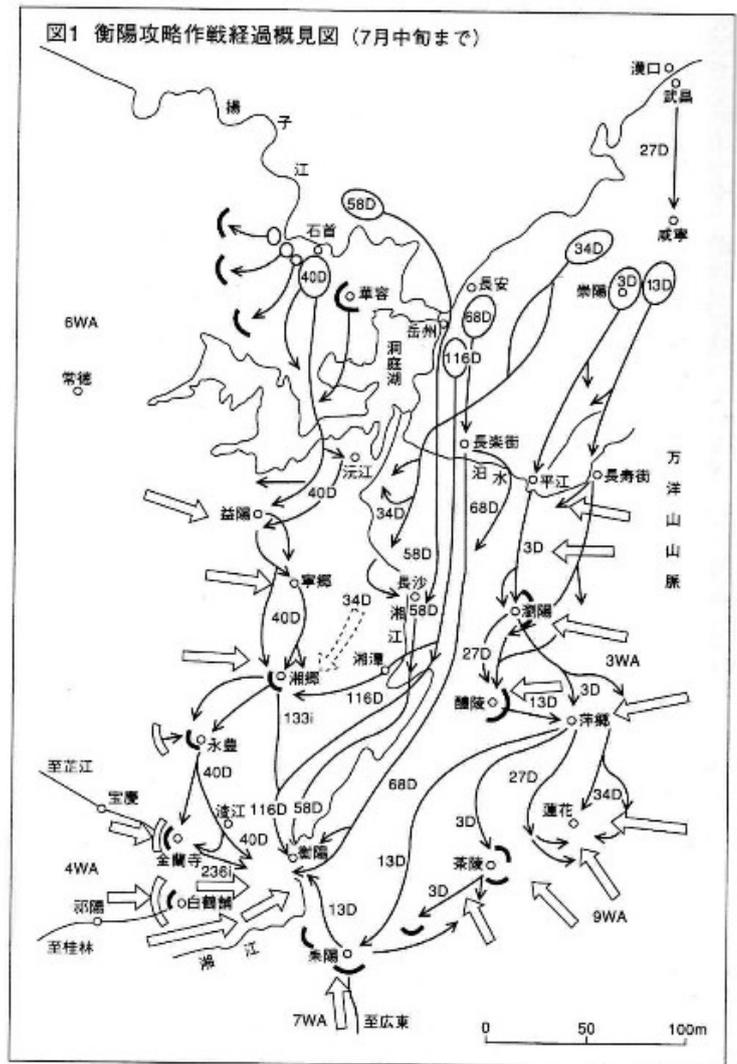
いったん態勢を整え、砲弾の補給をある程度行い、7月11日には衡陽の第2次攻撃を開始した。敵はさらに防備を固め、進展はほとんどなく、またもや攻撃は中止となった。この時、第68師団・第116師団の損害は甚大で、兵のみならず、将校にも甚大な被害が及んだ。これまでの部隊編制を維持できなくなるほどだった。また、この間にも、蒋介石はありとあらゆる兵力を衡陽に向け、解囲するように指示した。衡陽の戦いはまさに、大陸打通作戦の天王山となった。

まず、衡陽の南東部に位置する茶陵付近から第9戦区軍が反撃を開始し、また、衡陽の西方からも、大兵力が攻め寄せ、衡陽の解囲に全力を注いでいた。

ここで、作戦方針の食い違いが発生した。現在押し寄せている中国軍を撃滅さえすれば、衡陽も直に落ちると考えるグループと、衡陽攻略に全力を注ぐべきとするグループに分かれた。しかし、元の方針に立ち戻って考えてみよう。野戦軍撃滅は二の次では無かったのか。

こうして、大本營の方針（後者）を優先することとなった。すなわち、第13師団、第58師団を衡陽の攻略に向かわせ、第40師団で衡陽西方の側面を守らせ、第3師団、第27師団、第34師団を第9戦区軍の撃滅に向かわせることとなった。そして、第64師団が後方警備の任に当たることになった。京漢作戦から転用する第37師団は到着が遅れ、第11軍は戦力の全てを出し尽くしていた中で、衡陽第三次攻撃に臨んだ。予備兵力が一切ない状態であるから、もはや失敗は許されない博打のような状態であった。先手を打ったのは中国軍であった。8月1日から第40師団が守る衡陽西側面に解囲を目指す中国軍が押し寄せた。第40師団の担当する正面は24km。あまりに広い正面幅に第40師団はじりじりと押され、参加した将校の述懐によれば、あと2、3日が限界といった所まで追い詰められていたという。その中で重砲の展開を待ち、8月4日に第三次総攻撃は開始された。第40師団の正面が突破され、衡陽が解囲されるのが早いか、それとも、日本軍が衡陽を陥落させるのが早いかという競争が始まった。結果として、8月7日に方先覺将軍が降伏し（のちに監視の目をかいくぐって逃亡する）、辛うじて日本軍が勝利を収めた。破綻しかかった戦線を、衡陽を攻略した部隊で急遽取り繕い、事なきを得たのであった。

このように、大陸打通作戦最大の山場となった衡陽の戦いは終了した。日本軍の損害は、日本側での集計は存在しない。しかし、衡陽第2次攻撃が頓挫した7月20日時点で、湘桂作戦開始からの累計で、戦死は3860人に及び、戦死・戦傷・戦病を合わせると、ほぼ2万人に上っている。ここまでの記録しか正確には残っていないのだ。一説によれば、衡陽戦のみで、死傷者が2万人に及ぶとしている。



その後、追撃戦を行ったが、御多分に漏れず、中国軍をまたも取り逃がした。湘桂鉄道に沿って、進撃を再開し、昼夜問わず進軍した。その結果、米軍飛行場のあった零陵、全県、興安に到り、桂林まではもはや目と鼻の先にまで迫っていた。しかし、大本営はここで1カ月半の進撃停止を命じた。桂林と柳州を守る軍はもはや弱体であったのにも関わらず、停止を命じたのは衡陽がトラウマになったからと言われている。「奇襲」によって衡陽を1日で落とすと第11軍は豪語していたのに、43日も費やしたばかりか、甚大な損害を負ったことが、桂林で再び起こらないとは限らないと判断したようである。

また、ここでこのまま作戦を続けるべきか否かという議論が大本営で起こった。なんと参謀本部では作戦部以外の全てが反対したのである。参謀総長（東條英機を経て、梅津美治郎に交代）ですら、反対であった。当時、インパール作戦が大失敗し、兵站の不足によって、大陸打通作戦もインパール作戦の二の舞になり得るという意見であった。しかし、服部作戦部長は反対を押し切って作戦の続行を決めさせた。

3.湘桂作戦 前段第二期・後段（ト号作戦）

11月3日の明治節に進軍を再開し、11月10日には桂林と柳州どちらも攻略してしまった。あっさり過ぎる結末であった。結果論だが、1カ月半の停止は全く必要無かった。その後、11月24日に南寧を攻略し、12月10日仏印との接続に成功し、大陸打通が文字通り達成された。

4.南部粵漢打通作戦

大陸打通作戦の目的として、1945年1月に作戦を開始し、粵漢線を打通した。2月上旬に遂川（新竹空襲の発進地）、南雄、贛州の飛行場を占領し、飛行場占領という大陸打通作戦の目的を完全に達成することとなった。（もはや消化試合なので湘桂作戦の後段と共に省略する）

5.結果

作戦の結果として、京漢・湘桂・粵漢鉄道は打通され、仏印との接続も成功し、大陸は一本の道でつながった。安全かはともかくとして、釜山から柳州まで鉄道でものを運べるという陸運が完成し、陸路でシンガポールまでつながったのであった。中国軍に与えた損害は、戦史叢書によれば、75万の損害を与え、湖南など穀倉地帯を失ったことから、軍の保有力を50万減じさせたと結論付けた。これが事実であるかの史料批判を行うほどの資料がないため割愛するが、大きな損害を与えた事には違いなかっただろう。しかし、問題は損害を与えた事が国際関係においてはまた違った作用をするのであるが、ここは後述する。

中国側の打撃具合は考えておきながら、自軍の損害についてはまとまった史料が存在しないが、十数万の損害を出したであろうと推定されている。こんなにぼかしたようにしか書けないのが実に残念である。

第三章 大陸打通作戦、成功か否か

ここまで大陸打通作戦の史実について見ていった。ここからは分析を加えていく。

作戦目的

まず、作戦目的は大本営による「一号作戦要綱」においては、「敵を撃破して、京漢・湘桂・粵漢の鉄道沿線の領域を確保して、空軍基地を覆滅し、跳梁を封殺する」ことであり、支那派遣軍による「一号作戦計画」では、「帝国本土空襲並びに海上交通破壊の企図を封殺する」と「重慶政権の継戦意図を破摧衰亡せしむる」の文言が追加された事は既に述べた。

では、一つ一つ検証していこう。

「敵を撃破して」

これに関しては、大いに成功した。衡陽など苦戦はあったものの、日本軍がこのように占領地を拡大させたことは、敵の撃破あってのことである。もちろん、包圍殲滅とはならなかったものの、作戦目的としては達成されたものと見做せるだろう。

「京漢・湘桂・粵漢の鉄道沿線の領域を確保して」

これも上記と同じく、計画通りに達成された。

「空軍基地を覆滅し、跳梁を封殺する。」

これに関して言えば、まさに失敗そのものであった。中国の広大な土地がある中で、たかだか衡陽や桂林、柳州といった飛行場が取られたところで、その代わりの土地が足りないことなどあり得ようか。空軍基地は成都、西安、重慶をはじめ、老河口、芷江などで増設された。衡陽や桂林、柳州を占領しても空襲が止むことはなく、敵に制空権を取られ、ますます空襲は激化するばかりであった。

「帝国本土空襲並びに海上交通破壊の企図を封殺する」

これは、この作戦が実行されるに至った最大の理由である。結果からして、これを達成する事はできなかった。前提となるべき敵の撃破や、鉄道沿線の要域の確保は達成された。しかし、先ほど述べたように、中国に飛行場の用地などいくらでもあるのだ。前提が間違っているとと言っても過言ではないだろう。飛行機を地上で追い回すという構図が滑稽そのものだった。

あえて言えば、この先、中国から日本本土の戦略爆撃が行われる事はなかった。戦略爆撃の基地となったのは、サイパンやテニアンなどのマリアナ諸島であった。1944年7月にサイパンが陥落し、11月24日にはマリアナの基地を出撃したB-29が本土を初めて爆撃した。日本軍はその事実を突きつけられてもなお、大陸打通作戦を止めようとはしなかった。マリアナの失陥は、大陸打通作戦の意義を失くしていた。また、1944年の6月16日、湘桂作戦が始まり、長沙へと進撃している途中であった、には西安の基地を出撃したB-29が北九州を爆撃した。西安進攻はそもそも作戦には入っていない。そう、この大陸打通作戦は元から無意味なものだったのだ。鉄道の沿線の占領、飛行場の覆滅も計画通り成った。しかし、大陸打通作戦では日本本土への空襲は止められなかったのだ。

さて、では大陸打通作戦で得たものとは何だったのか。第40師団隷下の連隊作戦主任として大陸打通作戦に従軍した佐々木春隆は、

一号作戦を 思い立った時点では、支那派遣軍百万を活かす唯一の戦略であっただろう。だが時の経過とともに戦局に取り残されて、数万の犠牲を払って当初の作戦目的を完遂してみたものの、戦局に寄与するところは殆どなく具体的な効果は、航空警戒幕を推進したことと、(筆者註:大陸打通が成ったことで)第22、37師団を南方軍に、第27、40師団を広東に転用できただけと見られている。(佐々木春隆「大陸縦貫・一号作戦」『完本・太平洋戦争(下)』所収)

と総括している。将兵は死に物狂いで戦い、多くの犠牲を出した。しかし、戦略が完全に誤っていたのである。米軍は東方より迫ってきている。ニューギニアや太平洋の島々の戦局は悪化するばかりだ。であるのに、日本軍は西に攻勢をとった。戦略の方向が真逆であったのだ。大陸打通作戦の戦術的な長所や短所はあったが、それらを評価する以前に、この作戦の意義など無かったのだ。確かに、大陸打通は成った。しかし、確保した鉄道線も、修復する資材が足りず、占領地の支線のレールを剥がして転用する始末である。鉄道・自動車輸送共に、空襲の餌食となり、到底運用できるような状況では無かった。「大陸打通」の面から見ても、作戦の戦略的失敗は明らかだった。

「重慶政権の継戦意図を破摧衰亡せしむる」

これにおいては、前章で述べたように、国際関係に大きな影響をもたらした。それは、『事例研究 日本と日本軍の失敗のメカニズム』によれば、ソ連の対日参戦を招いたとする。米軍の主要な航空基地であった桂林を奪われた事は、アメリカの蒋介石政権への不信を招いた。また、1945年2月のヤルタ会談にてソ連の対日参戦が決まった。なお、この会議に中国は招待されなかった。

国際関係と呼ぶことはできないが、大陸打通作戦は中国共産党を大いに利することになった。日本の華北占領地域では警備兵力が作戦への参加によって減少し、また、中国側でも、共産党の牽制に当たっていた部隊を引き抜いて日本軍と戦う必要性に迫られた。よって、空白地帯となった華北にて共産党は勢力を大いに拡大させたのだった。第一章で昭和天皇が作戦の実行に対して、治安が悪くならないのか、という質問はまさにその危険性を突いていたのであった。

結論として、はっきり言おう。大陸打通作戦は失敗だった。

第4章 大陸打通作戦での戦術的問題点と戦争犯罪

本当はここをもっと考察したかったのだが、~~締め切りの問題で~~（締め切りに間に合っていない 編集担当より）概要だけにとどめることとする。申し訳ない。

兵站の問題

この大陸打通作戦における問題点のうち、日本軍の最大の課題は兵站の弱さにあった。衡陽で苦戦したのも、大砲と砲弾の輸送に手間取ったからに他ならない。

悪天候によって、道路がぬかるんで通行不能になったり、中国軍の撤退時に徹底的に破壊したりすることによって、前線への補給は滞りがちであった。陸路水路問わず、空襲もまた兵站戦の途絶を招いている。

また、補給不足はすなわち物資不足であり、負傷や病気で野戦病院に入院しても、衛生材料もなければ、食糧も不足していた。それは、第68師団の野戦病院で入院した患者の37%が死亡したことにも表れている。また、将兵は負傷しても野戦病院に入院しながら、出来る限り部隊に留まろうとした。入院しても、抜け出す者までいる始末である。このように野戦病院の環境が劣悪であり、入院していても、栄養失調で抵抗力を失い死んでしまうような場所であった。

これは、戦没者の死因にも如実に表れる。『支那駐屯歩兵第三連隊誌』によれば、1944年4月から帰国する間（大陸打通作戦は1945年に終わっている）、期間は不適切ではあるが、1647人が戦没した。その内訳は、

戦死 509人
戦傷死 84人
戦病死 1038人
その他 16人

である。このように補給の途絶が栄養失調を招き、死亡した例が多かった。また、これには兵員の質が低下したことも関係している。以下の述懐が如実に示している。

補充員はたくさん来た。その半数は第二国民兵の未教育兵、年令も三十才以上、部隊へ着くのがやっと、ほとんど半病人のありさま、こんな様子だから現地での教育もできず、八月下旬再び行動開始で出発したが、約1ヶ月ぐらいの間にほとんど野戦行動に堪えず落伍してしまった。昔日の皇軍の面影はさらさない。（『第三師団衛生隊回顧録』）

制空権

航空機の協力の下、空地一体で作戦を実施することは、近代戦の最低条件であった。もちろん日本軍がこれは認識していなかったわけでも、無視した訳でもない。しかし、制空権を完全に喪失していた。機数の比較を見てみよう。

当初は、敵の3分の1の兵力があれば問題ないとされていたが、大陸打通作戦の終盤には8倍の兵力差となっていた。(航空戦自体は大陸打通作戦以前の問題なので省略した。)

表1 飛行機数比較表

	5.27 開戦時	6.18 長沙占領時	8.8 衡陽占領時	11.10 桂林占領時
米軍	340			
米中混成軍	100 合計 520(2)	630(3)	750(5)	800(5.3)
重慶軍	80			
日本軍	230(1)	220(1)	100(1)	150(1)

注. ()は比率概数。「湘桂作戦関係資料」所収の表より作成。

また、完全に被制空下では、夜間行軍を強いられた部隊が多かったようだ。

行軍は敵機を考慮して、すべて夜間行軍になった。夕刻の4時から始まり、翌朝の4時まで規則正しく行われた。平均毎日20～30キロ。(『歴戦1万5000キロ』p.322)

これは、湘桂作戦後段での話だが、どこも同じような話で、特に湘桂作戦中はいつでも空襲の危険にさらされていた。また、空襲は補給状況をさらに圧迫させた。

略奪と苦力

補給が全く途絶えてしまった結果、犠牲となったのは、中国の一般民衆であった。食糧の徴発という名目ではあったが、実態は略奪であった。また、作戦を計画する上でも、そもそも食糧は現地調達することになっていた。大陸打通作戦がインパール作戦のような飢餓が深刻な状況にはならなかったのは、湘桂作戦が行われた湖南省は明代に「湖広熟すれば天下足る」といわれたような、豊かな土地であったことも関係している。

また、食料を補給する人がいなければ、輸送する人員もいなかった。そこで、中国軍の捕虜や、一般人を使って荷物を運ばせていた。これをく苦力(クーリー)という。給料を払ったりする場合もあったようだが、基本的に、力に任せた略奪行為であった事には違いない。部隊によっては、兵員数より苦力の方が多い場合もあったようである。(それだけ、兵站というものは人手が掛かるものなのである。)

もちろん、すべてがそうだったのではない。「焼くな、殺すな、犯すな」という三悪追放令が出され、第110師団が担任戦場であった鄭州では、占領直後から婦女子も夜間に外出できるようになるほど、治安が回復し、その恩義から終戦後に日本への帰国に便宜を図ってもらったこともあるようである。

第5章 終わりに

さて、大陸打通作戦の経過と私の考察を書いていったのだが、どう感じたであろうか。陸軍最大規模の作戦となった大陸打通作戦は完全な失敗であった。目標の達成には成功したのだが、作戦から得られるものは無かったのである。

また、中国において日本が行ってきた行為の数々は実に酷いものであった。「何もやっているから」という理屈も多々聞くが、それはそれ、である。まずは、過去の出来事

を知り、反省し、繋いでいく。それが戦後に生まれた我々にこそ課せられた使命である。

何より、大陸打通作戦といい、陸海軍問わず、太平洋戦争への関心は薄れていつている。ましてや太平洋戦争中にも中国にてこのような大作戦があったことなど、多くの人は知らないだろう。大陸打通作戦の開始から77年経った。多くの将兵が戦場の露と消えていったあの戦争からますます遠ざかっていく。関心が消えゆくことも、自然の摂理だろう。だが、未だに太平洋戦争における議論はタブー視されるばかりで、戦争はいけないという所で思考が停止している。もっと研究が活発になることを祈り、最後までさせて頂く。

あとがき

こんな長ったらしい記事を読んでもくださった読者の皆さんに感謝します。

まず、私も大陸打通作戦というのはそもそもよく知りませんでした。私の専門は太平洋戦争における海軍であり、陸軍自体専門外でした。きっかけは正直覚えていません。何か無性に大陸打通作戦への興味が湧いてきた、という感じです。Wiki見て興味が湧いたような気がします。それを調べに図書館に久しぶりに行った時、「日中戦争全史」が目に入ったことは、私が大陸打通作戦を調べてみようと思う最大のきっかけになったと思います。そこで私は、日中戦争が太平洋戦争下でも続いていたことに気づかされた(?)のです。あとは、「後期日中戦争」もタイトルだけ聞いて気になっていたところではありました。日本史上でも大陸打通作戦は最大規模であるのと、よく日本軍最後の勝利みたいな書き方が多いので、より興味が湧いたのだと思います。

下衆な話ですが、作戦の規模が大きかった分、それだけ、資料も多かったというのがあります。とはいえ、太平洋戦争に関する書籍・資料ってやっぱり本当に少ない。特に陸軍はそうです。そもそも論ですが、日本軍の記録態勢ってやっぱり杜撰そのものです。終戦時に多くを燃やしてしまったところはありますが、どうも原因はそれだけではない。日本人は几帳面だとよく言われますが、個人的は疑問符をつけたいものではあります。本当は、どうして規模と注目度が一致しないのか、という所まで考察したかったですね。まあ「人気」ってというのは不平等なものなので当然という結論にはなりませんが、太平洋戦争の話をするにも陸軍の話をする人は結構少ないのではないのでしょうか。ところが、私の力が尽きてしまいました。~~今も珈琲の力を借りて書いています。~~

さて、読者の皆さんも、気になったことをとことん調べてみてはいかがでしょうか。深く調べれば調べるほど、特に原典にあたれば尚の事、難しいでしょう。大事なものは、その深さでは無いということだけはぜひ皆さんに伝えたい事です。歴史を知る醍醐味とはここにあるのではないのでしょうか。

そして、この記事の提出が、部長であるにも関わらず、完成が部で最後となってしまったことは本当に申し訳ないです。本当に迷惑を掛けました。(本当に大変な迷惑を被りました。編集担当より)そんな中でも、完成にこぎ着けられたのは、部員の支えのおかげです。本当にありがとうございました。

参考資料

- 佐々木春隆「大陸縦貫・一号作戦」『完本・太平洋戦争(下)』所収(1992年/文藝春秋)
- 笠原十九司『日中戦争全史〔下〕』(2017年/高文研)
- 藤原彰『餓死した英霊たち』(2001年/青木書店)
- 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 一号作戦〈1〉河南の会戦』(1967年/朝雲新聞社)
- 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 一号作戦〈2〉湖南の会戦』(1968年/朝雲新聞社)
- 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 一号作戦〈3〉廣西の会戦』(1969年/朝雲新聞社)
- 佐々木春隆『大陸打通作戦』(2008年/光人社)
- 佐々木春隆『B29基地を占領せよ』(2008年/光人社)

藤崎武男『歴戦1万5000キロ』(1999年/中央公論新社)
広中一成『後期日中戦争』(2021年/KADOKAWA)
筒井譲二『増補版 太平洋戦争通史』(2017年/文芸社)
藤井非三四『帝国陸軍師団変遷史』(2018年/国書刊行会)
伊藤正徳『帝国陸軍の最後 第二巻』(1981年/光人社)
原剛「運命を変えてしまった知られざる大作戦・一号作戦」『事例研究 日本と日本軍の失敗のメカニズム』所収(2013年/中央公論新社)
吉田裕『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』(2018年/中央公論新社)
『歴史群像 欧州戦史シリーズ Vol.12 ドイツ装甲師団全史II』(2000年/学習研究社)
『戦車と戦車戦』(2017年/光人社)
芳井研一『大陸打通作戦の意義』(2014年)

ナポレオンの生涯

11R 平井孝治

ほとんどの人が知っていると思うが、ナポレオンはかつて18世紀、19世紀のフランスで活躍していた軍人で、フランス革命を起した後のフランスで皇帝にまで上りつめた人物である。

ナポレオンはパリの陸軍士官学校の砲兵科に入学し、ここで通常全過程を終えるには4年程かかるのに対して彼はその学校が開校して以来最短の11ヶ月でその学校を卒業するなど、当時から才能を感じさせる逸話が多い。彼はその後軍隊に所属し、トゥーロン攻囲戦で見事な活躍をして一躍国民の英雄になり旅団將軍まで昇進した。そして彼は順調に昇進し1799年にクーデターを起こし独裁権を握った。彼は「万人の法の前の平等」「国家の世俗性」「信教の自由」「経済活動の自由」「教育の重要性」などの近代的な価値観を取り入れたが暗殺未遂等の事件が起き、独裁色を強めていった。彼は自分を終身統領にし、さらに国民投票でナポレオンの子孫にその位を継がせるといふ皇帝の地位についた。そしてその後のフランスは連戦連勝し、イギリスへの制裁のため大陸封鎖令を出したがロシアがそれを破りそれに激怒したナポレオンは60万の大軍でロシアに侵攻する(ロシア遠征)。しかし物資を失い冴にかかったナポレオンは大敗し、その後休戦に持ち越して粘るが第六次対仏大同盟に敗れ皇帝を退位され、島流しにあうがその2年後にまた復位した。だが復位してからおよそ100日後にまたワーテルローの戦いに敗れ孤島セントヘレナに幽閉され、そこで生涯を終えた。

参考文献

木村 尚三郎(監修)柳川 創造(シナリオ)『世界の歴史 ナポレオンと激動するヨーロッパ』(1986年/集英社)

活動報告

新型コロナウイルス感染による休校が明けてから初めてオンラインで開催された輝玉祭を終え、永安世範副部長（当時）が第23代部長に就任し、永安政権は幕を開けた。政権交代後初の活動において、テーマを「織田信長」とすることが決定した。依然として新型コロナウイルスによる自粛の風潮が続き、活動時間や日程の制限が続きながらも、2021年秋季の輝玉祭に向けて始動した。2020年は当然ながら、当初の予定通りは進まず、2021年度に先延ばす形となった。永安部長の試みで2021年4月から「War Game」の導入やIT化による連絡網の構築が進められ、新たな側面からの歴史研究とよりスムーズな連絡が可能となった。感染状況を鑑みて、8月上旬の巡検旅行は中止となったが、2021年春季からは制限もやや緩和されたことで、模型の制作は進み、夏期休暇中には輝玉祭に使用するすべての模型を着手することができた。このころから部誌編集のプロジェクトや歴史研究部の歴史をまとめた「歴史研究部史（令和3年版）」の編纂も始まり、例年のパンフレットを「部誌」（本著）として刷新することで従来のものの上位互換となるものを編集することが編集者会議で決まった。一方、夏期休暇中に順調すぎるほどに進んだ模型制作であったが、2学期始業からは活動日を増やしたものの、進みが遅くなってしまった。輝玉祭で投稿する動画にはどうしても不可欠であるため、制作課長のもと急ピッチで進められた。その甲斐もあり、10月中旬ごろには当初予定していたすべての動画の撮影が終わり、無事に動画は輝玉祭に間に合う形で投稿された。動画では使わなかった「岐阜城」や「安土城」が頓挫することなく、完成が実現できたのも、制作課長のおかげだと考える部員は決して少なくはないといえることに間違いはない。また、今年は広報活動も盛んに行った。永安部長の発案で部長の配下に広報課を設置し、公式Twitterの開設による情報発信、ホームページを作成したことで、より多様な発信手段を得た。それが功を奏し、輝玉祭においての動画の再生数は順調に伸びている。輝玉祭においては、模型を用いた解説動画だけでなく、学校同士の世田谷学園とのコラボが決まったため、世田谷学園とのコラボ動画（8月下旬に本校に世田谷学園歴史部を招き、撮影を行った）や織田信長にちなみ、戦国時代の食糧（兵糧丸や芋がら味噌汁など）を再現するという趣旨の「戦国クッキング」という企画が発案された。動画撮影中、某部員が炊飯器を洗うというハプニングあったものの、無事に撮影は終了した。動画の制作は広報課長を中心に進められ、非常に高クオリティーな動画が完成したといえることに異論はないだろう。新型コロナウイルスによる世界的な爆発的感染拡大はいまだ収束が見えないままであるが、来年以降も新政権の下で、歴史研究部のより発展した姿を期待したい。

令和三年十一月六日 制作課長 長谷川慧（54R）
～品川区のキャンパスより目黒駅周辺のビル群を望んで

発刊に際して

我が部に於いて、平成16年は特別な年である。平成16年より、我が部では正式な記録が残っており、この年より、約20年という長年にわたり断続的に改革が続けられ、現在の我が部の形となっている。この改革によって、弱小部であった我が部は、部員50人を誇る強大部となった。けれども、この諸改革は娯楽としての歴史を追求しすぎてしまった。平成16年以前のことの記録はよく残っていないが研究活動を主とした部であった。初代部長が歴史学者となっていることからわかるだろう。歴史とは多義的な学問である。娯楽としても、教養としても、学術としても親しむことができる。そこが歴史のいいところである。けれども、教養として、学術としての歴史が全く忘れられ、娯楽としてだけで歴史が親しまれるのは問題である。我が部は娯楽として、教養として、学術として多義的に歴史を親しむ必要がある。そう思い、平成16年より絶えていた部誌を新たに「攻玉史論」と名付け、復刊した。

「攻玉史論」とは「攻玉」と「史論」を組み合わせた造語である。「攻玉」とは、我が校の建学の精神であり、『詩経－小雅・鶴鳴』の「他山の石、以て玉を攻くべし（よその山から出た粗悪な石でも、それを砥石に利用すれば自分の玉を磨くの役に立つ）」という故事より引用されたもので、一般的には「他山の石」として知られている。この故事は、すなわち他者の失敗も己を磨く手段となるという意味である。これは歴史も同じである。歴史とは成功だけでなく、失敗のあまたもの繰り返しによるものである。そのあまたもの人類の失敗から、私たちは学ぶことができる。これが教養としての歴史である。

「史論」とは、歴史の法則性を掴み、これから人類が、どう歩むべきかを示すものである。日本には三大史論書として、「愚管抄」「神皇正統記」「読史世論」が一般的に知られている。これらのものは、学術としての歴史である。

これらのことから「攻玉史論」は娯楽としてのみではなく、教養的且つ学術的に歴史を俯瞰しようとして、発刊するものである。

令和三年十一月六日 高一副部長兼編集長 松島絆

編集後記

このたびは攻玉社学園歴史研究部機関誌「攻玉史論」創刊号をご覧頂きありがとうございます。今年のテーマが「織田信長」ということで、血統・政策・家族・家臣にいたるまで、様々な視点から多角的に織田信長を考察していき、新たな織田信長像の構築に努めて参りました。また、今年度から新たにパンフレットから部誌になったということで、テーマ研究（主研究）ではなく、テーマに関係なく自らの欲するテーマを定めて行う個人研究の枠を大幅に増やしたので、是非そちらの方も見て頂けるとありがたいです。

さて、この度、前ページにあるように教養的且つ学術的な歴史を、というわけで平成16年から、およそ20年ぶりに部誌の復刊となったわけではありますが、お察しの通り、ほぼ Wikipedia 丸写しといったものがちらほら、いやかなり存在していますことは、ご容赦ください。これも、私のはっきりとせず、論文執筆をなかなか言い出さなかったばかりにおこったことで、まことに編集長の不徳の致すところでございます。ただ、そのような中で論文を多くの方に書いていただいたこと、この場を借りて、論文執筆者の方々には感謝申し上げます。また、20年ぶりの部誌の復刊というのを果たせたのも、部長をはじめとする先輩方の徳があればこそであります。高一である自分の我儘にお付き合い頂き、先輩方及び顧問の先生方、その他編集課員を始めとする関係者の方々には、あらためて感謝申し上げます。

令和三年十一月六日 高一副部長兼編集長 松島絆

攻玉社歴史研究部機関誌『攻玉史論』 第一号

令和三年度（2021）11月16日印刷・発行

編集・発行・制作・印刷 攻玉社学園歴史研究部 部長 永安世範

〒141-0031 東京都品川区西五反田5丁目14-2 攻玉社学園内

公式連絡先 kogyokusha.history@gmail.com

ホームページ <https://kogyokusha.wixsite.com/history>

攻玉社歴史研究部編集委員

編集長 松島絆 副編集長 大内和音 編集統括 内田大翔

編集担当 原田結心 平原昊 生嶋文敬

編集補佐 斎藤耕太郎 紙龍輝



令和三年度攻玉社学園歴史研究部集合写真
(2021年11月15日撮影)

令和三年度攻玉社学園歴史研究部

部長	永安世範
副部長	野口和礼
高一副部長	松島絆
編集長	松島絆
制作課長	長谷川慧
広報課長	平原昊
他部員	約50名